

般国道9号(安来道路)建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

(越峠遺跡・宮内遺跡)

KOSHITOUGE・MIYAUCHI

3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

一般国道9号(安来道路)建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

(越峰遺跡・宮内遺跡)
KOSHITOGE・MIYAUCHI

1993年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行なっています。

当安来道路においても、道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成元年度から平成3年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成5年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 神長耕二

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成元年度から一般国道9号（安来道路）建設予定地内遺跡の発掘調査を行っております。この報告書は平成元・2年度に実施した宮内遺跡（安来市宮内町）と、平成3年度に実施しました越峰遺跡（安来市黒井田町）の調査結果をとりまとめたものであります。

安来道路の建設が進められています安来平野一帯は、古代から文化が栄えた地域であります多くの遺跡が確認されております。今回調査を実施しました宮内遺跡からは、弥生時代～古墳時代の集落跡、古墳時代の横穴墓が発見されました。横穴墓内からは馬具、大刀をはじめたくさんの遺物が出土し、また石棺の前に石柱を有する特異な構造の埋葬施設が発見されるなど貴重な資料になることと思われます。越峰遺跡からは弥生時代～奈良時代の集落跡が見つかり、当時の人々の生活の一端をうかがい知ることができます。

本報告書が多少なりとも安来平野周辺の歴史を解明する契機となり、また広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるうえで役立てば幸いと存じます。

本書を刊行するにあたり、調査にご協力をいただきました建設省中国地方建設局松江国道工事事務所をはじめ関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

島根県教育委員会

教育長 坂 本 和 男

例　　言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成元～2年度に実施した、一般国道9号（安来道路）建設予定地内宮内遺跡と平成3年度に実施した越畠遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査組織は次の通りである。

調査主体 島根県教育委員会

事務局 平成元年度 [1989]

泉 恒雄（文化課長）、井原 譲（同課長補佐）、勝部 昭（同課長補佐）

野村純一（同文化係長）、吾郷朋之（同文化係主事）

加田恵康（島根県教育文化財団嘱託）

調査員 川原和人（文化課埋蔵文化財第二係長）、丹羽野 裕（同主事）、原田昭一（同主事）

石原 順（同教諭兼主事）、井上正志（同教諭兼主事）、宮本正保（文化課臨時職員）

事務局 平成2年度 [1990]

泉 恒雄（文化課長）、藤原義光（同課長補佐）、勝部 昭（同課長補佐）

野村純一（同文化係長）、坂根 繁（同文化係主事）

田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員 ト部吉博（文化課埋蔵文化財第二係長）、宮本正保（同主事）

石原 順（同教諭兼主事）、山尾一郎（同教諭兼主事）、江川幸子（調査補助員）

事務局 平成3年度 [1991]

日次理雄（文化課長）、藤原義光（同課長補佐）、勝部 昭（同課長補佐）

高橋 研（同文化係長）、伊藤 宏（同文化係主事）

加田恵康（島根県教育文化財団嘱託）

調査員 ト部吉博（文化課埋蔵文化財第二係長）、宮本正保（同主事）

寺尾 令（同教諭兼文化財保護主事）、石原 順（同教諭兼文化財保護主事）

山尾一郎（同教諭兼主事）、江川幸子（調査補助員）

事務局 平成4年度 [1992]

日次理雄（文化課長）、山根成二（同課長補佐）

高橋 研（同主幹<文化係長>）、伊藤 宏（同文化係主事）

勝部 昭（埋蔵文化財調査センター長）、久家儀夫（同課長補佐）

工藤直樹（同企画調整係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員 ト部吉博（文化課主幹<調査第二係長>）、宮本正保（同主事）

山尾一郎（同教諭兼主事）

調査指導者 山本 清（島根県文化財保護審議会委員）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、三辻利一（奈良教育大学教育学部教授）、井上貴央（鳥取大学医学部教授）、清水真一（奈良県桜井市教育委員会社会教育課文化財係主査）、三浦 清（島根大学教育学部教授）

遺物整理 野中洋子、長谷川弘子、桑谷美代恵、松浦礼子、陶山佳代、門脇卓子、森脇まゆみ、多久和文子、山根由利子、酒井智子、狩野京子、大島律江、佐伯明子、野坂栄子、増田弘子、家島千歳、柏谷恵以子、牛尾リヨ子、山本裕子、淀江正子、泉あかね、尾木照子、飯塚涼子、喜多川悦子、清水美緒子、金津まり子

発掘調査作業員

青戸弘義、池田 朗、石倉由比、石原愛子、石原静枝、板持勝義、井塙喜一、伊藤清、井上ヒサエ、岩佐節子、岩崎郁子、岩崎和女、岩崎茂子、岩崎静代、岩崎末子、岩崎美枝子、岩崎百合子、岩崎吉郎、岩田義道、宇那手安江、大江松代、大久佐一二、大西みづ子、大橋喜能、小田 純、梶村好江、梶村 緑、莉尾 岳、門脇範昌、金光利子、川合 章、木戸昭雄、木戸敦雄、木村善子、倉敷愛子、倉敷 均、近藤テル子、近藤春野、佐伯 実、坂田恵一、実重静子、清水邦大、砂流喜美子、砂流文子、隅田トメ子、田川佐二、田辺貞子、田村品吉、角森静江、飛田光代、内藤佐江子、内藤政江、中島光子、仲西 晋、仲西由美子、中西容子、永見英子、永見シゲヨ、長谷川一彦、飯橋アヤ子、平木敦夫、福間恵美子、二岡シズエ、二岡未子、細田鉢子、細田雪江、細田巳春、本藤敏子、牧野紋江、三笠好江、三沢恒子、三代一夫、三原茂子、山根房子、山辺みどり、吉木 寛、吉田盛一、吉野 賢、渡部品子、渡辺久夫

3. 掘図中の方位は、国土調査法による第III座標系の軸方向である。(但し越峰遺跡B区の方位は、磁北を示す。)
4. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行のものを使用し、「調査区位置図」は建設省松江国道工事事務所作成のものを浄書して使用した。
5. 本書で使用した遺構記号は、次の通りである。
S I…堅穴住居跡 S B…掘立柱建物跡 S D…溝状遺構 S K…土壙 S X…性格不明遺構
6. 本書の掘図では、基本的に縮尺を遺構 1/60、遺物出土状況 1/30 に、また遺物では須恵器 1/3、弥生土器・土師器 1/4、鉄製品を 1/4 に統一して載せた。
7. 遺物の実測は調査員の他江川があたり、遺物写真は宮本、佐々木が撮影した。
8. 掲載図面は宮本、石原、山尾が作成し、野中、桑谷、門脇、松浦、金津が浄写した。
9. 本書の執筆は上記調査指導の諸先生からの助言を受けて、宮本、山尾があたった。
10. 本書の編集は、宮本と山尾が協議してこれを行った。

本文目次

I 位置と環境	1
II 調査に至る経緯	5
III 調査に至る経過	5
IV 調査の概要	6
V 調査の結果	8
越峰遺跡 A 区	8
B 区	30
宮内遺跡 I 区	48
II 区	67
III 区	98
IV 区	103
VI 自然科学分析	134
宮内遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析 (三辻利一)	134
VII 小結	138
越峰遺跡	138
宮内遺跡	139

図 版 目 次

第1図 調査対象地の位置	1
第2図 越畠遺跡・宮内遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第3図 越畠遺跡調査区位置図	7
第4図 宮内遺跡調査区位置図	7
第5図 A区発掘前地形測量図	9
第6図 A区造構配置図	10
第7図 A区尾根上南北セクション実測図	11~12
第8図 A区S I - 01実測図	13
第9図 A区S I - 01出土遺物実測図	14
第10図 A区S I - 02実測図	15~16
第11図 A区S I - 03実測図	17
第12図 A区S I - 02、03出土遺物実測図	18
第13図 A区S B - 01、S X - 01実測図	19~20
第14図 A区S B - 02、03、04、05、06、07実測図	21~22
第15図 A区段4出土遺物実測図	24
第16図 A区S B - 08、09、10実測図	25~26
第17図 A区段1遺物出土状況	28
第18図 A区段1及び包含層中山土遺物実測図	29
第19図 B区中央セクション実測図	31~32
第20図 B区造構位置図	33
第21図 B区S I - 01実測図	34
第22図 B区S I - 01埋上中出土遺物実測図	34
第23図 B区S I - 02実測図	35
第24図 B区S I - 02出土遺物実測図	36
第25図 B区S I - 03実測図	37
第26図 B区S I - 03出土遺物実測図	37
第27図 B区S B - 01実測図	38
第28図 B区S B - 02、S D - 01・02及び周辺ピット群実測図	39
第29図 B区S B - 02、S D - 01・02及び周辺ピット群出土遺物実測図	41

第30図	B区S D-03・04及び周辺ピット群出土遺物実測図	42
第31図	B区包含層中出土遺物実測図	43
第32図	B区包含層中出土石器・土製品実測図	43
第33図	I区遺構位置図	49~50
第34図	I区S I-01実測図	51
第35図	I区S I-01出土遺物実測図	52
第36図	I区S B-01・S K-02実測図	53
第37図	I区S B-01出土遺物実測図	53
第38図	I区S K-02出土遺物実測図	54
第39図	I区S B-02実測図	54
第40図	I区S B-02出土遺物実測図	55
第41図	I区S K-01遺物出土状況実測図	55
第42図	I区S K-01出土遺物実測図①	56
第43図	I区S K-01出土遺物実測図②	56
第44図	I区S K-03遺物出土状況実測図	57
第45図	I区S K-03実測図	57
第46図	I区S K-03出土遺物実測図	58
第47図	I区土器群出土状況実測図	59
第48図	I区土器群出土遺物実測図	60
第49図	I区ピット群実測図	61
第50図	I区ピット群出土遺物実測図	61
第51図	I区土鍤溜り出土状況実測図	62
第52図	I区土鍤溜り出土遺物実測図①	62
第53図	I区土鍤溜り出土遺物実測図②	63
第54図	I区包含層中出土遺物実測図①	64
第55図	I区包含層中出土遺物実測図②	65
第56図	I区包含層中出土遺物実測図③	66
第57図	II区遺構位置図	68
第58図	II区S I-01実測図	69
第59図	II区S I-01出土遺物実測図	69
第60図	II区S I-02実測図	70

第61図	II区 S I -02出土遺物実測図	71
第62図	II区 S B -01実測図	71
第63図	II区 1号横穴実測図	73~74
第64図	II区 1号横穴玄室内石棺及び床面遺物出土状況実測図	75
第65図	II区 1号横穴石棺除去後実測図	76
第66図	II区 1号横穴石棺内・石棺南側・前庭部出土遺物実測図	78
第67図	II区 1号横穴石棺北側出土遺物実測図①	79
第68図	II区 1号横穴石棺北側出土遺物実測図②	80
第69図	II区 1号横穴石棺北側出土遺物実測図③	81
第70図	II区 1号横穴石棺北側出土遺物実測図④	82
第71図	II区 1号横穴出土大刀、鎌、刀子実測図	83~84
第72図	II区 1号横穴出土轡実測図	85
第73図	II区 1号横穴出土鞍金具実測図	87~88
第74図	II区 1号横穴出土馬具実測図①	89~90
第75図	II区 1号横穴出土馬具実測図②	91
第76図	II区 包含層中出土遺物実測図①	92
第77図	II区 包含層中出土遺物実測図②	93
第78図	II区 包含層中出土遺物実測図③	94
第79図	II区 包含層中出土遺物実測図④	95
第80図	II区 包含層中出土遺物実測図⑤	96
第81図	III区 A区調査後測量図	99~100
第82図	III区 B区調査後測量図	101
第83図	III区 包含層中出土遺物実測図	102
第84図	IV区 遺構位置図	103~104
第85図	IV区 S I -01実測図	105
第86図	IV区 S I -01出土遺物実測図	106
第87図	IV区 S I -02実測図	107
第88図	IV区 S I -02出土遺物実測図	108
第89図	IV区 S I -03実測図	108
第90図	IV区 S I -03出土遺物実測図	109
第91図	IV区 S I -04実測図	110

第92図	IV区S I -04出土遺物実測図	111
第93図	IV区1号横穴実測図	113~114
第94図	IV区1号横穴玄室内遺物出上状況、閉塞石実測図	115
第95図	IV区1号横穴出土遺物実測図	116
第96図	IV区S X -01実測図	117
第97図	IV区S X -01出土石棺残欠実測図	117
第98図	IV区地山直上出土遺物実測図	118
第99図	IV区包含層中出土遺物実測図	119



宮内I区
発掘調査作業風景
('90.5.16)



宮内遺跡
現地説明会
('90.12.15)



社日小学校
社会科の校外学習
('90.10.22)

I 位置と環境

宮内遺跡は、島根県安来市宮内町・佐久保町にまたがり所在する。安来市は島根県の東端部に位置し、北に中海を望み、市の中央には飯梨、吉田、伯太の三河川によって形成された安来平野が広がっている。安来平野は東西約13km、南北約13kmの広がりをもち出雲平野につぐ穀倉地帯である。本遺跡は、伯太川の堆積作用で形成された低地と東部の丘陵地が接する安来市街地の南側に位置している。

越峰遺跡は、安来市佐久保町・黒井田町にまたがり所在する。伯太川下流域の東岸、宮内遺跡の東約2kmに存在し、東部の丘陵地の南西側及び丘陵縁辺の谷部分に位置する。両遺跡とも「出雲國風土記」で言う意宇郡安来郷・柄鍵郷あたりに位置し、近くの十神山が「砥神島」と記載されていることからも、当時は、中海が近くに迫っていたものと考えられる。

さて両遺跡の所在する安来平野周辺は、県内でも有数の遺跡分布密度の高い地域である。しかし縄文時代以前の遺跡は、ほとんど発見されていない。それは諸河川の侵食作用によって下流に大量の土砂を流し、当時の遺跡が地下に埋められたためと考えられる。

現在知られている弥生時代の遺跡は50ヶ所ほどで、丘陵や台地上で多く発見されている。時期的には、弥生時代後期のものが多い。

安来平野では確実な前期の遺跡はまだ見つかっておらず、おそらく現在の水田の地下深くに眠っているものと考えられる。弥生時代の集落遺跡としては、八脇谷遺跡・潜戸山遺跡・十善遺跡などが知られている。八脇谷遺跡は、伯太川と吉田川にはさまれた大塚町の丘陵中腹にある。弥生時代中期～後期の土器を伴う竪穴住居が、3棟検出されている。谷合では、谷頭水田を開発していたと推測されている。潜戸山遺跡・十善遺跡も同様に、弥生時代中期～後期の土器を伴う竪穴住居が検出されている。埋葬遺跡としては、九重町の丘



第1図 調査対象地の位置

陵上で発見された九重土壙墓群が知られている。ここで出土した土器群は「九重式土器」と呼ばれ、山陰の弥生土器編年において後期の標式とされている。また終末期には、飯梨川以西の西赤江町の仲仙寺墳墓群や安養寺墳墓群で、四隅突出型墳丘墓と呼ばれる地域色の濃い墳丘墓が造られた。

古墳時代には安来平野周辺では多くの古墳が造られ、飯梨川以西の荒島町の丘陵上に造山古墳や大成古墳など、竪穴式石室を内蔵する前期の大型方墳が連続的に築かれている。中期には前方後円墳が築造されるようになり、飯梨川以東の伯太川・吉田川流域には全長25m以上の前方後円墳が7基確認されている。特に中海を望み、伯太川河口に位置する異売塚古墳は、舟形石棺を持つ全長43mの前方後円墳としてよく知られている。後期には横穴墓が多く造られ、特に安来平野の場合は、特筆すべき副葬品を伴うものが多いことに特徴がある。宮内遺跡に隣接する白コクリ遺跡では15基の横穴墓が検出されたが、その内2基の横穴墓からは組合せ式家形石棺が確認され、内1基からは単竜環頭大刀が出土している。さらに宮内遺跡から北東約1kmに位置する高広遺跡では丘陵斜面に合計13基の横穴墓が検出され、このうち1基の組合せ式家形石棺の中から金銅装の双竜環頭や馬具などが発見されている。ほかにも、宮内遺跡の南東約7kmに位置する鷺ノ湯温泉近くの鷺ノ湯病院跡横穴からは、環頭大刀や耳飾り、金銅製の冠立飾りなどきわめてすぐれた副葬品を出土している。横穴墓のほかには、飯梨川以西の岩舟古墳、塩津神社古墳、若塚古墳など、出雲地方の後期古墳を特徴づける石棺式石室が造られている。

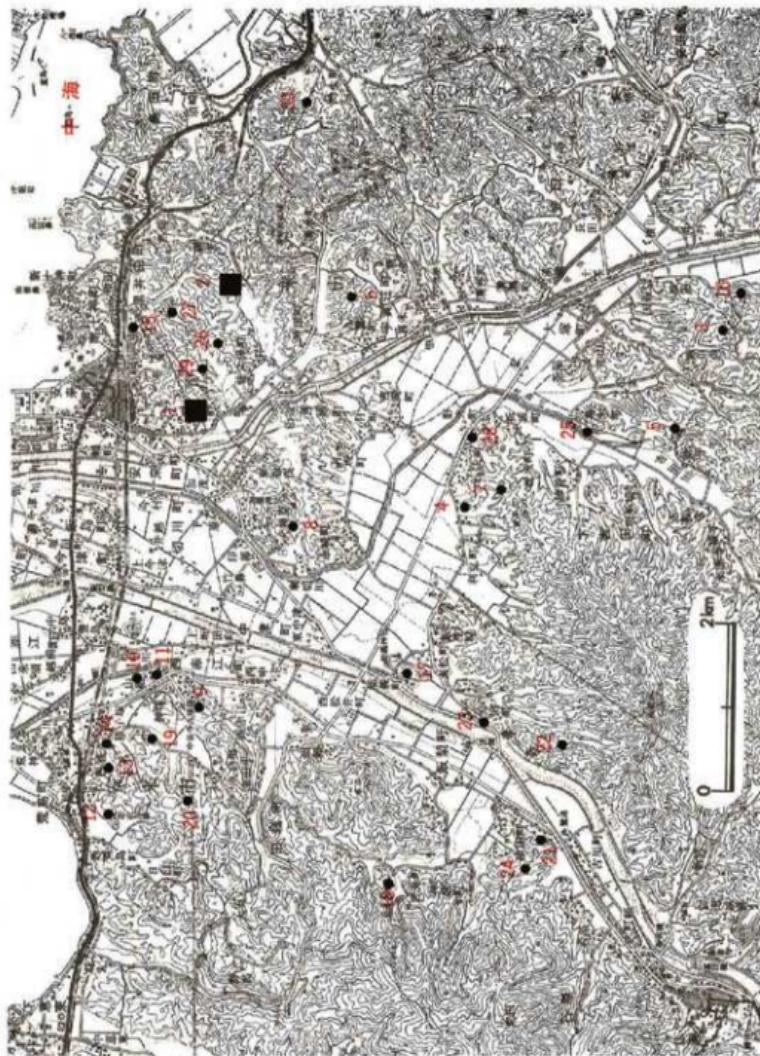
奈良時代の遺跡としては、本遺跡の南約3kmの丘陵縁辺に舍人郷正倉跡推定地や出雲地方最古の仏教寺院とされる教吳寺などの存在が知られている。

生産遺跡としては、宮内遺跡東隣りに位置する低丘陵の斜面に大原遺跡があり、玉作工房跡2棟からは勾玉・管玉の未製品、玉の材料である碧玉が多数発見されている。また宮内遺跡の南東約4kmの谷奥部には、出雲地方最古の須恵器窯のひとつに数えられる高畠古窯跡群（操業開始時期は5世紀と推定）が存在する。

周辺の遺跡一覧表

番	遺跡名	所在地	種別	概要
1	宮内遺跡	宮内町屋並	住民跡、横穴	竪穴住居跡7棟、横穴墓2基他
2	越畠遺跡	黒井田町高垣	住居跡	竪穴住居跡6棟、獨立柱建物跡12棟他
3	八脇谷遺跡	大塚町殿河内	住居跡	竪穴住居跡3棟、弥生土器
4	潜戸山遺跡	沢町潜戸山	住居跡	竪穴住居跡、弥生土器
5	十善遺跡	鳥木町十善	住居跡	分銅形土製品、弥生土器
6	九重遺跡	九重町地獄谷	土墳墓他	弥生土器
7	鏡尾遺跡	沢町鏡尾谷	土墳墓他	土師器
8	小谷遺跡	東切川町小谷	土墳墓	仿製内行花文鏡、刀子、土師器
9	仲仙寺墳墓群	西赤江町	墳墓群	円墳、方墳、四隅突出型墳丘墓
10	安義寺墳墓群	西赤江町	墳墓群	円墳、四隅突出型墳丘墓
11	宮山墳墓群	西赤江町宮山	墳墓、住居跡	方墳、四隅突出型墳丘墓、円墳他
12	造山古墳群	荒島町造山	古墳群	方墳、前方後方墳、竪穴式石室、鏡他
13	大成古墳	荒島町大成	古墳	方墳、竪穴式石室、二神二獸鏡、環頭大刀
14	仏山古墳	荒島町仏山	古墳	箱式石棺、環頭大刀
15	昆壳塚古墳	黒井田町浜垣	古墳	前方後円墳、舟形石棺
16	釜谷古墳	伯太町西母里西市	古墳群	前方後円墳、方墳、円墳
17	能義神社奥の院古墳群	能義町能義	古墳群	円墳
18	岩舟古墳	岩舟町岩屋	古墳	石棺式石室
19	塩津神社古墳	久白町	古墳	石棺式石室
20	若塚古墳	久白町	古墳	方墳、石棺式石室
21	鷺の湯病院跡横穴群	植田町植田	横穴群	横穴墓8基以上、組合式石棺、環頭大刀
22	椿谷古墳群	矢田町椿谷・宮谷	古墳群	前方後円墳5基、横穴墓10基以上
23	矢田横穴群	矢田町須賀谷	横穴群	横穴墓10基、家形石棺
24	かわらけ谷横穴群	植田町林原	横穴群	横穴墓13基、環頭大刀、金環
25	鳥木横穴	鳥木町	横穴	組合式家形石棺、辻金具、銀装主頭大刀他
26	臼コクリ遺跡	佐久保町臼コクリ	住居跡、横穴	竪穴住居跡6棟、横穴墓15基他
27	高広遺跡	黒井田町	横穴他	横穴墓13基、環頭大刀、馬具
28	教吳寺跡	野方町真崎	寺院跡	心礎、瓦、泥仏
29	大原遺跡	佐久保町	玉作跡	勾玉、管玉未製品、碧玉
30	高畠須恵器窯跡群	門生町高畠	窯跡	窯跡3基以上、工房跡4基

(昭和二十一年) 沖縄の戦闘と沖縄の地形を基に作成
第2図 沖縄戦・宮内連隊が位置する地図



II 調査に至る経緯

今回報告する越畠遺跡、宮内遺跡の調査は、一般国道9号（安来道路）建設工事に伴い、1989年に開始された発掘調査の一環として行われたものである。

一般国道9号（安来道路）は、当初一般国道9号バイパスとして計画され、1972年にこれにかかる最初の調査が実施された。その後、1987年に高規格道路に設計変更され、ルートの変更が行われたため再度分布調査を実施し、1989年に発掘調査を開始した。

越畠遺跡は、1991年、宮内遺跡は、1989・1990年の2カ年に発掘調査を実施した。なお宮内遺跡については、その後横穴墓が発見されたため、1992年に短期間の発掘調査を行った。

III 調査の経過

越畠遺跡は、調査区を大きくA区・B区に分け、7月15日にB区から調査を開始した。B区では竪穴住居跡3、掘立柱建物跡2などの遺構を検出した。A区はB区に引き続いて、7月23日から調査を実施し、竪穴住居跡3、掘立柱建物跡10などを検出した。この後、A区、B区とも写真撮影、遺構実測を行い、12月20日に現地での調査を終了した。

宮内遺跡はI～IV区の調査区を設定し、1989年7月4日にII区の調査を開始した。II区では、竪穴住居跡2、掘立柱建物跡1などを検出し、写真撮影、遺構実測の後12月22日に調査を終了した。I区は、1990年4月23日に調査を開始し、竪穴住居跡1、掘立柱建物跡2などの遺構を検出した後、写真撮影、遺構実測を行い、7月14日に調査を終了した。III区とIV区は、I区の調査終了後並行して調査を実施した。III区では、須恵器、十師器などの土器類、緑色凝灰岩などが出土したが、遺構は認められなかった。IV区では、竪穴住居跡4、横穴墓1などを確認し、写真撮影、実測を行った後、12月21日に現地調査を終了した。

また、1991年12月、II区で横穴墓が発見されたため、翌1992年1月7日から2月7日まで発掘調査を実施した。

IV 調査の概要

越峰遺跡

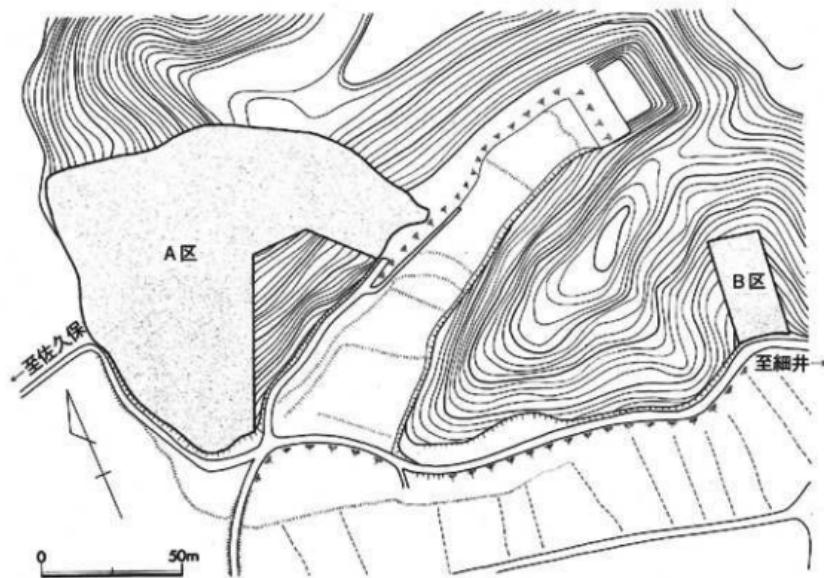
越峰遺跡では、A区で弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡3、古墳時代終末～奈良時代頃の掘立柱建物跡群を、B区では弥生時代中期～古墳時代初頭の竪穴住居跡3と掘立柱建物跡2他が検出された。

A区は、北東から南西に延びる尾根の先端部に当たり、最高所で標高35m、水田面との比高差29mを測る。最高所は45m×15mの平坦面となっており、ここでは遺構は検出されなかつたが、周辺の尾根上からS I-01～03を検出した。また、東側斜面で、斜面を削り出して設けられた階段状の平坦面から、掘立柱建物跡群(S B-01～10)と多数のビットが検出された。西側斜面では須恵器、土師器などが少量出土したが、遺構は確認されなかつた。B区は、北東から南西に延びる2つの丘陵にはさまれた緩斜面で標高は8～15m、水田面との比高差は3mをはかる。検出した遺構は、S I-01～03、S B-01、02、S D-01～04とビット多数である。

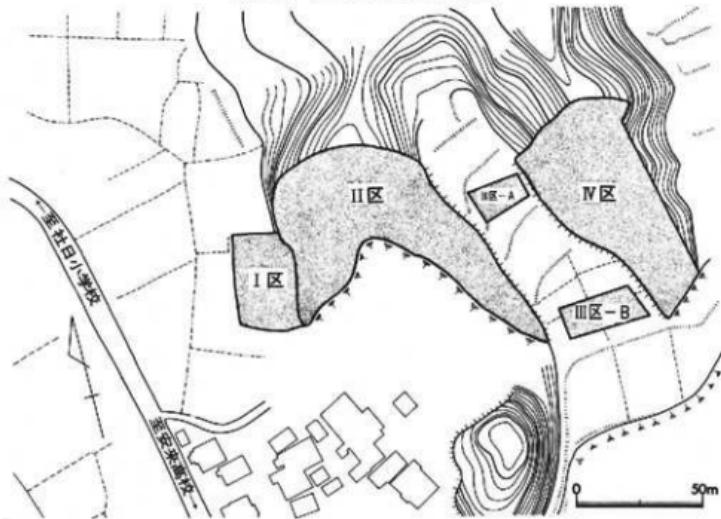
宮内遺跡

宮内遺跡では、I～IV区で弥生時代中期～後期の竪穴住居跡6、弥生時代中期の掘立柱建物跡1、土壙1、古墳時代の竪穴住居跡1、土壙1、横穴墓2、奈良～平安時代の掘立柱建物跡1、土壙1を検出した。

宮内遺跡I区は、近年まで耕作を行っていた水田で、標高は約4mである。遺構は奈良～平安時代頃の掘立柱建物跡(S B-01)、弥生時代中期の竪穴住居跡(S I-01)と掘立柱建物跡(S B-02)、土壙3などが検出された。II区は、I区の東側に位置し、南へ延びる丘陵の先端近くで、最高所の標高は20mをはかる。I区との境界付近から、弥生時代中期の竪穴住居跡(S I-01)、尾根上から古墳時代初頭の竪穴住居跡(S I-02)、東側斜面から掘立柱建物跡(S B-01)、横穴墓1を検出した。III区は、II区とIV区にはさまれた標高3m～9mの緩斜面で、最近まで水田であった。この調査区は、A区とB区に細分し調査を実施したが遺構は検出されなかつた。IV区は、宮内遺跡では最も東側に位置し、最高所で標高25mを測る丘陵である。尾根上と西側斜面から弥生時代中期～終末の竪穴住居跡(S I-01～04)と横穴墓1を検出した。



第3図 越畠遺跡調査区位置図



第4図 宮内遺跡調査区位置図

V 調査の結果

越跡遺跡

A区

A区は遺構の時期、性格、立地から、尾根上のものと東側斜面のものに大きく分けられる。A区の基本的な土層は、尾根上では表土が約10cm、茶褐色土が深いところで約30cm、浅いところでは表土のすぐ下で地山面に到達するところもあり、遺構はいずれも地山面に設けられたものであったが、非常に浅い面で確認された。

東側斜面には、階段状に4つの平坦面が存在し、その最下段（以下段1）と最上段（以下段4）から遺構が確認された。平坦面の規模は、段4が約30×10m、段1が16×4mである。また、梨畑の造成や道路の拡幅の影響で、遺構面が削られた部分も存在する。上層は、表土が20～50cm、遺構面直上には地山のブロックを含む土が堆積し、そのあいだに何層か土が堆積するという状況で、平坦面同士の前後関係については確認できない。

S I - 01 (第8図)

A区の北端部、標高33mを測る尾根上に位置する隅丸方形の堅穴住居跡である。規模は周壁肩部で一辺4.6mを測り、現存する壁の高さは約30～50cmである。

住居の床面からは、主柱穴4と中央ピット、溝を検出している。柱穴間は約2.6mで、ピットの上縁径は約80cm、深さは50cm～70cmでややばらつきがある。また、北側の柱穴は埋土の状況から柱の位置を替えたことがわかり、柱の直径も推定することが可能である。中央ピットは上縁約70×80cm、深さは40cmを測り、埋土中に炭化物を含んだ層がある。溝は北側で途切れしており、また複数の溝が重なりあっている部分もあり、幅は上縁で5～30cm、深さ3～10cmである。床面は東側がやや低く、溝も同様に東側がわずかに下がっている。

S I - 01出土遺物 (第9図)

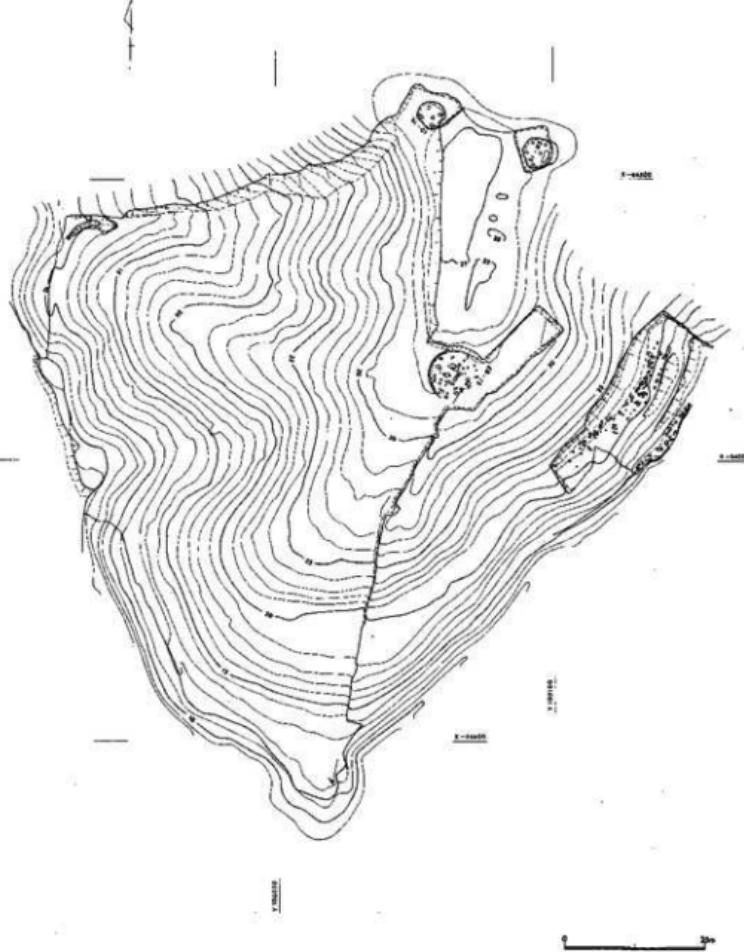
1は、甕の口縁部の破片で、複合口縁が形骸化したものである。風化が著しく、口縁端部の施文、調整とも不明である。内面には炭化物が付着している。2は高环の环と脚の接合部の破片で、接合部の径は5.9cmを測る。环部と脚部の外面はナデ、内面はヘラケズリの後ハケメを施す。時期は、1が古墳時代前期、2が弥生時代後期後半と考えられる。

S I - 02 (第10図)

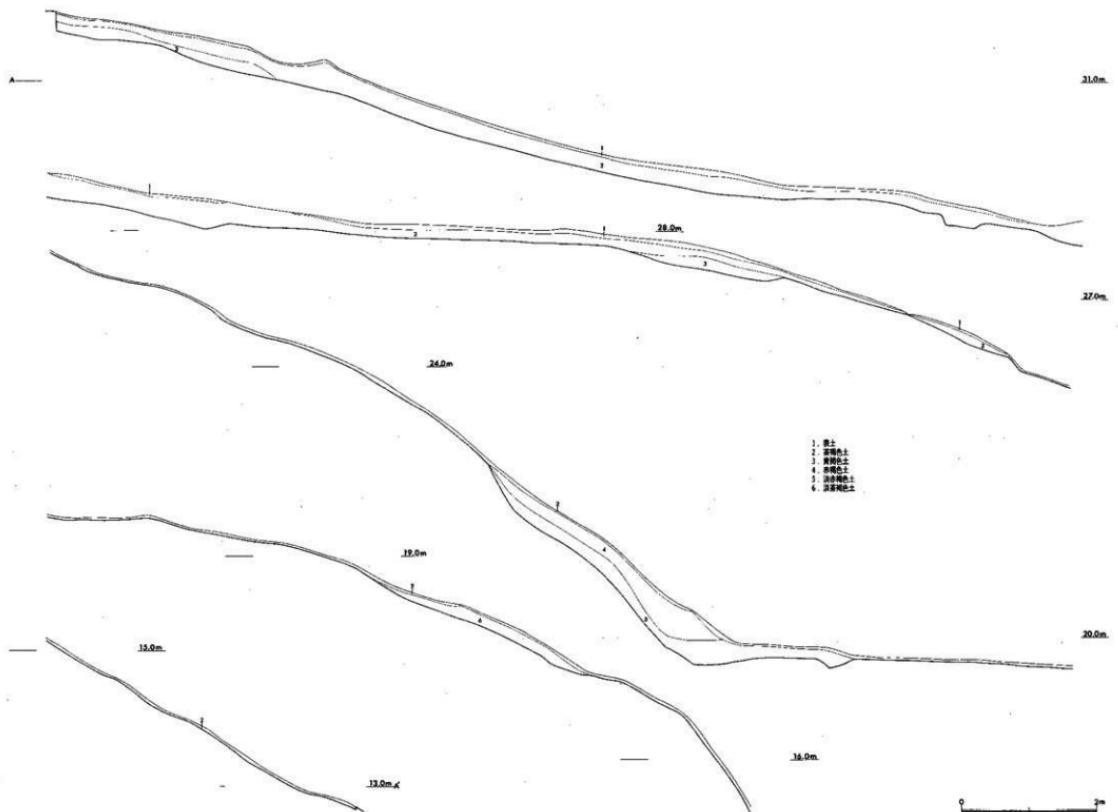
A区の尾根上、平坦面の南側に位置し、標高32mを測る円形の堅穴住居跡である。規模は周壁肩部で径9.2mである。周壁は北側がよく残っており、高さ25cmを測るが、南東側では周壁は認められず、住居床面も一部削られているようである。



第5図 A区 発掘前地形測量図

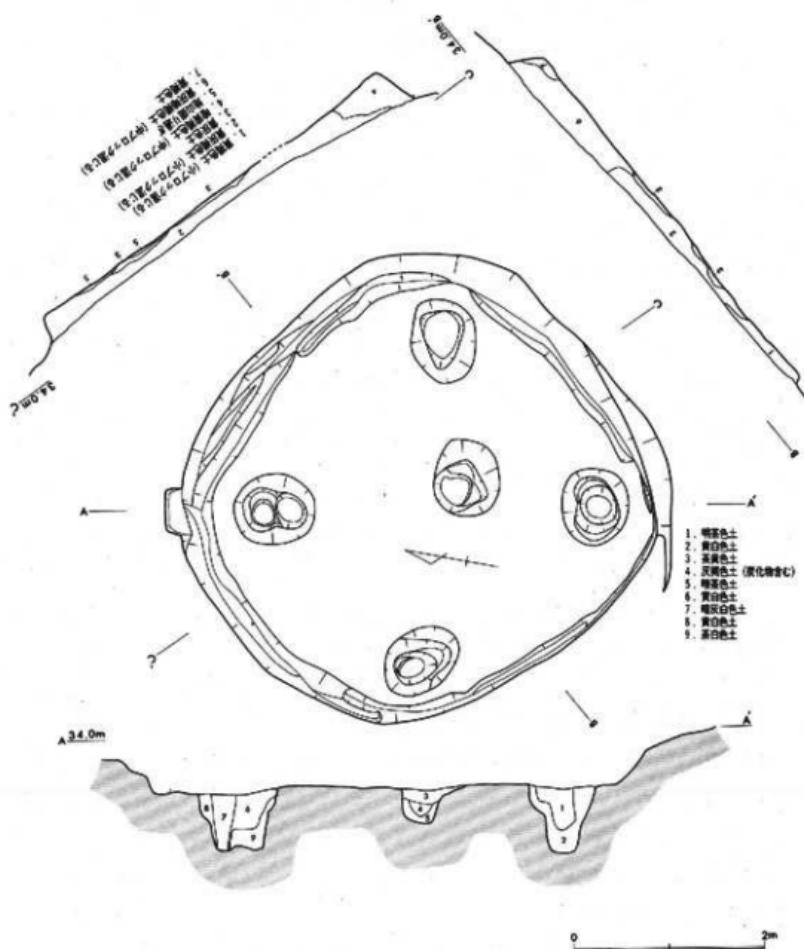


第6図 A区 遺構位置図 (1 : 1000)



第7図 A区 尾根上南北セクション実測図 (1 : 60)

住居の床面からは、ピット52基を検出したが、周溝は認められなかった。ピットのうち主柱穴については、住居跡の規模が大きく、またピット数が多いことから判断が困難であったが、位置関係、規模



第8図 A区 SI-01実測図 (1 : 60)



第9図 A区 S I - 01出土物実測図 (1 : 4) 1. 墓土中出土
2. 床面直上出土

などから6穴と推定した。柱穴間の距離は3.1m～4.3m、柱穴の現状での規模は上縁径で30～60cm、深さ30cm～60cmであるが、南東側のピットについては床面が削平されている可能性があるため、若干規模が大きくなることも考えられる。また、主柱穴と推定したもの以外にも、同程度の規模をもつピットが存在し、建て替えの可能性がうかがえる。床面はほぼ水平であるが、北西から南東へわずかに下っている。遺物は、壁沿いに土器が検出されたが、風化がひどく図化できるものは少ない。

S I - 02出土物 (第12図5～7)

5は壺で、器壁は薄く、頭部がくの字に屈曲する単純口縁をもつ。胴部外面に荒いハケメを施すが、内面の調整は風化が著しく不明である。6は蓋と考えられるもので、調整は不明である。7は高环で、环と脚の接合部の破片である。环と脚を別々につくったのち接合するもので、脚が脱落している。脚部の直径は、接合部で3.0cmと推定される。6、7が弥生時代後期後半～古墳時代前期と考えられることから、住居跡の時期についても上限をその時期におくことができるだろう。

S I - 03 (第11図)

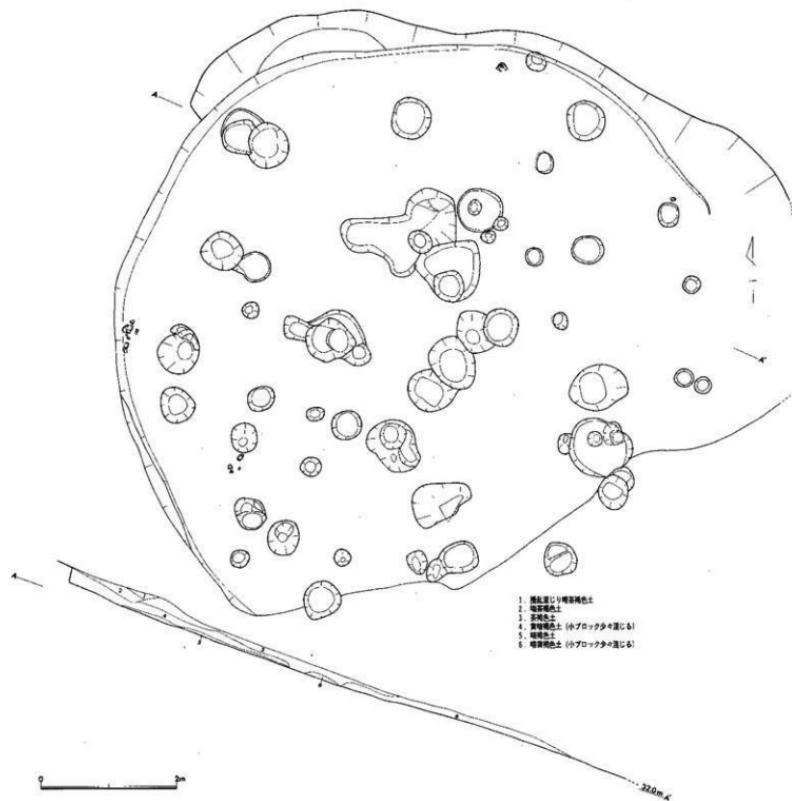
A区の北東部、頂部平坦面からわずかに北東へ下りた尾根上に位置し、標高約35mを測る竪穴住居跡である。平面形はやや丸みを帯びた角をもつ5角形である。周壁は西側が最も残りがよく高さ50cm、東側でも30cmを測る。

床面では、5角形の各頂点付近に配された主柱穴5と溝、ピット1を検出した。主柱穴は上縁径60cm程度、深さ60～70cmで、柱穴間の距離は2.2m～2.8mである。中央ピットは60×50cmの不整な方形で、深さは30cmである。中央ピット下層(7層)は、土器の小片と炭化物を多く含んでいる。溝は、幅15～25cm、深さ5～10cmを測るしっかりしたものである。

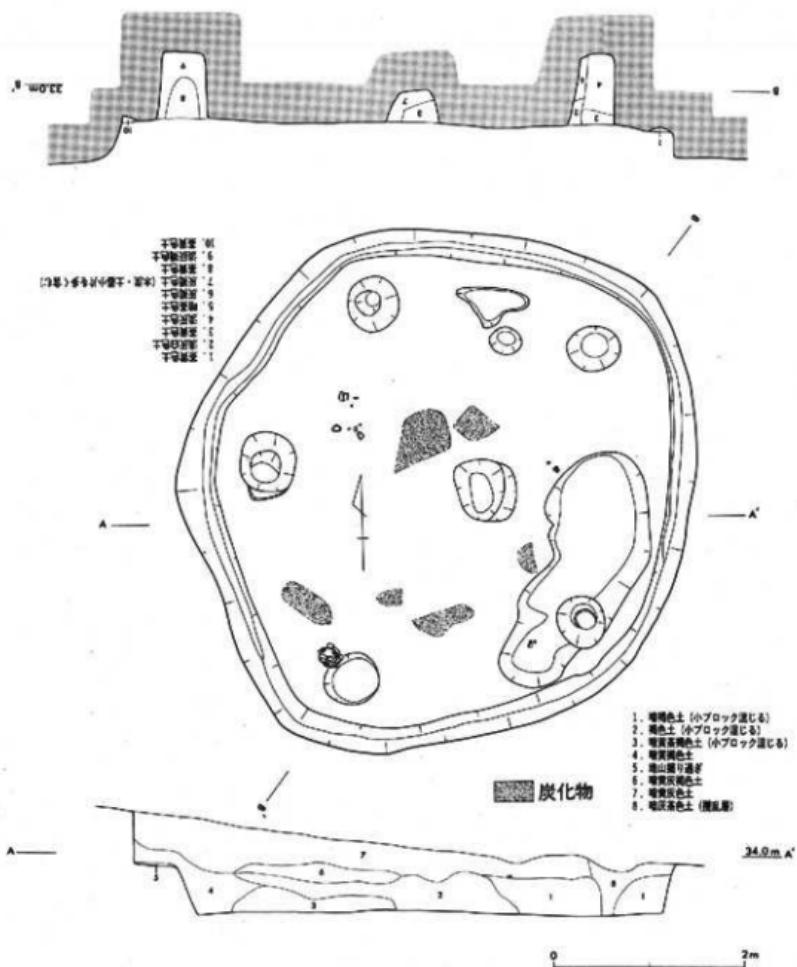
出土した遺物は、住居跡埋土の上層から奈良時代ごろと思われる土師器の破片が検出されており、床面からは弥生時代終末～古墳時代の壺が出土している。床面直上からは、他に炭化物の薄い層が6箇所確認された。この他、住居跡北側で径30cm、深さ15cmのピット、住居跡北側と南西で80×40cmで深さ10cm、260×90cmで深さ10～20cmの土壠を検出したが、これらの性格については不明である。

S I - 03出土物 (第12図1～4)

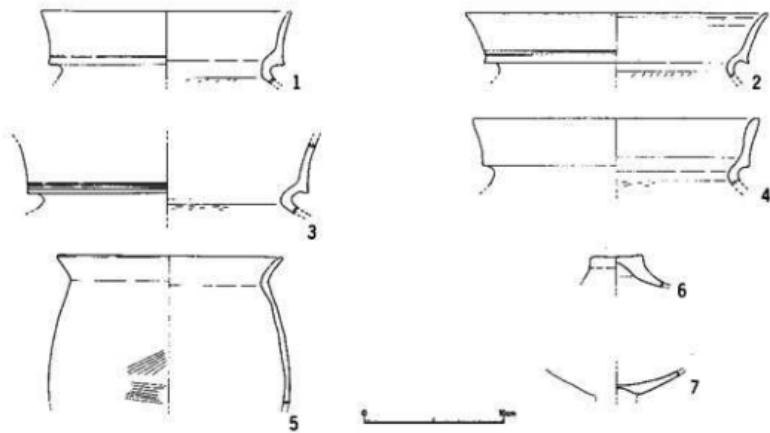
いずれも複合口縁をもつ壺の破片である。1～3は同様の形態をとり、短く屈曲する頭部と外反しながら上方へ拡張する口縁部をもつ。口縁端部外面には、浅い平行沈線を施したのちヨコナデ調整を加えたと考えられ、一部に1～5条の沈線がみられる。調整は、内面頭部以下へラケズリ、



第10図 A区 S I -02実測図 (1 : 60)



第11図 A区 S I - 03実測図 (1 : 60)



第12図 A区 S1-02 (5~7)、03 (1~4) 出土遺物実測図 (1:4)

他はヨコナデである。4は器壁がやや厚く、口唇部が肥厚するもので、口縁端部外面には施文されない。調整は内面頭部以下ヘラケズリ、他はヨコナデである。これらの土器は、出雲・隱岐弥生土器編年のV-3~4様式と考えられる。

S B-01 (第13図)

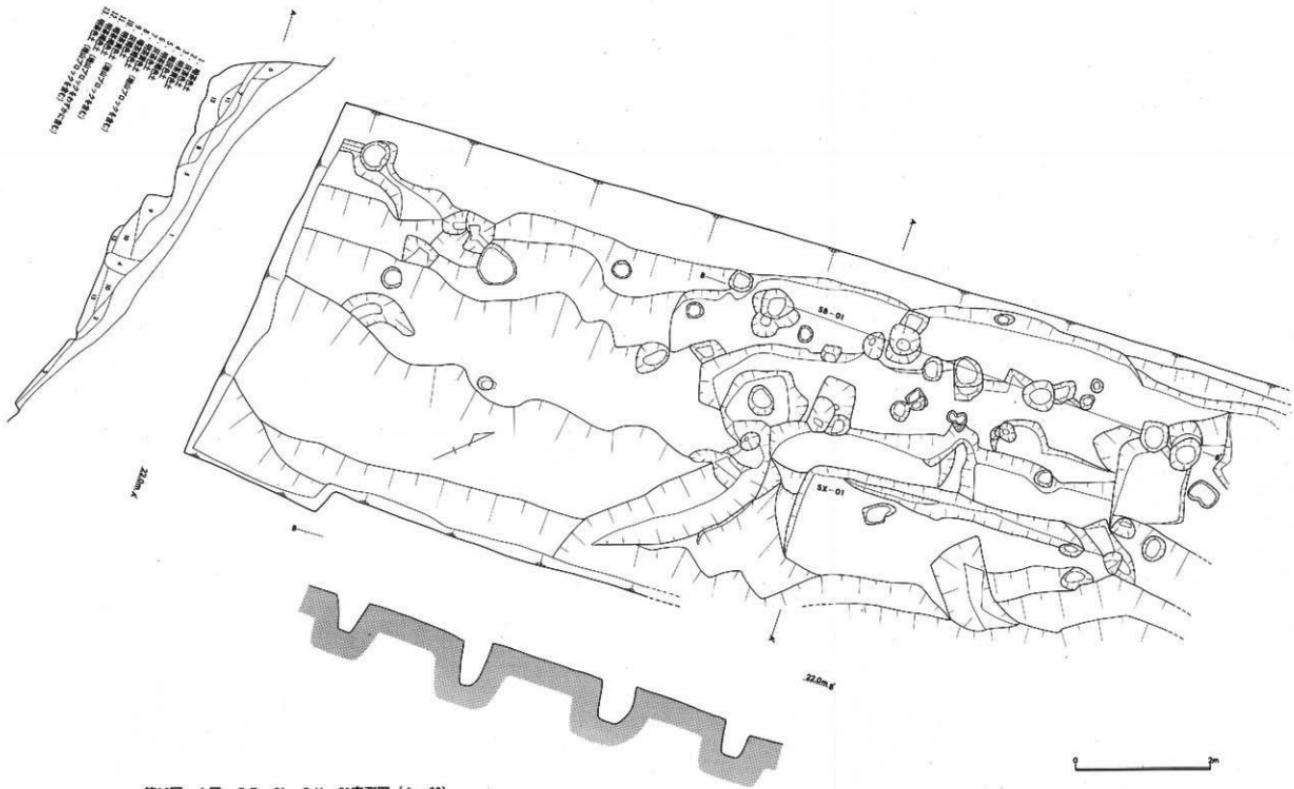
A区の東側斜面、段4の南端部に位置し、標高は21.2mをはかる。桁行3間(5.9m)の柱穴列を確認したが、東西方向の柱穴列と考えられるものは認められなかった。ピットの規模は、上縁径で40~50cm、深さ30~70cmである。柱穴間の距離は最短のもので1.8m、最長のもので2.2mである。柱穴列付近から東側は削られて別の平坦面がつくり出されている。

S X-01 (第13図)

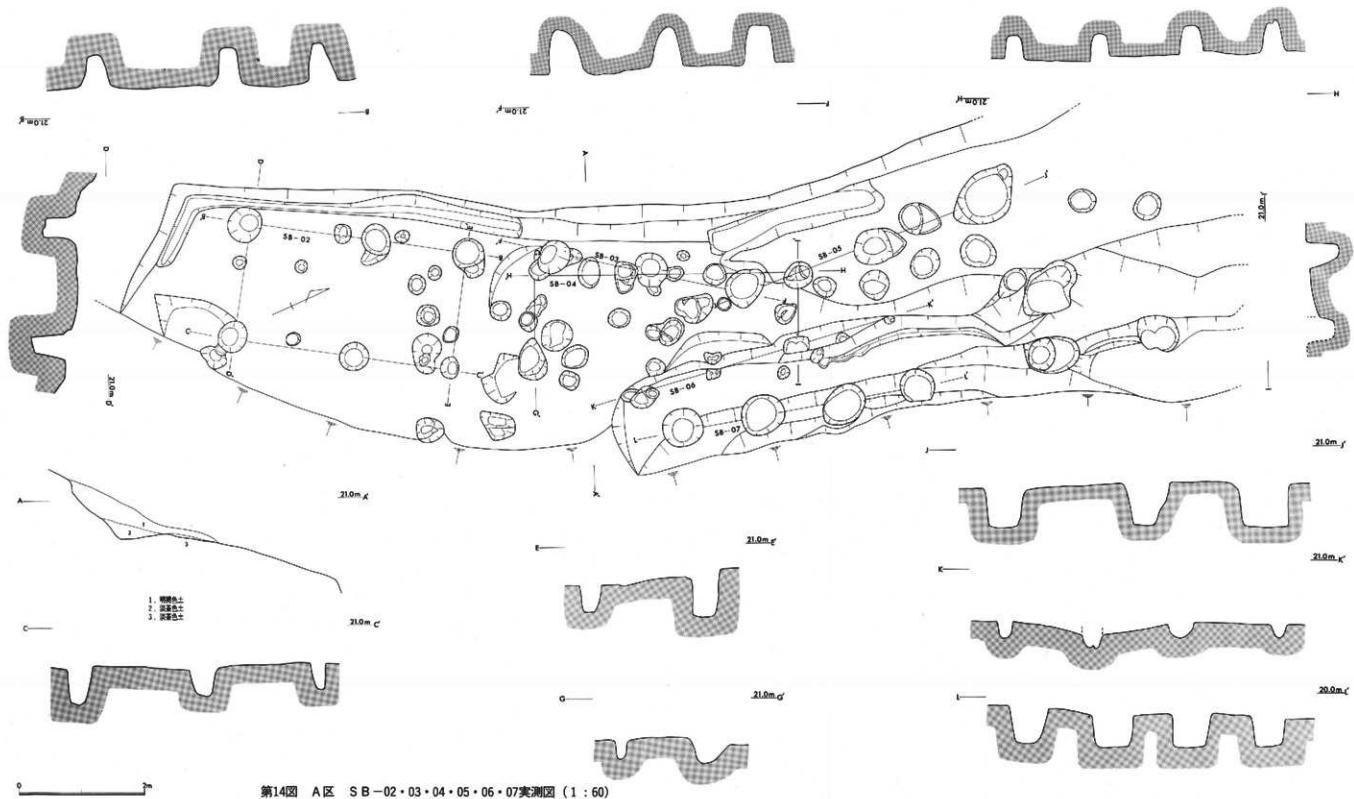
S B-01の南側に位置する。緩斜面を約20cm掘り込み、現状で南北4.6m、東西1.4mの平坦面を設ける。平坦面での標高は20.5mである。平坦面の西側には深さ1cmの浅い溝が走る。この平坦面からもピットが検出されているが、建物の規模は不明である。

S B-02 (第14図)

段4の中央やや南よりに位置し、S B-01に隣接する。標高は、20.5mをはかる。緩斜面をさらに掘り込んで平坦面を設けて床面とし、建物跡南側と西側には壁と浅い溝をつくり出している。標高は床面で20.5mをはかる。桁行2間(3.6m)×梁間1間(1.8m)の建物跡で、ピットの規模は上縁径で40~50cm、深さは40~70cmである。建物跡の後背部に存在する溝は、長さ5.3m、幅10~40



第13図 A区 SB-01、SX-01実測図 (1 : 60)



第14図 A区 SB-02・03・04・05・06・07実測図 (1:60)

cm、深さ2～3cmで、南側では壁沿いに下方へのびる。壁は南側で長さ2.2m、後背部では北側へ続くが、この建物跡に伴うものは溝と同程度の長さであると考えられる。

S B - 03 (第14図)

段4のはば中央に存在し、S B - 02の北側に隣接する建物跡で、桁行2間(3.1m)を検出した。標高は床面で20.4mである。ピットの規模は、上縁径で50～60cm、深さ約60cmをはかる。この建物跡に伴う溝、壁は認められない。

S B - 04 (第14図)

斜面側の柱穴列がS B - 03と重なり合うように検出された。標高は床面で20.4mをはかる。南東側に最大高10cm、長さ1.3mの掘り込みがあり、床面を平坦に整えると共に、壁を意識したものと考えられる。規模は桁行3間(4m)×梁間1間(1.4m)で、ピットは上縁径で30～40cm、深さ約40cmである。遺構検出面はS B - 03と同一で、土層観察では前後関係はつかめなかった。

S B - 05 (第14図)

段4の中央やや北側に位置し、この平坦面上で検出された建物跡のなかでは北端に存在する。標高は床面で20.4mである。この遺構に伴うと考えられる壁、溝などは認められず、桁行2間(4.0m)×梁間1間(1.8m)を検出した。南端の柱穴はS B - 03北端の柱穴と共有し、桁行の柱穴間の距離は1.8m、2.2mとやや開きがある。柱穴の規模は上縁径で60～80cm、下縁径40～80cm、深さ65～70cmと比較的大きなものである。遺構に伴う壁、溝などは認められない。

S B - 06 (第14図)

S B - 03～05の南側に位置し、S B - 04と一部の柱穴を共有する。後述するS B - 07の検出作業中に、壁の斜面からピットが発見された。そのため床は確認できなかったが、高さは、標高20.2mと推測される。桁行3間(4.2m)が確認され、柱穴の上縁径は不明だが、下縁径10～20cm、深さ40～50cmをはかる。壁、溝などは検出されなかった。

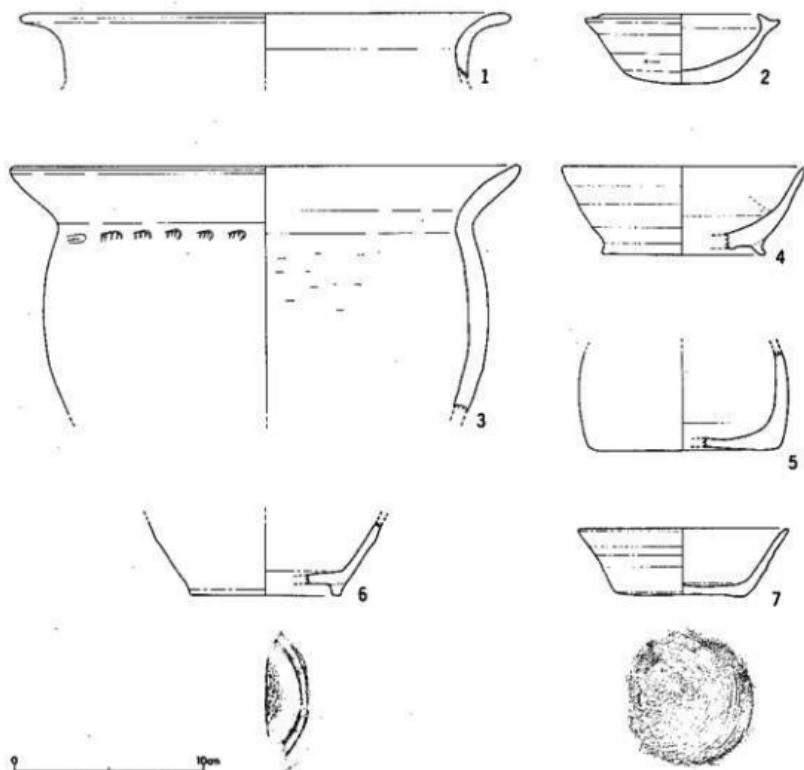
S B - 07 (第14図)

S B - 06の南側に隣接し、S B - 02～06の立地する平坦面を掘り込んで床面を設ける。標高は床面で19.9mをはかり、床面の規模は現状で南北方向が約6m、東西方向が0.6～1mで、東側が削り取られている。これを閉むように高さ20～30cmの壁が巡り、北東側の壁下には幅10cm、深さ2cmの溝がみられる。柱穴は桁行3間(3.7m)が検出され、規模は現状で上縁径50～60cm、深さ60cmをはかる。

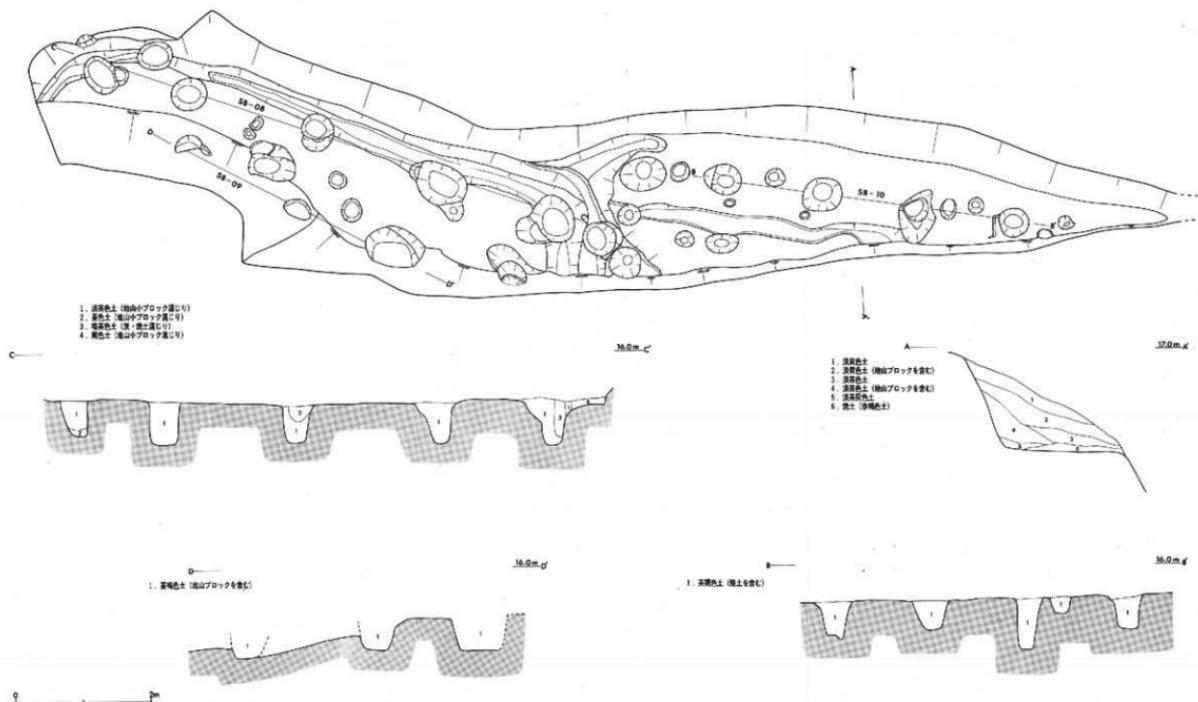
段4出土遺物 (第15図)

この平坦面では、遺構が錯綜しており、どの遺構にどの遺物が伴うか判断が難しく量的にも少ないことから、一括して掲載した。

1は甕で、口縁部が大きく外反し、胴はあまり張らないものであろう。2は壺身で、たちあがりは短く内傾する。調整は、外面1/2程度に回転ヘラケズリのち、ナデを施す。3は甕である。口縁部がくの字に屈曲する器壁の厚いもので、口径が胴部最大径をうわまわる。調整は口縁部がナデ、外面は頸部にハケメの痕跡が残る。内面は頸部以下ヘラケズリを施す。4は須恵器の高台付坏で、底部から体部へ緩やかにつながり、口縁部へ直線的にのびる。5は土師器の底部である。やや上げ底氣味で、内面ヘラケズリと考えられる。6は高台付坏で、体部から高台までが直線的につながる。内外面とも回転ナデを施すが、底部外面には回転糸切りの跡が見られる。7は壺で、体部が直線的にのび、口縁部付近でわずかに外反する。内外面の一部に炭化物が付着する。高台がつかないこと



第15図 A区 段4出土遺物実測図 (1:3) (1~5床面、6・7埋土中)



第16図 A区 SB-08・09・10実測図 (1 : 60)

を除けば、6と同様なものと考えられる。これらの上器には時期差があるが、2の坏身が山陰須恵器編年IV期⁽²⁾で最も古く、段4の掘立柱建物跡群の年代の上限は7世紀中頃に求められよう。

S B-08 (第16図)

段1の南端に立地し、標高は床面で15mをはかる桁行4間(7m)の建物跡で、柱穴間の距離は1.8~2.2mである。柱穴の規模は上縁径35~80cm、深さ40~60cmで、後背斜面との距離が非常に短い。柱穴としたピットに切り合うように深さの異なるピットが存在し、建て替えの行われた形跡もうかがえる。

S B-09 (第16図)

S B-08の東側に位置し、近年の農道拡幅工事で削られた斜面からピットが検出された。現状で桁行2間(3.4m)が確認され、標高は床面で15.3mである。現状から柱穴の規模を復元すると上縁径約80cm、深さ50cmと推定される。このほか、平坦面を閉むように幅15~40cm、深さ2~8cmの溝が検出されたが、S B-08と切合関係をもつことから、S B-09に伴うものと考えた。また七層の観察から、この溝はS B-08に先行して設けられており、S B-09はS B-08に先行して建てられたと考えられる。

S B-10 (第16図)

段1の北側に立地し、標高は床面で15.5mをはかる、桁行3間(4.4m)の建物跡である。柱穴の規模は、上縁径で45~60cm、深さ45~75cmである。これに伴う溝は検出されていない。

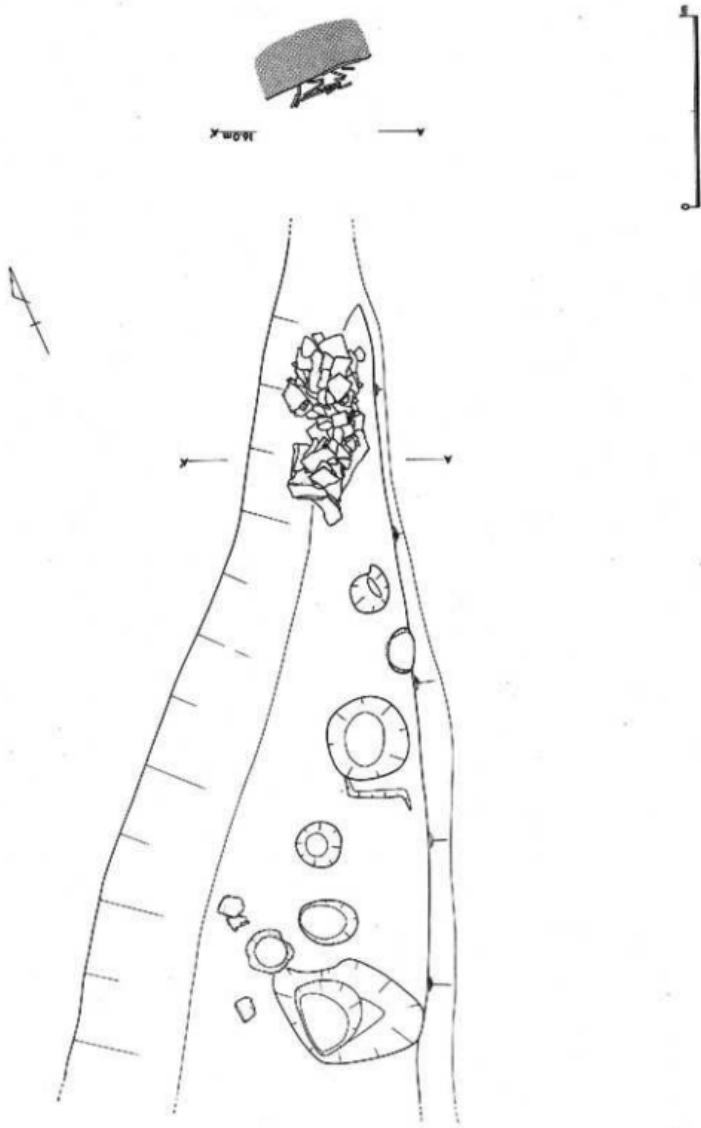
土器割り (第17図)

発掘調査に入る以前に、崖面に須恵器の破片が多数確認されていたが、調査の結果、段1の北側床面近くから、大形の須恵器壺片がまとまって大量に出土した。これに伴うピット等は認められず、出土状況から埋土に混じって流れ込んだものではないかと考えられる。

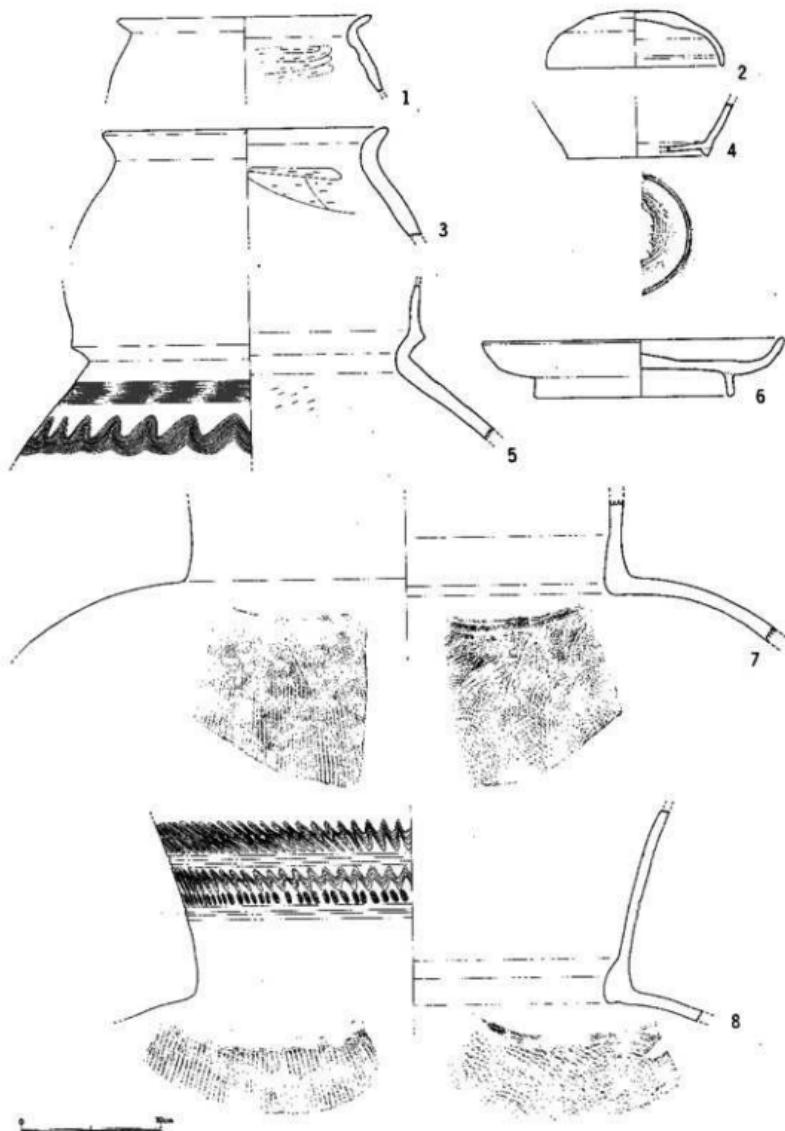
段1及びA区包含層中出土遺物 (第18図)

段1では、直接遺構に關係する遺物は確認できなかったが、覆土最下層中から上師器、須恵器を検出した(1~3・7・8)。この他、A区の包含層中で、固化可能な土器を掲載した。(4~6)

1は、土師器の壺で、頸部はくの字に屈曲するものである。2は須恵器の蓋で、天井部から体部へなだらかに続き、沈線や棱は見られない。内面は、口唇部に浅い沈線状のくぼみをもつ。3は壺で、外面に炭化物が付着する。内面頸部以下にヘラケズリの後、ナデを施す。4は須恵器の壺で、体部は直線的にのび、底部を回転糸切したのち高台をはりつける。7・8は、須恵器の壺の破片で、かなり大形のものである。8は櫛描文などを頸部に施している。段1で検出された遺構の時期は、2の特徴から7世紀中頃を上限とすることができ、段4とほぼ同時期と考えられよう。5は、西側斜面で出土した壺で、肩部に多条の櫛描文をもつ。内面頸部以下をヘラケズリしたのちナデ調整す



第17図 A区 段1遺物出土状況 (1 : 30)



第18図 A区 段1及び包含層中出土遺物実測図 (1:4)
 (1~3段1埋土中、7・8段1土器溝り、4~6包含層中)

る。6は大形の須恵器の皿で、丁寧な回転ナデを施している。時期は、5が弥生時代後期後半～古墳時代前期、6は出雲國庁編年の第3形式に類例がみられ、8世紀後半と考えられる。

B区

B区は、A区の東200mに位置する、2つの低丘陵先端部に挟まれた南へ下る緩斜面である。最終造構面の標高は、9～15mをはかる。B区両側の丘陵斜面は、近年まで梨畠として利用されており、給水用の配管が遭構検出面に達していたことから、調査時に検出した緩斜面も後世の加工を受けていることが考えられる。遺構は表土下50～1.5mから検出され、遺物の伴うものはほとんど弥生時代中期～古墳時代初頭と考えられるものである。

S I -01 (第21図)

B区の北端に立地する竪穴住居跡である。標高は床面で14.1mをはかり、主柱穴2と中央ピット、周壁と溝を検出した。住居南側が中央ピット付近から削られて消失しており、現状では周壁で2m×3.5mの隅丸方形住居と考えられる。柱穴は上縁径40cm、深さは40cmと30cm、中央ピットは上縁径40cm、深さ30cmで柱穴とほぼ同様の大きさである。周壁の高さは最大45cm、溝は最大幅10cm、深さ2～5cmである。この他、周壁ときりあって径40cm、深さ35cmのピット2が検出されたが、土層観察ができなかったためピットの性格、S I -01との関係は不明である。遺物は、床面に近い覆土中から、高坏と脚部が出土している。

S I -01出土遺物 (第22図)

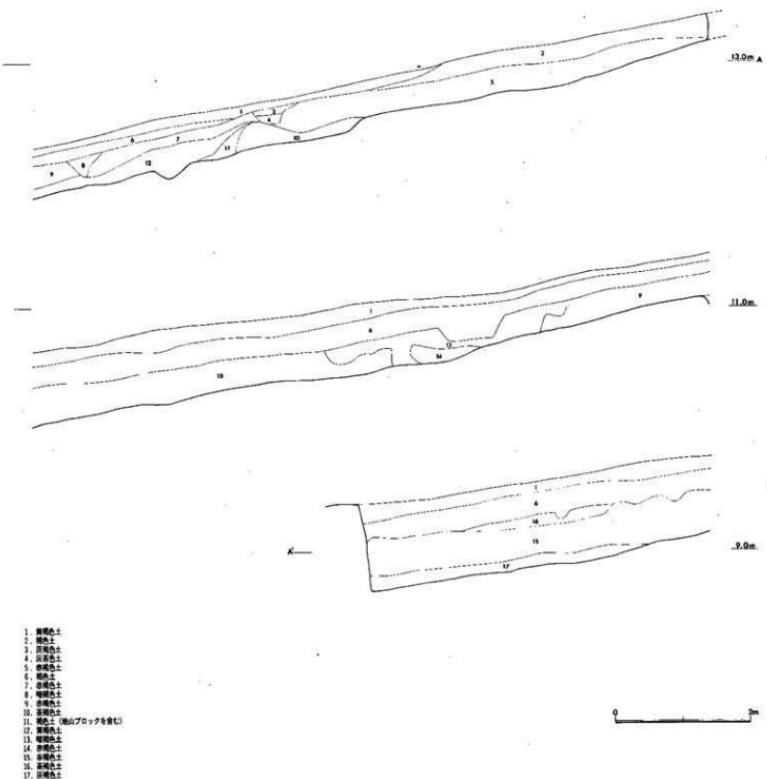
1は、高坏の坏～脚の接合部である。脚部にはヘラケズリを施す。2は高坏あるいは器台の脚端部でハの字状に開く。調整は内外面ともナデである。時期は、弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられる。

S I -02 (第23図)

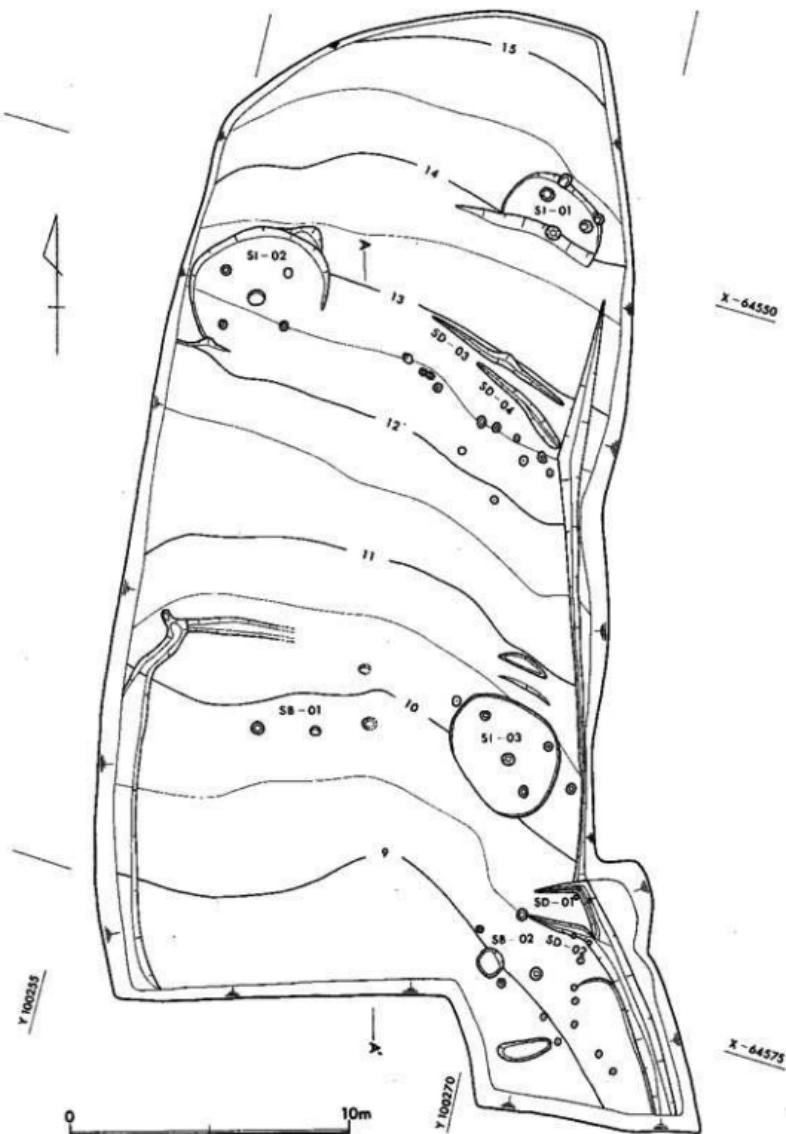
B区の北側に立地する円形の竪穴住居跡で、標高は床面で12.5mである。規模は周壁で長径5m、短径4mで、壁の高さは最大85cmをはかり、地山面をかなり深く掘り込んでいる。床面をめぐる溝は検出されなかった。床面からは主柱穴4と中央ピットを検出した。柱穴間の距離は2.0～2.3m、規模は上縁径30～40cm、深さ60～70cmで、他の住居跡のピットと比較すると径に対してかなり深さがある。七層の観察から柱の太さが10～20cmと推定され、裏込めをしていることもわかる。中央ピットは60×70cmの楕円形で、深さは70cmを測る。床面からはこの他、焼上の薄い層が4カ所で確認され、遺物は甕の口縁、底部、覆土中からも甕の口縁などが出土している。

S I -02出土遺物 (第24図)

1・2は甕の口縁である。1は、口縁端部が上下に拡張し、4条の浅い平行沈線を施す。頸部外



第19図 B区 中央セクション実測図 (1 : 60)



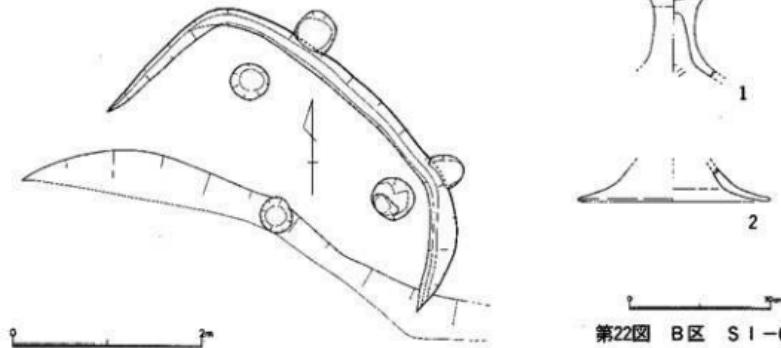
第20図 B区 造構位置図 (1 : 200)

面はハケメ、内面はナデと考えられる。2は口縁端部に4条の平行沈線をもち、頸部外面はナデ、内面はヘラケズリを施す。3は壺の口縁ではないかと思われる。頸部外面中ほどに突帯状の段を有し、段より上はヨコナデ、下はハケメを施す。内面はヨコナデである。4は底部で、底径4.4cmをはかる。風化が著しいが、内面に指頭圧痕が見える。5は脚部で、底径7.2cmをはかり、調整は不明である。6は敲石と考えられる。石材は流紋岩であろう。平面形は長さ12.0cm、幅10.3cmをはかる三角形で、その一辺に使用痕が見られる。床面から出土した土器（1・4）は弥生時代中期後葉、覆土中の土器は弥生時代後期のものと考えられる。

S I -03 (第25図)

B区の中央よりやや南に位置する堅穴住居跡で、標高は床面で10.9mである。周壁で4.0×3.7mをはかり、南東側が後世の加工を受けていると考えられ形が乱れているが、隅丸方形の平面形を呈すると考えられる。壁の高さは最大60cmである。柱穴3と中央ピットが床面で確認され、床面を巡る溝は検出できなかった。柱穴はいずれも上縁径約30cm、深さ約30cmである。中央ピットは上縁で80cm×50cm、深さ50cmである。遺物は、甕、底部、石器が出土している。

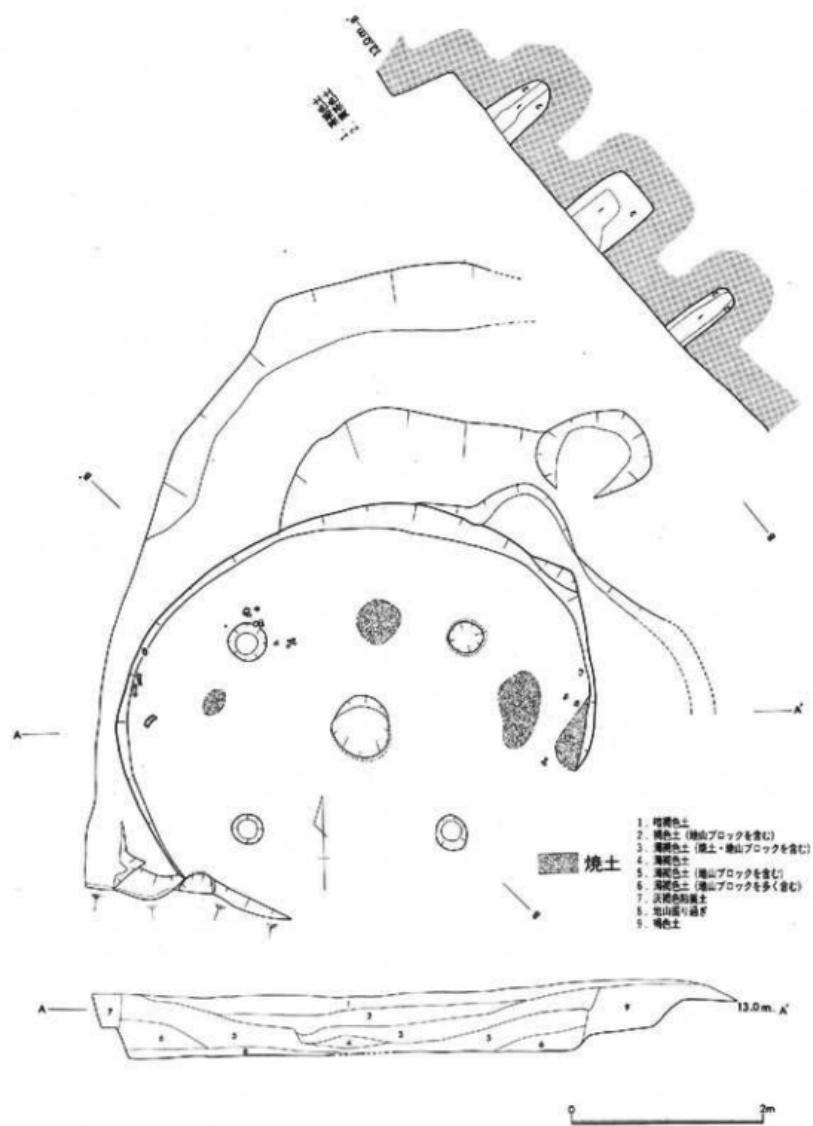
また、住居の東側と西側でピット各1、住居北側で壁と平行に浅い溝が2本走っているが、これらからは遺物も検出できず、時期、性格とも不明である。ピットは、共に上縁径約30cm、深さは東側のものが15cm、西側のものが30cmである。溝は長さ2mと2.5m、幅は最大40cmと25cmで、深さ2cm程度の浅いものである。



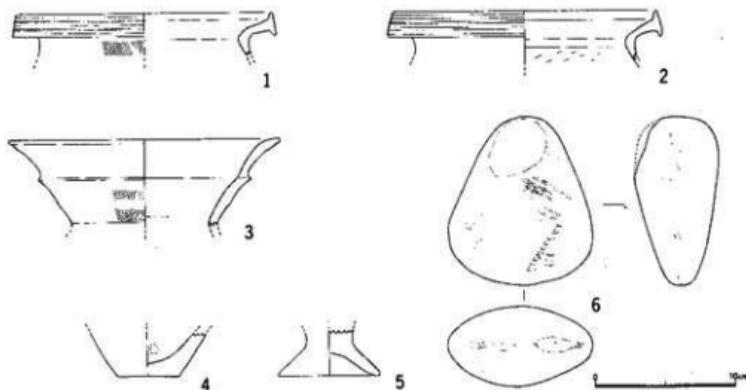
第21図 B区 S I -01実測図 (1 : 60)

第22図 B区 S I -01
埋土中出土遺物実測図

(1 : 4)



第23図 B区 S I - 02実測図 (1 : 60)



第24図 B区 S I - 02出土遺物実測図 (1 : 4)

S I - 03出土遺物 (第26図)

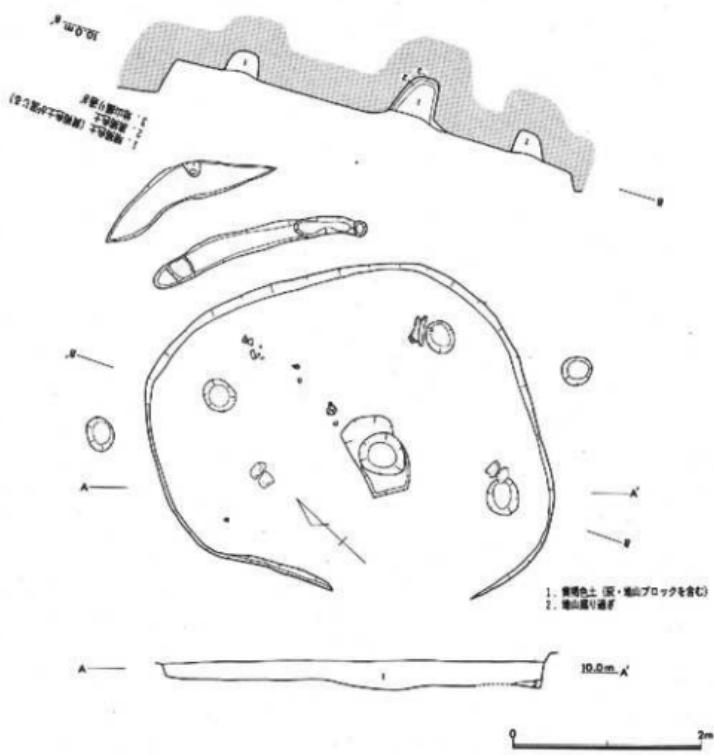
1は頸部がくの字に屈曲し、上下に拡張する口縁端部の外面に5条の凹線が施される。内面頸部以下にナデ調整を行う。2は口縁端部のみの破片である。やや外傾する端部の外面に5条の平行沈線を施す。風化が著しく調整は不明である。3は胴部上半が残存する。口縁端部はやや外傾して上方に立ち上がり、外面には5条の凹線が施される。肩部には貝殻腹縁による押引き刺突文がめぐる。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部外面はハケメ、内面は頸部以下ヘラケズリである。口縁部外面から肩部にかけて炭化物が付着する。4は底部で、風化が著しいが、内面に指頭圧痕が確認できる。5も底部で、調整は外面がハケメ、内面には指頭圧痕が見られる。外面の一部に炭化物が付着する。これらの遺物は弥生時代中期後葉から、後期にかけてのものである。

S B - 01 (第27図)

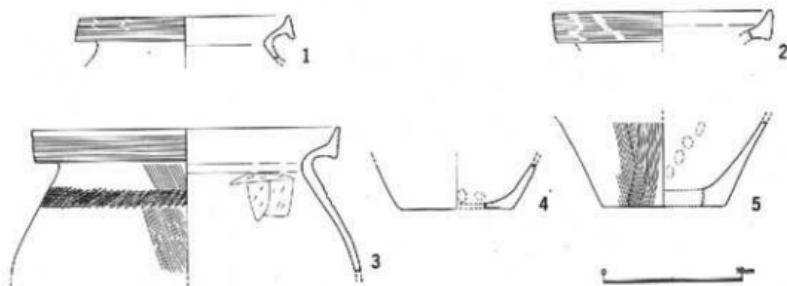
S I - 03の西側に位置し、標高は現状で約10mをはかる。桁行2間(4.0m)×梁間1間(2.0m)の掘立柱建物跡で、ピットが深さ約10cmしか残存せず、床と考えられる平坦面も検出できなかったことから、後世の加工により建物自体はほとんど消失し、わずかに柱穴の一部が残ったものと思われる。北側にある溝は桁行に平行して走っており、この建物に関連するものであろう。柱穴及び溝から遺物は出土せず、時期は不明である。

S B - 02 (第28図)

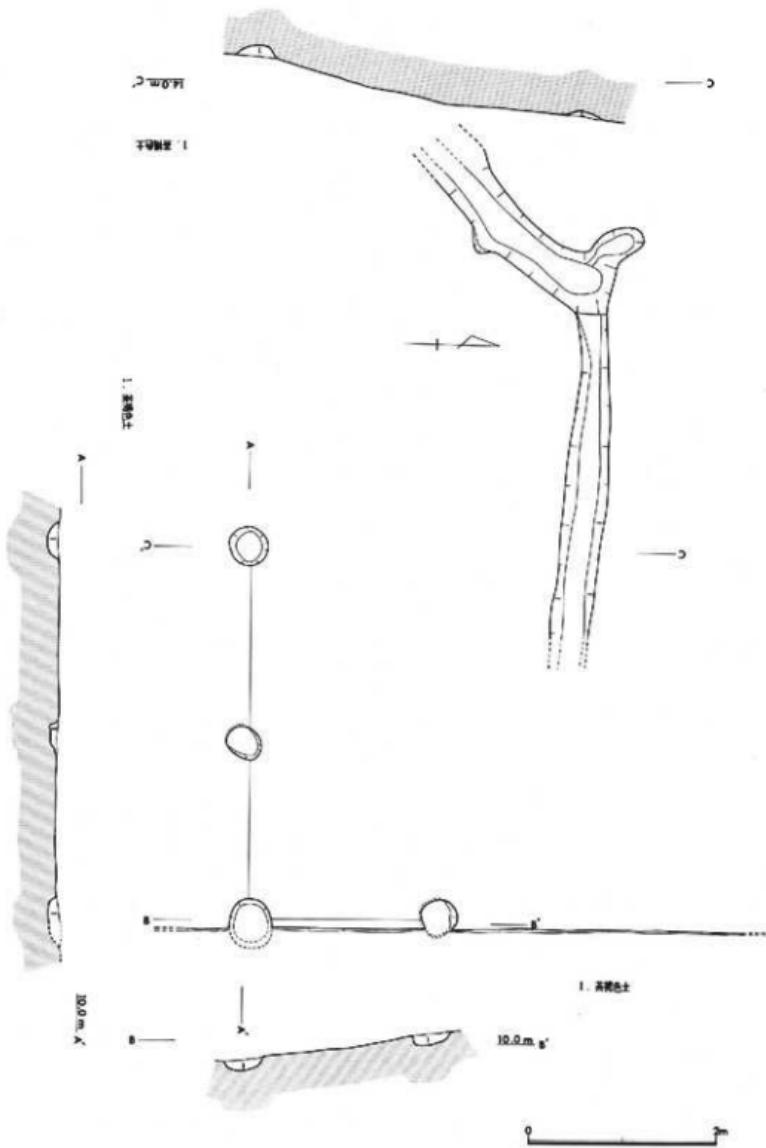
調査区の最南端に位置し、後述する S D - 01・02の西側に存在する。標高は約8mをはかり、桁



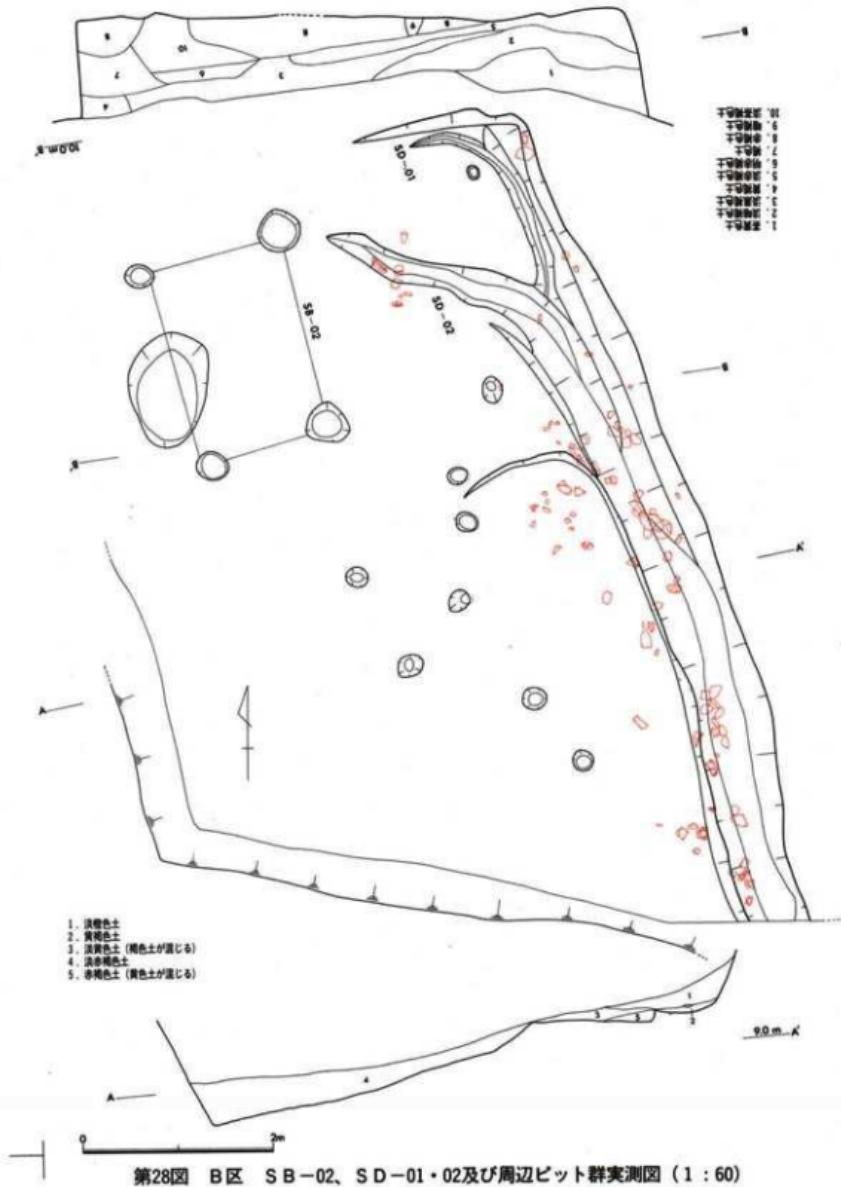
第25図 B区 S I - 03実測図 (1 : 60)



第26図 B区 S I - 03出土遺物実測図 (1 : 4).



第27図 B区 SB-01実測図 (1 : 60)



第28図 B区 SB-02、SD-01・02及び周辺ピット群実測図 (1 : 60)

行1間(2.1m)×梁間1間(1.8m)を検出した。後世の加工を受けていると思われ、柱穴上縁で最大40cmのレベル差があり、平坦面も存在しない。この建物跡に伴う遺物は出土しなかった。

S D - 01・02 (第28図)

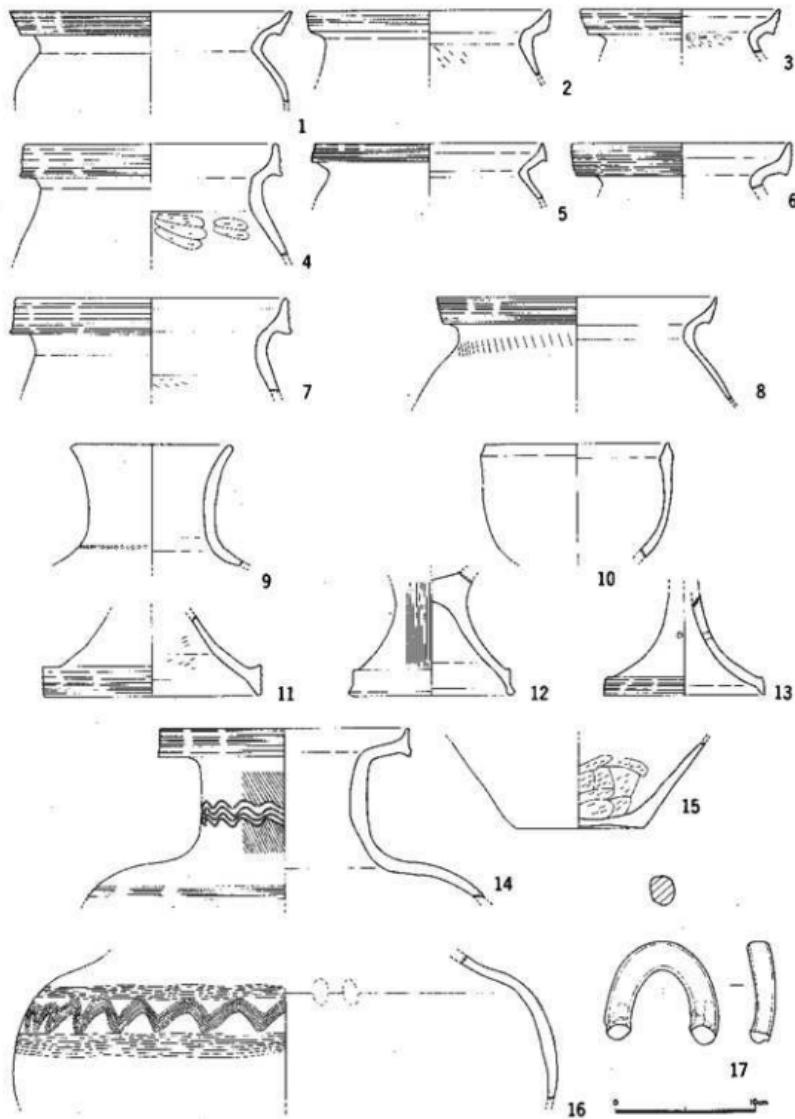
調査区の南東隅に位置し、標高は約8mである。これより東側は丘陵斜面となり、傾斜変換点にあたる。S D - 01の北から東側にかけて、A区の東斜面でみられたような掘り込みがあり、掘立柱建物のための平坦面を設けようとしたとも考えられる。

S D - 01は幅約20cm、深さ約4cmで、南北に長い弧状の平面形を呈し、南側はS D - 02と切り合う。S D - 02は、東側斜面の下縁に沿うようにはしり、北側で西に屈曲する。幅は最大80cm、深さ2~3cmである。これらの溝の南西側には、S B - 02とピット群が存在しており、建物跡の後背に設けられる溝とも考えられる。S D - 01・02とその周辺からは遺物が多数出土している。

S D - 01・02出土遺物 (第29図)

1~8は、壺の口縁部である。1は、口縁端部が上方に拡張して外傾し、5条の凹線をもつ。風化のため調整は不明である。口縁部外面に炭化物が付着する。2は口縁部が全体に肥厚し端部には2条の凹線をもつ。内面頸部以下はヘラケズリを施す。3は、1と同様な形態で、口縁端部には4条の凹線文をもち、内面頸部にはヘラミガキが見られる。外面に炭化物が付着する。4は全体に器壁が厚く、口縁端部に4条の凹線が施される。内面はヘラケズリであるが、頭部のやや下位から施される。5は口縁部が肥厚し、端部がわずかに上下に拡張して3条の凹線を施す。内面頸部以下は風化が進んでいるが、ヘラケズリと考えられる。6は、口縁端部が上方に拡張し6条の凹線を施す。風化のため、調整は不明である。7は口縁端部全体が肥厚し、4条の凹線が施される。3と同様に、頸部のやや下位からヘラケズリを施す。8は、口縁端部が肥厚して5条の凹線が施される。頭部外面には、ヘラ状工具による刺突文がめぐる。

9は壺の口縁部である。頸部が長く、口縁付近でやや外反する。端部は丸くおさめ、複合口縁にはならない。全体に器壁が厚く、頸部外面には竹管文をもつ。調整は風化のため不明である。10は小形の鉢形土器と考えた。口縁端部は一旦肥厚したのち細く上方へ延び、三角形の断面を呈す。文様は全くもたず、調整は内外面ともナデである。11は器台または高壺の脚である。端部は複合口縁と同じ形態をとり、4条の凹線をもつ。調整は、外面はナデ、内面は端部は不明であるが、他はヘラケズリである。12は高壺の脚で、端部は複合口縁状につくられ、文様をもたない。外面は、端部がヨコナデ、他はハケメ、内面はヘラケズリのあとナデを施す。13も高壺の脚と考えられる。端部に3条の凹線を施し、脚の中位に径4mmの透孔をもつ。14は壺の口縁である。頸部は長く直立し、口縁部は大きく水平方向に開き、端部が上下に拡張する。口縁端部には5条の凹線、頸部には4条の波状文、肩部には3条以上の平行沈線を施す。頸部外面はハケメ、他はナデで調整する。15は底



第29図 B区 SB-02、SD-01・02及び周辺ピット群出土遺物実測図 (1 : 4)

部で、内面はヘラケズリである。16は壺の副部で、平行沈線（直線、波状文）で飾る。内面はナデ調整だが、一部に指頭圧痕が見られる。17は把手で、注口土器の胸部上半に接合される類のものであろう。断面は隅丸長方形を呈する。

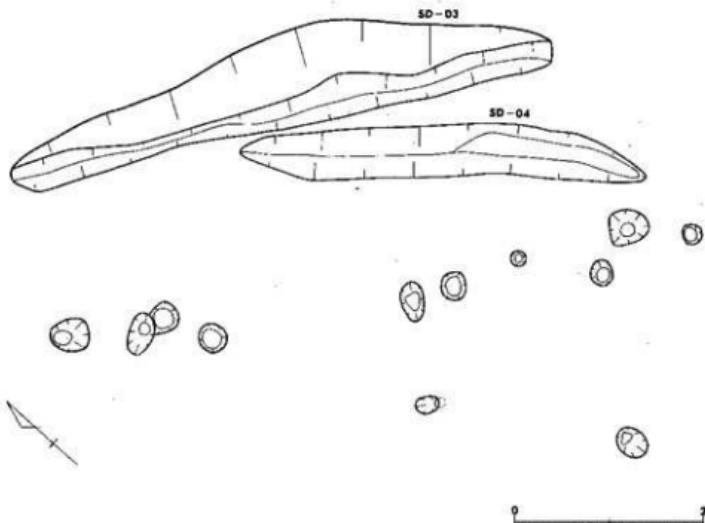
遺物の時期は14・16といった弥生時代中期のものから17のような後期後半のものまで時期幅をもつ。また9・10については類例が少なく時期判定が困難である。

SD-03・04 (第30図)

S I-01の南側に位置し、標高12.5～13mをはかる。いずれも傾斜に直交し、SD-03が長さ3.0m、深さ3cm、04は長さ2.1m、深さ3cmでともに浅いものである。この溝の下方（南側）にはビット群があり、SD-01・02と同様に掘立柱建物跡に伴うものではないかと思われる。この遺構から遺物は出土しておらず、時期は不明である。

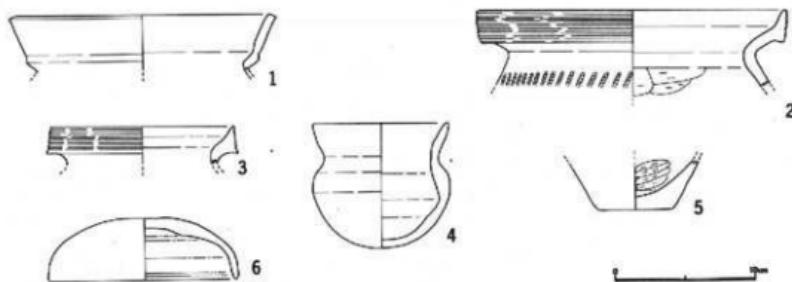
B区埋土中出土土器 (第31図)

1は壺の口縁で、複合口縁が形骸化したものである。口唇部が肥厚し、平坦面をもつ。2は口縁端部に7条の平行沈線をもち、肩部にクシ状工具による刺突文がめぐる。内面頸部よりやや下位からヘラケズリを施す。3は口縁端部が肥厚し、外面に6条の凹線をもつ。4は小形の短頸壺で内外

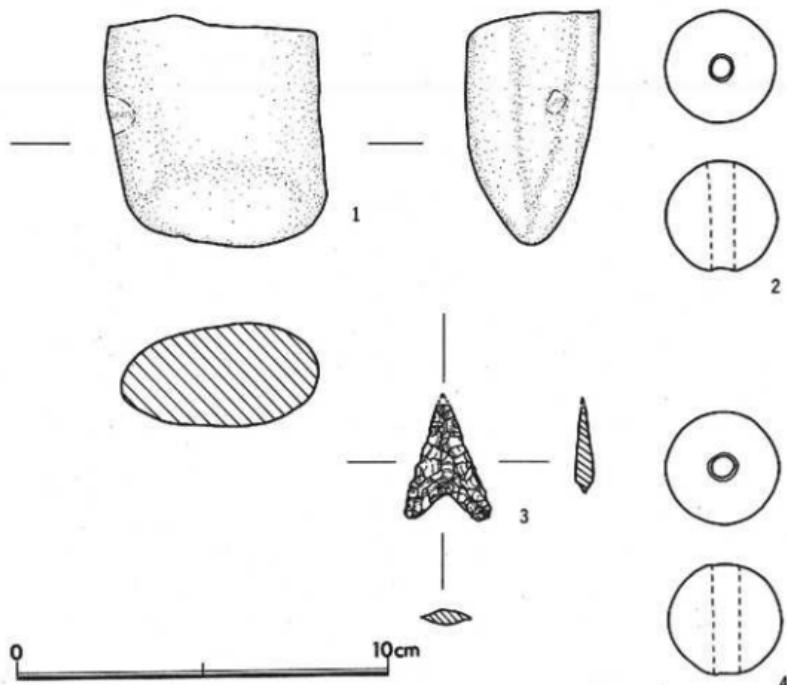


第30図 B区 SD-03・04及び周辺ビット群実測図 (1:60)

面ともナデ調整である。全面に炭化物が付着している。5は底部で、内面にヘラケズリを施す。6は須恵器の杯蓋で、天井部から体部へ緩やかに移行する。内面口唇部には沈線をもつ。天井部は回



第31図 B区 包含層中出土遺物実測図 (1 : 4)



第32図 B区 包含層中出土石器・土製品実測図 (2 : 3)

越峠遺跡土器観察表

件名番号	写真番号	出土地点	器種	法寸 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
9回-1	11	A区SI-01 埋土中	甕 (土師器)	口径21.2	磨滅により不明	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	茶橙色	内面に炭化物付着
9回-2	11	A区SI-01 床面	高环脚部 (弥生土器)		环底部:ナデ 外面:ヨコナデ 内面:ヘラケズリ後ナデ	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡黄赤色	
12回-1	11	A区SI-03 床面	甕 (弥生土器)	口径17.8	内面底部以下:ヘラケズリ その他:ヨコナデ	微砂粒を少量含む	良好	茶白色	
12回-2	11	A区SI-03 床面	甕 (弥生土器)	口径21.6	口縁部外面~内面:ヨコナデ 内面底部以下:ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	外面:淡茶灰色 内面:茶白色	平行沈線の後ヨコナデを施し消す
12回-3	11	A区SI-03 床面	甕 (弥生土器)		内面底部以下:ヘラケズリ その他:ヨコナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	明黄白色	口縁部外面に炭化物付着
12回-4	11	A区SI-03 床面	甕 (弥生土器)	口径20.4	外面:ヨコナデ 口縁部内面:ヨコナデ 内面底部以下:ヘラケズリ	微砂粒を少量含む	良好	外漏:淡黄白色 内面:黄白色	
12回-5	11	A区SI-02 床面	甕 (土師器?)	口径16.0	外面:ハケメ 内面:不明	2mm程の砂粒を多く含む	良好	外漏:淡黄白色 内面:白色	
12回-6	11	A区SI-02 床面	甕 (弥生土器?)	つまみ径 3.8	不明	1mm以下の砂粒を含む	良好	天井部外面: 淡黄茶色 その他:淡桃色	
12回-7	11	A区SI-02 床面	高环 (弥生土器?)	接合部径 3.0	外面:不明 内面:ナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	外面:淡茶黄色 内面:淡黄茶色	
15回-1	12	A区 ピット21・22 床面	甕 (土師器?)	口径25.6	不明	微砂粒を多く含む	良好	淡白橙色	
15回-2	12	A区段4 床面	环 (須恵器)	口径10.2 器高 3.7	かより部分内面:回転ナデ その他:ナデ	砂粒を少量含む	良好	淡青灰色	
15回-3	12	A区段4 床面	甕 (土師器)	口径27.0	外面:ヨコナデ 内面底部以下:ハケメ 内面:ヘラケズリ	2mm以下の砂粒を含む	良好	外面:淡赤褐色 内面:淡青灰色	
15回-4	12	A区段4 床面	环 (須恵器)	口径12.7 器高 4.6	内外面:回転ナデ	砂粒を多く含む	良好	淡青灰色	
15回-5	12	A区段4 床面	楕?	底径 9.8	外面:不明 内面:ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	外面:淡赤灰色 内面:淡灰色	
15回-6	12	A区段4 埋土中	环 (須恵器)	底径 8.0	外面:回転ナデ 底面部:回転糸切り 内面:回転ナデ	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	青灰色	
15回-7	12	A区段4 埋土中	环 (須恵器)	口径11.0 器高 3.5	内外面:回転ナデ 底面部:回転糸切り 内面:ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
18回-1	12	A区段1 埋土中	甕 (土師器)	口径18.2	外面:ヨコナデ 内面:ナデ 内面底部以下:ヘラケズリ後ナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	淡赤黄色	
18回-2	12	A区段1 埋土中	甕 (須恵器)	口径12.5 器高 4.0	外面:天井部の一部にヘ ラケズリ後ナデ	砂粒を少量含む	良好	淡青灰色	
18回-3	12	A区段1 埋土中	甕 (土師器)	口径20.5	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ 内面底部以下:ヘラケズリ後ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	赤茶色	外面上に炭化物付着
18回-4	12	A区 東側斜面 埋土中	环 (須恵器)	底径10.2	底面部:回転糸切り	砂粒を少量含む	良好	淡灰色	

鉢名番号	名前	出土地点	器種	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
18回-5	13	A区 西側斜面 埋土中	壺 (土器?)		外面部: 不明 内面部以下: ヘラケズリ後ナデ その他内面: 不明	1mm以下の砂粒を 多く含む	良好	淡褐色	
18回-6	13	A区 埋土中	皿 (須恵器?)	口径21.6	内外面: 回転ナデ 底部内外面: ナデ	2mm以下の砂粒を 少々含む	良好	青灰色	
18回-7	13	A区段4 床面	壺 (須恵器)		肩部外面: タキア 外面部以下: 回転ナデ 肩部内面: タキ後ナデ	砂粒を極 少々含む	良好	淡黒赤色 内面: 青灰色	
18回-8	13	A区段4 床面	壺 (須恵器)		肩部外面: タキア 外面部以下: 回転ナデ 肩部内面: タキ後ナデ	砂粒を少 々含む	良好	淡赤紫色	
22回-1	13	B区SI-01 床面	高坏脚部 (土器?)		内外面: ナデ 脚端部: ヘラケズリ	1mm以下の 砂粒を少 々含む	良好	淡黄白色	
22回-2	13	B区SI-01 床面	高坏 (土器?)	底径13.8	内外面: ナデ	2mm以下の 砂粒を少 々含む	良好	淡黄白色	
24回-1	13	B区SI-02 床面	壺 (弥生上器)	口径18.0	外面部以下: ハケメ 口縁部外面: 内面: ヨコナデ 内面部以下: ナデ?	1mm以下の 砂粒を 多く含む	良好	外面部: 暗褐色 内面: 茶褐色	
24回-2	13	B区SI-02 床面	壺 (弥生土器)	口径18.8	外面部: ヨコナデ 内面部以下: ヘラケズリ その他: ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を 多く含む	良好	淡赤褐色	外面部下 部~頸部に 炭化物付着
24回-3	13	B区SI-02 床面	壺? (弥生上器)	口径19.4	内面~外面部上半: ヨコナデ 外面部下半: ハケメ後ヨコナデ	1mm以下の 砂粒を 少々含む	良好	淡褐色	
24回-4	13	B区SI-02 床面	底部 (弥生土器)	底径 4.4	風化が著しいため不明	1mm以下の 砂粒を 多く含む	良好	外面部: 赤茶色 内面: 淡灰褐色	
24回-5	13	B区SI-02 床面	器 (弥生土器)	底径 7.2	風化が著しいため不明	2mm以下の 砂粒を 少々含む	良好	淡茶色	
26回-1	14	B区SI-03 埋土中	壺 (弥生上器)	口径15.0	外面部~口縁部内面: ヨコナデ 内面部以下: ナデ	微砂粒を 少々含む	良好	口縁部: 黑灰色 その他: 明褐色	
26回-2	14	B区SI-03 埋土中	壺 (弥生土器)	口径15.8	風化が著しいため不明	微砂粒を 少々含む	良好	外面部: 淡茶褐色 内面: 淡灰茶色	
26回-3	14	B区SI-03 床面	壺 (弥生上器)	口径22.2	口縁部外面: ヨコナデ 外面部以下: ハケメ 内面: ヨコナデ、 ヘラケズリ	2mm以下の 砂粒を 食む	良好	淡茶褐色	
26回-4	14	B区SI-03 床面	底部 (弥生上器)	底径 8.0	外面部: 風化が著しいため不明 内面: 指原庄五	1mm以下の 砂粒を 多く含む	良好	外面部: 暗赤系色 内面: 淡赤茶色	
26回-5	14	B区SI-03 埋土中	底部 (弥生土器)	底径 8.6	外面部: ハケメ 内面: 弱い指原庄五痕	1mm以下の 砂粒を 少々含む	良好	外面部: 暗赤茶色 内面: 淡灰色	外面部炭化 物付着
29回-1	14	B区SD-02 床面	壺 (弥生土器)	口径20.0	口縁部内面: ナデ	2mm以下の 砂粒を 含む	良好	淡橙黄色	内面に炭化 物付着
29回-2	14	B区SD-02 床面	壺 (弥生土器)	口径17.0	外面部: 不明 口縁部内面: 内面 頭部以下: ナデ 前述内面: ヘラケズリ	1mm以下の 砂粒を 多く含む	良好	淡黄色	
29回-3	14	B区SD-02 床面	壺 (弥生土器)	口径14.2	外面部: 口縁部内面: ヨコナデ 内面部以下: ハラミガキ 肩部内面: ヘラケズリ	微砂粒を 少々含む	良好	淡黄灰色	
29回-4	14	B区SD-02 床面	壺 (弥生土器)	口径17.8	肩部内面: ヘラケズリ その他: 不明	砂粒を多 く含む	良好	赤褐色	
29回-5	14	B区SD-02 床面	壺 (弥生土器)	口径16.2	外面部: 口縁部内面: ヨコナデ 内面部以下: ヘラケズリ	1mm以下の 砂粒を 含む	良好	淡橙色	

標本番号	測定番号	出土地点	器種	法寸 (cm)	手法の特徴	底七	焼成	色調	備考
29回-6	14	B区SD-02 床面	壺 (弥生土器)	口径15.5	外面：ナデ 内面：不明	1mm以下の砂粒を少々含む	良好	淡茶黃色	
29回-7	14	B区SD-02 床面	壺 (弥生土器)	口径19.2	外底：不規 内面底部以下：ナ デ 側面内面：ヘラケズリ 底部内面：ヘラケズリ後ナデ	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡赤茶色	
29回-8	14	B区SD-02 床面	壺 (弥生土器)	口径20.0	口縁以下外底：刺文 口縁面内外面：ヨコナデ 底部以下内面：不明	1mm以下の砂粒を含む	良好	淡橙黃色	
29回-9	15	B区SD-02 床面	壺 (弥生土器)	口径11.6	内外面：不明	2mm以下の砂粒を含む	良好	淡茶色	
29回-10	15	B区SD-02 床面	壺？ (弥生土器)	口径13.1	内外面：ナデ	2mm以下の砂粒を少々含む	良好	黃白色	
29回-11	15	B区SD-02 床面	器台？ (弥生土器)	直径15.0	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡茶色	
29回-12	15	B区SD-02 床面	高环脚部 (弥生土器)	底径11.3	脚部外底：ナデ 脚部外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ後ナデ	2mm以下の砂粒を含む	良好	赤茶色	
29回-13	15	B区SD-02 床面	高环脚部？ (弥生土器)	底径11.5	不明	2mm以下の砂粒を含む	良好	淡赤茶色	
29回-14	15	B区SD-02 床面	壺 (弥生土器)	口径17.8	外面底部以下、内面：ヨ コナデ 脚部外底、脚部 内面：ナデ	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡黄色	
29回-15	15	B区SD-02 床面	壺 (弥生土器)	底径 9.0		砂粒を含む	良好	淡黄色	底部から脚 部にかけて 炭化物付着
29回-16	15	B区SD-02 床面	壺 (弥生土器)		外面：波状文 内面：ナデ、指痕压痕	2mm以下の砂粒を含む	良好	淡黄茶色	
29回-17	15	B区SD-02 床面	把手		ナデ	砂粒を含む	良好	茶褐色	
31回-1	16	B区 埋土中	壺 (土器)	口径18.0	内外面：ナデ	1mm以下の砂粒を少々含む	良好	黃白色	
31回-2	16	B区 埋土中	壺 (弥生土器)	口径21.6	外面：ナデ 口縁部内面、内面底部以下：ナデ 脚部内面：ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を少々含む	良好	淡茶色	
31回-3	16	B区 埋土中	壺 (弥生土器)	口径12.9	外面：ナデ 口縁部内面：ナデ その他の内面：不明	微砂粒を少々含む	良好	淡橙白色	
31回-4	16	B区 埋土中	壺 (土器)	口径 9.6	内外面：ナデ	砂粒を含む	良好	不明	内外面全体 に炭化物付着
31回-5	16	B区 埋土中	壺 (弥生土器)	底径 5.2	不明	微砂粒を少々含む	良好	淡白茶色	
31回-6	16	B区 埋土中	壺 (須恵器)	口径13.0	天井部内外面：ナデ その他：河原ナデ	1mm以下の砂粒を少々含む	良好	青灰色	

越峰遺跡土製品観察表

査定番号	写真 面版	出土地点	器種	法蓋(全長×幅×厚さ) (cm)	重さ (kg)	手法	胎土	焼成	色調	備考
32図-2	16	B区 埋土中	土鍤	3.0×3.0×3.2	23.5	手旋、一方角 から穿孔?	密、砂粒 を少量含む	良好	淡茶色 黒灰色	
32図-4	16	B区 埋土中	土鍤	3.0×3.0×3.2	26.5	手旋、二方 向から穿孔	密、砂粒 を少許含む	良好	淡茶色 黒灰色	

越峰遺跡石器観察表

査定番号	写真 面版	出土地点	器種	法蓋(全長×幅×厚さ) (現存部)(cm)	重さ (kg)	石材	備考
24図-6	13	B区SI-02 埋土中	敲石	12×10.3×5.9	287.6	流紋岩?	
32図-1	16	B区 埋土中	始刃石斧	6.4×5.7×3.5	164.0	安山岩	
32図-3	16	B区 埋土中	石鎌	3.1×2.35×0.45	2.1	黒曜石	

転ナデ調整で、ヘラケズリの痕跡は認められない。遺物の時期は、1・4が古墳時代中期、2・3が弥生時代後期、5が弥生時代中期～後期、6が7世紀中頃と考えられる。

B区埋土中出土石器・土製品（第32図）

1は安山岩製の始刃石斧で、刃先だけが確認できた。2、4は土鍤である。2はほとんど球形で、孔径は約6mm、片側から穿孔している。4もやはりほとんど球形であるが、2方向から穿孔する。3は黒曜石製の石鎌である。先端をわずかに欠失している。

宮内遺跡

I 区

I 区は、南北にのびる低丘陵の西側斜面縁辺部に位置する。調査した範囲の内、基盤層は東側の一部で確認できるのみで、遺構の多くはその基盤層上に設けられる。基盤層は中途から急激に落ち込んでおり、そのほかの調査区の大部分については、遺物包含層の下は厚さ 1m 以上の砂層となっていたり、基盤層は確認できなかった。

S I - 01 (第34図)

I 区の北東部に存在する。直径 4 ~ 5m の円形住居跡と推定され、東側の壁は比較的残りが良いが、中央より西側は基盤層が急激に落ち込んで砂層となっているため、検出することができなかつた。また住居跡の壁は 2 つ認められるが、いずれも中途で途切れる。壁の高さは約 20cm である。

ピットは床面と壁から合計 16 が検出できたが、住居跡の全容がつかめないため、どのピットが柱穴または中央ピットにあたるか判断することはできなかつた。この他、住居のほぼ中央と考えられる位置に 20cm × 40cm の範囲で焼土の薄い層が認められた。

S I - 01出土遺物 (第35図)

1 は石錐で、紐をかけるため肉端を打ち欠いている。石材は安山岩である。2 は片刃石斧と考えられるが、凝灰岩を用いており石材はかなり軟質である。3 は壺の頸部と考えられ、2 本の突帯と 5 本の平行沈線がめぐる。4 は底部で、径約 13cm の平底である。5 は高壺の壺部で、端部は外側へわずかに拡張して平坦面をもち、外面にヘラ状工具による刺突文を施す。調整は外面にヘラミガキ、内面はナデである。これらの遺物は弥生時代中期中葉のものと考えられる。

S B - 01・SK - 02 (第36図)

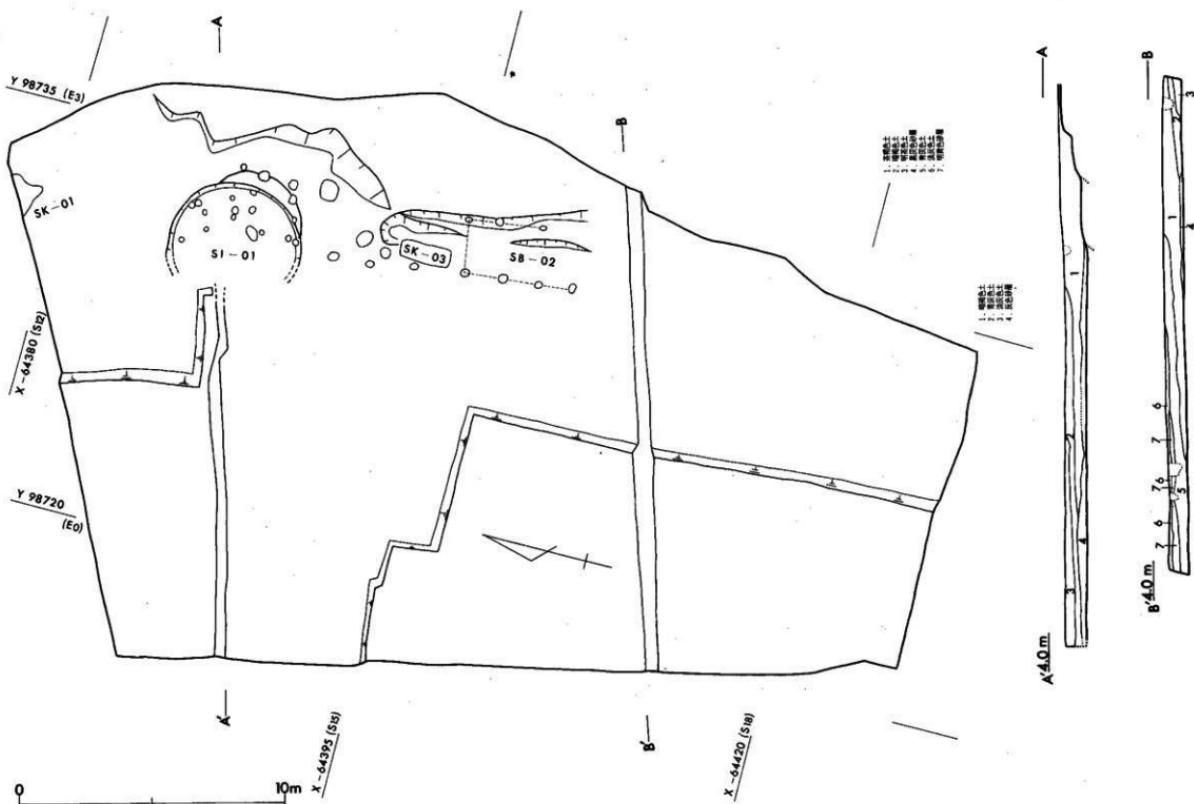
S B - 01 は、基盤層ではなく、遺物包含層 (暗褐色土) に掘りこまれた梁間 3 間 (5.4m) × 行間 1 間 (4.5m) の建物跡で、標高 2.8m で検出された。柱穴は上縁径で 30 ~ 60cm、深さ 30 ~ 50cm を測り、柱痕を確認できるものも存在する。

S K - 02 は、長径 1.3m、短径 1.1m、深さ 50cm をはかる土壙である。S K - 01 と検出面が同じであり、S B - 01 に伴うものと考えられるが、どのような性格をもつものかは不明である。

S B - 01・SK - 02出土遺物 (第37・38図)

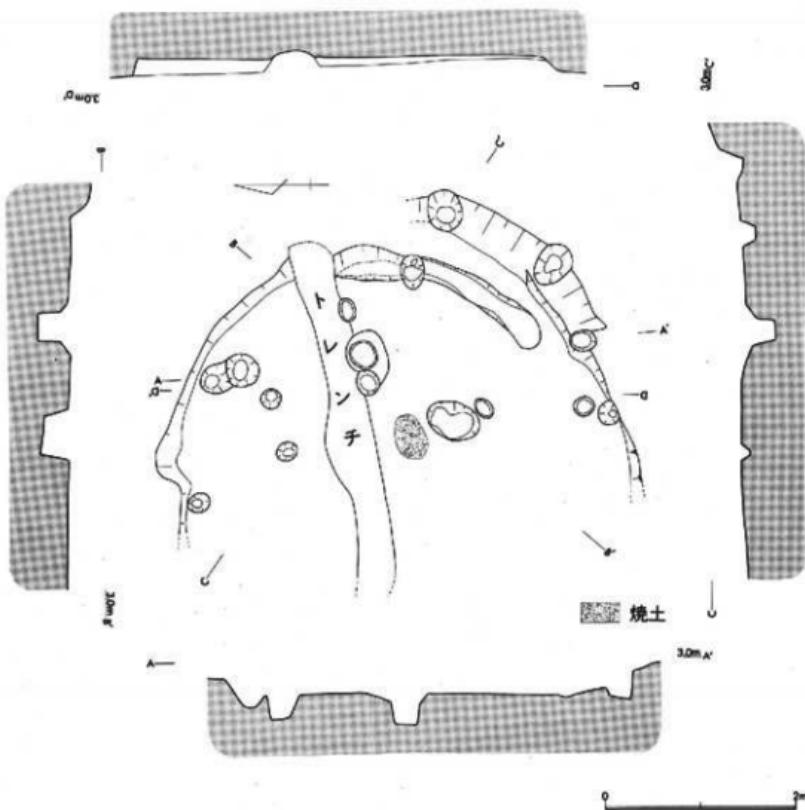
S B - 01 の柱穴内から須恵器の壺が 2 点、S K - 02 からは土師器の壺の口縁部などが出土している。37-1 は、口径 12cm をはかり、器壁は薄く体部が直線的に斜め上方へのび、口縁部がわずかに外反する。体部は回転ナデ、底部は回転糸切りである。2 は、1 と比較すると器壁は厚く、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。調整は 1 と同様である。

38-1・2 は土師器の壺で、器壁は比較的厚く、口縁部がわずかに内湾しながら立ちあがる。1



第33図 I区 遺構位置図(最終遺構面)

が平坦な口縁端部をもち、頸部の屈曲があまり見られないのに対し、2は口縁端部を丸くおさめ、頸部の屈曲が大きい。3は土縫で長さ6.8cm、重さ45gで、径7mmの円孔をもつ。4は須恵器の坏で、低い高台を底部の外縁にもち、底部は回転糸切りで切り離す。遺物の時期は、坏の形態、回転糸切りを採用している坏が存在することから出雲国庁編年の第3形式にあたり、8世紀半ば頃ではないかと考えられる。



第34図 I区 S1-01実測図 (1:60)

S B -02 (第39図)

I 区の東側に位置し、基盤層を加工した幅1.5m上の平坦面上に存在する。検出面の標高は約3mである。梁間3間(4.2m)×桁行1間(2.0m)であるが、東側では2間しか検出されなかった。柱穴は上縁径で、20~40cm、深さ20~50cmをはかり、大きさ、深さにかなりばらつきがある。また、東側の柱穴列と西側のそれとは、検出面、ピット底とも約40cmのレベル差がある。

S B -02出土遺物 (第40図)

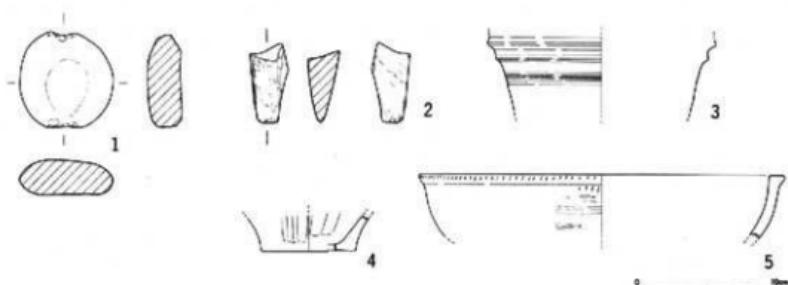
S B -02のP-5内から弥生土器と土錐が出土している。1は壺の口縁部で、口径は37cm、端部を内側に拡張するものである。端部外面には5本の凹線を施す。2は土錐で、長さ4.5cm、幅3.5cmをはかる。これらの属する時期は、壺の形態、施文などの特徴から弥生時代中期と考えられる。

S K -01 (第41図)

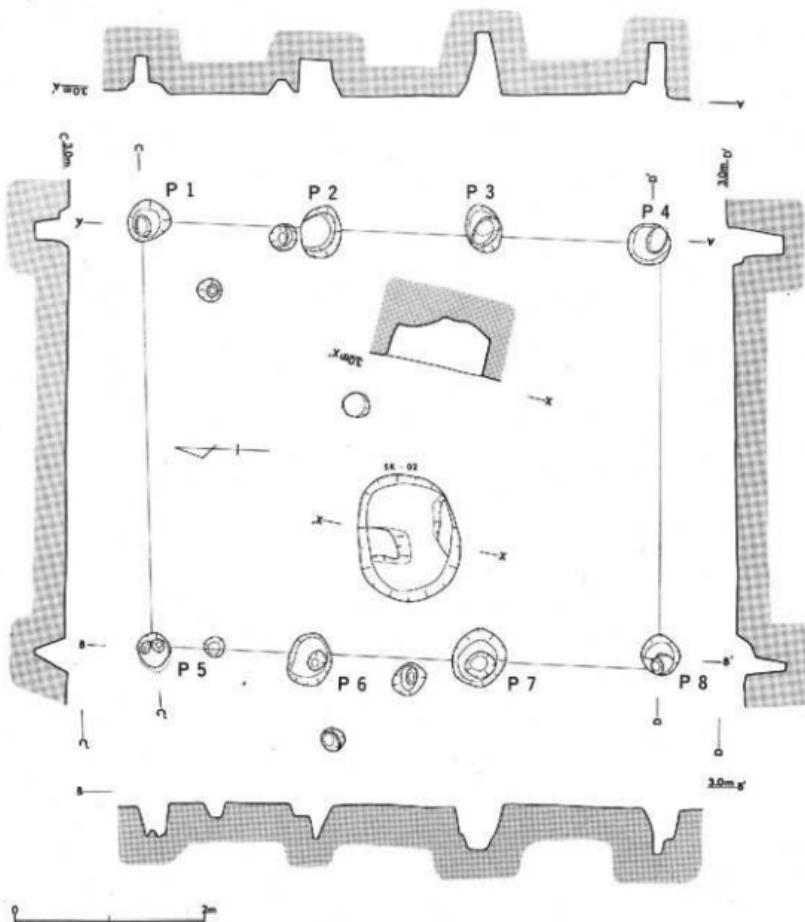
調査区の北東隅に位置し、遺物包含層に掘り込まれている。排水用の溝を調査区の周囲に掘った際に一部が削られたが、検出時で長さ80cm、幅70cm、深さ15cmをはかる浅い土壌である。土壌内からは、土師器の高坏、長頸壺、須恵器の蓋坏、高坏が多数出土している。

S K -01出土遺物 (第42・43図)

42-1~6は土師器の高坏である。1は、口縁部が斜め上方へ緩やかに立ち上がり、坏部外面にかすかに稜をもつ。坏部内面には赤色顔料を塗布し、暗文を施す。2・3は口縁端部がわずかに外反するもので、坏と脚の接合部が明確な稜をつくっている。調整は坏部内外面と脚部外面がハケメ、脚内面はシボリメが認められる。4は器壁がやや厚いが、2・3と同様なタイプだと思われる。5は坏部外面に明確な段をもち、脚端部には面をつくりだしている。調整は風化のためはっきりと判らないがナデのようである。6は形態的には2~4と同じものと考えられる。坏と脚の接合方法が判る資料である。7は風化が著しいが、外面はハケメ調整、内面はナデで粘土紐の単位を確認する



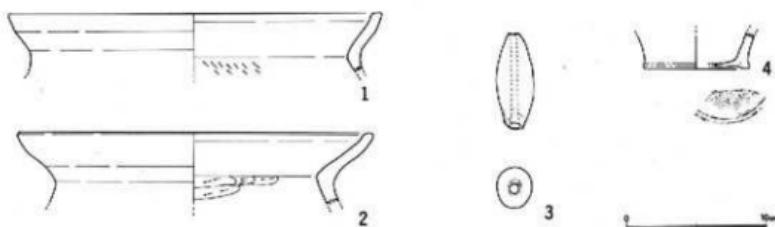
第35図 I区 S I -01出土遺物実測図 (1:4)(2・3・4は床面上、1・5は埋土中)



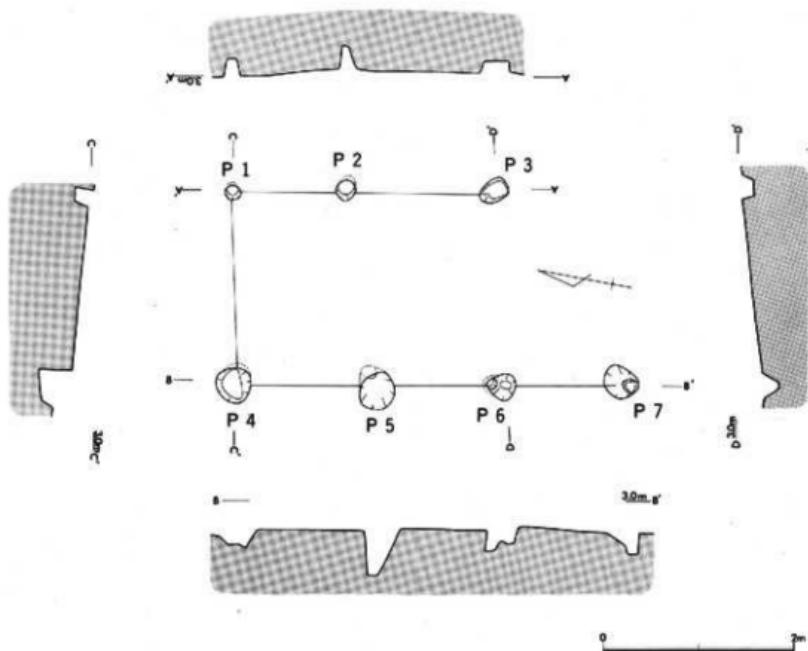
第36図 I区 SB-01・SK-02実測図 (1 : 60)



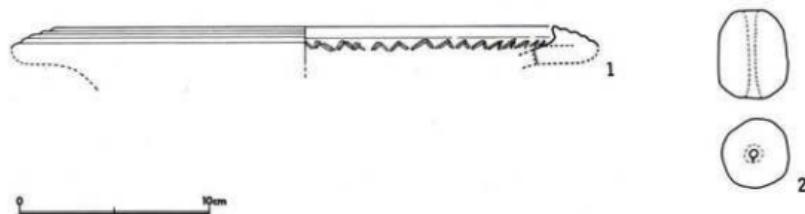
第37図 I区 SB-01出土遺物実測図 (1 : 3) (1はピット4、2はピット6から出土)



第38図 I区 SK-02出土遺物実測図 (1 : 4)



第39図 I区 SB-02実測図 (1 : 60)



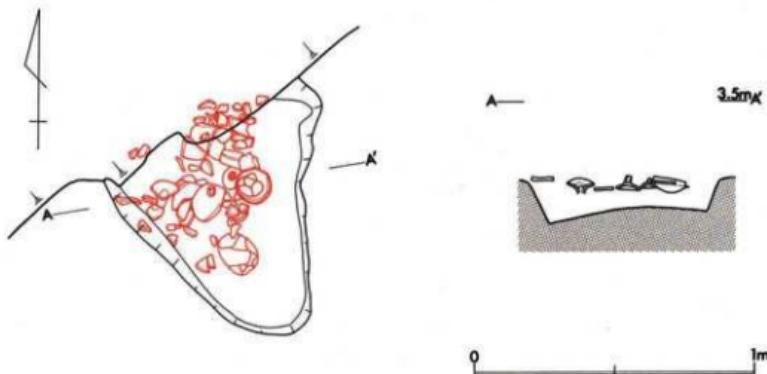
第40図 I区 SB-02 (P-5) 出土遺物実測図 (1 : 3)

事ができる。

43-1~3は須恵器の坏身である。立ち上がりは高く、わずかに内傾し、端部は1がノミ刃形で、2と3は段をもつ。いずれも底部の約1/2をヘラケズリ調整する。4・5は坏蓋で、口縁端部は坏身と同様の形態で、4はノミ刃形、5は段をもつ。天井部と体部の境界は、4が明確な段、5は沈線に近いものとなっている。6・7は高坏である。6は口縁端部が2段になるもので、坏部約1/3をヘラケズリする。脚は端部が内湾し、3方向に円形透孔をもつ。7は坏部下半に波状文が施され、脚部は3方向に3角形の透孔をもつ。須恵器については、いずれも山陰須恵器編年I期に含まれるもので、これらの遺物は、古墳時代中期後葉の良好な一括資料と言ふことができる。

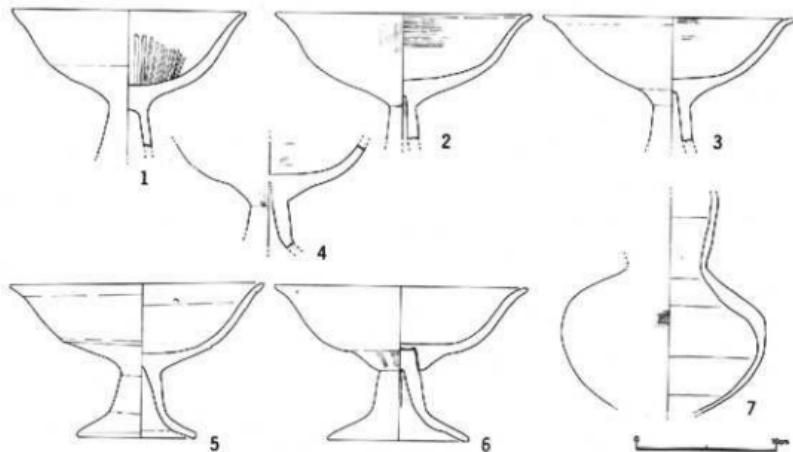
SK-03 (第44・45図)

長辺1.8m、短辺0.8m、深さ0.3mの土壇で、検出面の標高は2.8mである。埋土は2つに分層でき、下層から壺、甕などの土器片多数が出土した。これらのうち、甕の1個体が土壤内で押しつぶ

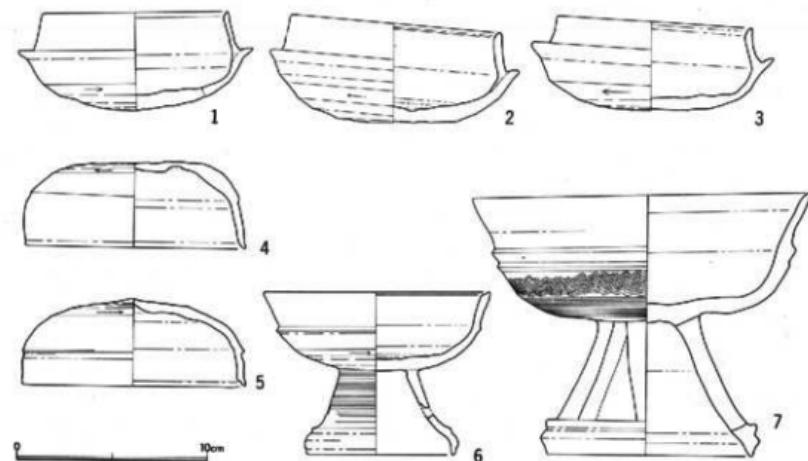


第41図 I区 SK-01出土遺物出土状況実測図 (1 : 20)

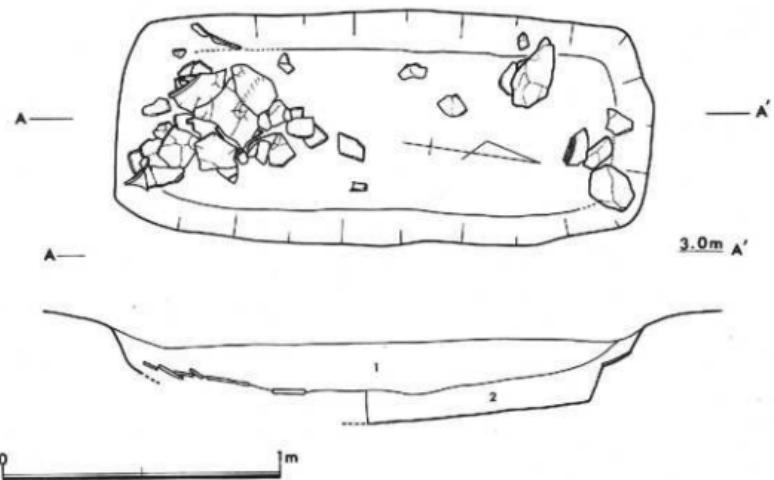
されたような状態で検出されたほか、数個の自然石が土壤内で確認された。土器の出土状態などから土壤墓の可能性が考えられる。



第42図 I区 SK-01出土遺物実測図① (1 : 4)



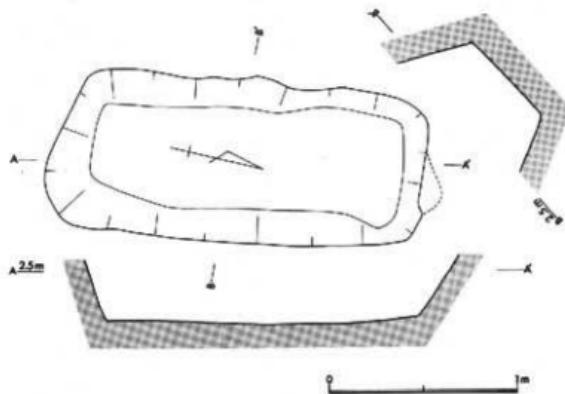
第43図 I区 SK-01出土遺物実測図② (1 : 3)



第44図 I区 SK-03遺物出土状況実測図 (1 : 20)

SK-03出土遺物 (第46図)

出土した土器のうち、復元できたものを図示した。1・2は壺の口縁部である。1は大きく外反する口縁をもち、端部が肥厚し、わずかに内側に拡張する。端部外面には、5本の凹線を施し、3



第45図 I区 SK-03完壺実測図 (1 : 30)

本単位の粘土紐を貼付け、口唇部、口縁内面は刻目文、斜格子文で飾る。2も口縁が大きく外反し、肥厚した端部の内外面を凹線、波状文、斜格子文などで飾っている。3は壺の口縁部で、端部には浅い沈線をめぐらせ、頸部には指頭圧痕突帯をもつ。胴部外面はハケメ、内面はハケメとヘラミガキで調整する。4は壺の底部と考えられる。平底で、内面はナデで調整する。これらの遺物の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

S B-02上層土器群（第47図）

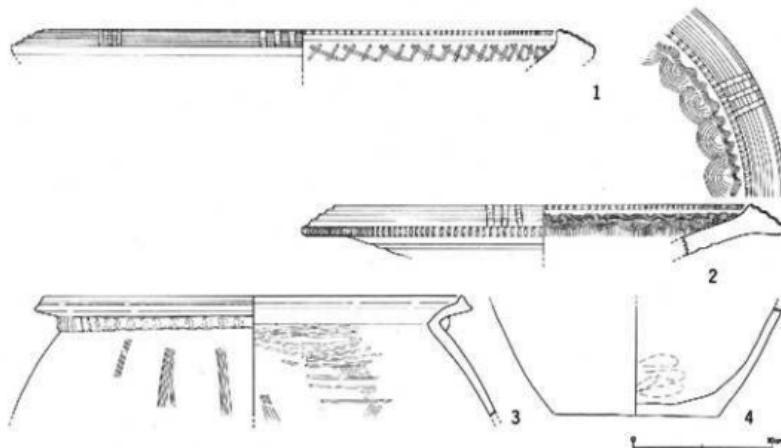
調査区東側に存在する基盤層のほぼ中央で、土器がまとまって出土した。これらの土器のほとんどは基盤層の直上で確認され、これらを取り上げた後、精査した時点でS B-02が検出された。

S B-02上層出土遺物（第48図）

出土した遺物のうち復元できた遺物を図示した。1・2は壺である。1は大きく外反する口縁をもち、端部は肥厚する。口縁端部と肩部には凹線文、口縁の下位に突帯文を施す。2は頸部のみの破片で、指頭圧痕突帯を貼付けるものである。3～5は底部で、3・4は内面ハケメ、外面ヘラミガキ調整で、5は内外面ともヘラミガキである。6は蛤刃石斧でかなりの部分を欠いている。刃部は片側がかなり減っており、相当使用されたものであろう。石材は安山岩である。時期は弥生時代中期中葉～後葉と考えられる。

S K-03北側ピット群（第49図）

S I-01とS K-03の間の基盤層上に、7つのピットを検出した。標高は2.7～3mである。最大



第46図 I区 S K-03出土遺物実測図 (1 : 4)

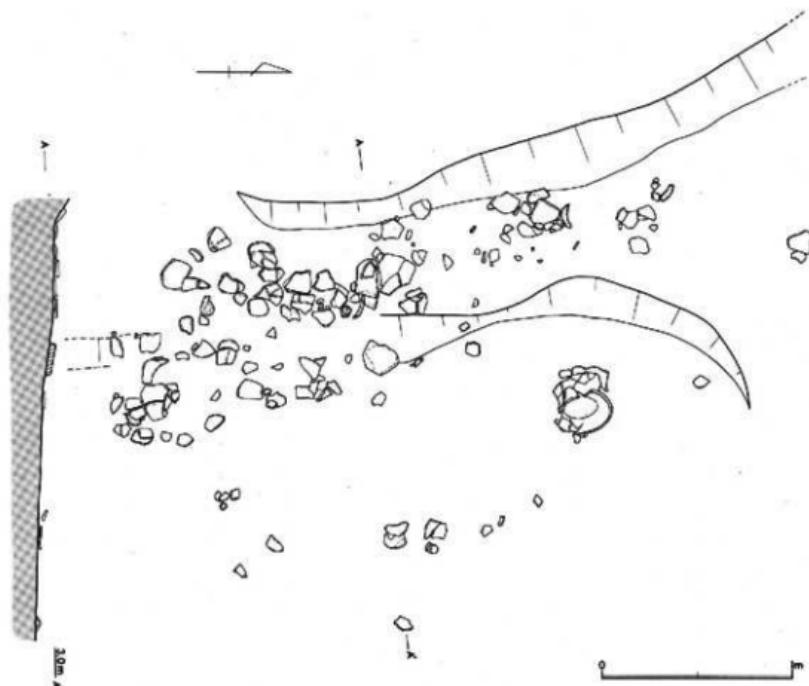
のもので径70cm、深さ70cm、最小のものは径40cm、深さ20cmである。SB-02と位置的に近く、一連のものである可能性も考えられたが、ピット間の距離などから別個のものとした。

SK-03北側ピット群出土遺物（第50図）

底部2点と紡錘車が出土している。1は内面ヘラケズリ後ナデ、外面ヘラミガキ、2は内面ナデ、外面ヘラミガキで調整する。3は土器を転用したもので、表側はヘラミガキ、裏側にはヘラケズリがみられる。これらは弥生時代中期のものである。

土錘溜り（第51～53図）

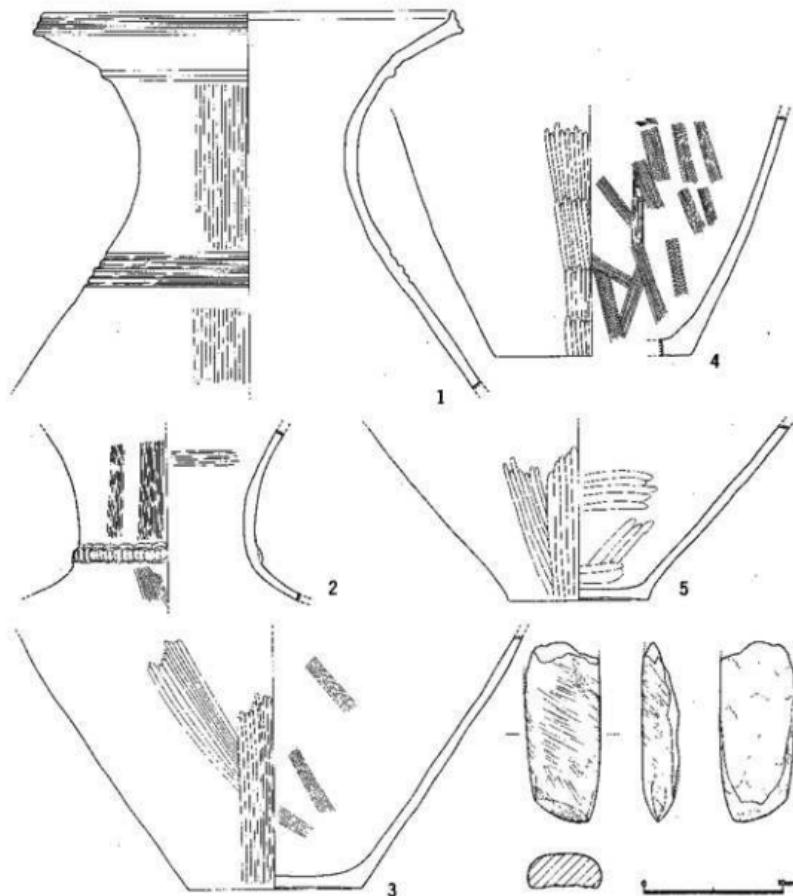
SB-02を調査した後、掘り下げていく途中で、暗褐色土中から土錘がまとまって出土した。位置的にはSB-01北東隅の柱穴の付近である。土錘は合計29個が一塊の状態で出土し、遺物包含層からの出土ではあるが、まとまったものと考えられる。大きさは長さ4～5cm、幅3～4cm、重さ30～50gである。



第47図 I区 土器群出土状況実測図 (1 : 30)

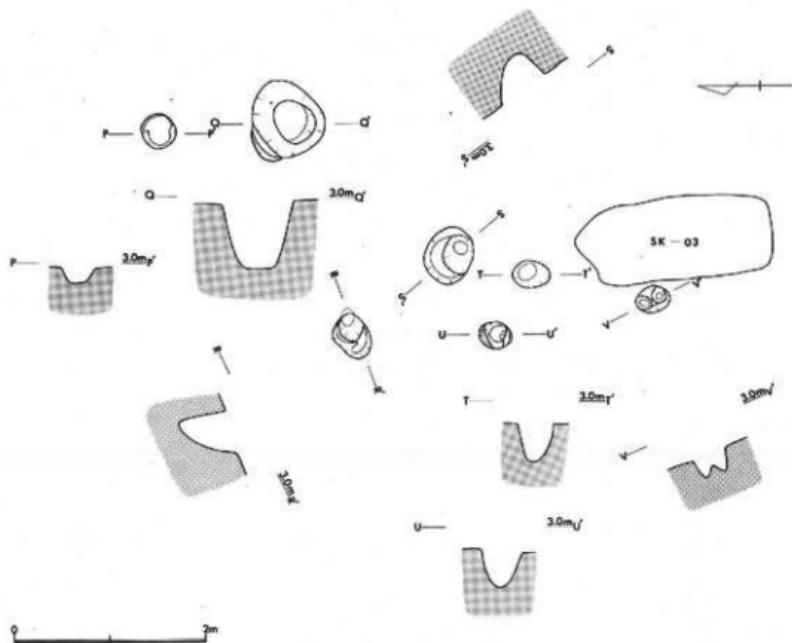
I 区包含層中出土遺物（第54～56図）

55-1～4は壺である。櫛描文、浮文、突蒂文、凹線などを施し、口縁が大きく外反するものである。弥生時代中期中葉～後葉のものである。5～10は壺である。口縁端部に凹線、擬凹線を施し、8はこの他にも浮文、頸部には指頭圧痕突帯を巡らせる。6、8が弥生時代中期、5、7、9、10が後期である。11・12は高坏である。11は口縁が複合化し、端部に5本の凹線が施される。12は無

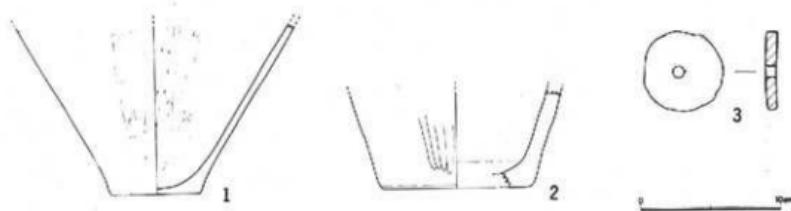


第48図 I区 土器群出土遺物実測図 (1 : 4)

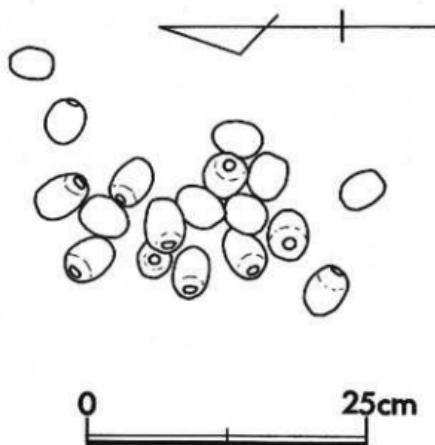
文で、口縁端部が肥厚し外反する。調整は全面ナデである。類例がなく、時期の判断が困難であるが、ここでは複合口縁が形骸化したものと考え、弥生時代後期とする。13~15は土師器の臺である。



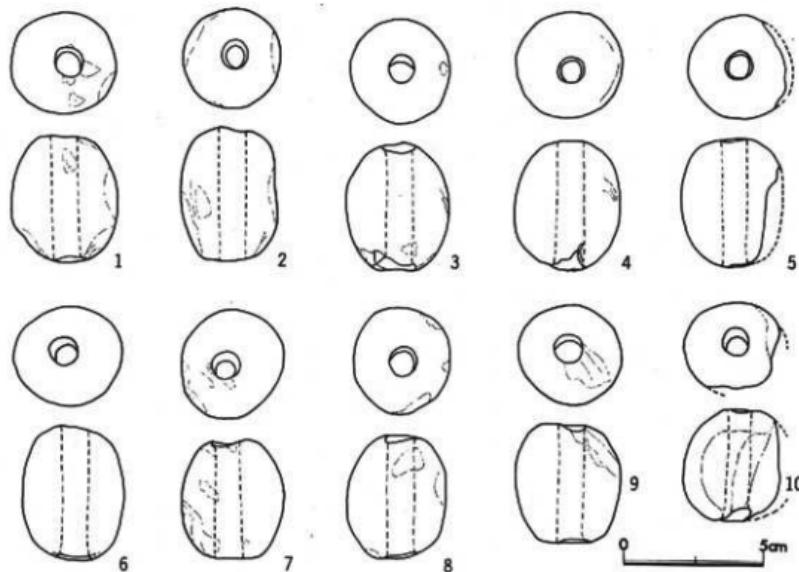
第49図 I区 ピット群実測図 (1 : 60)



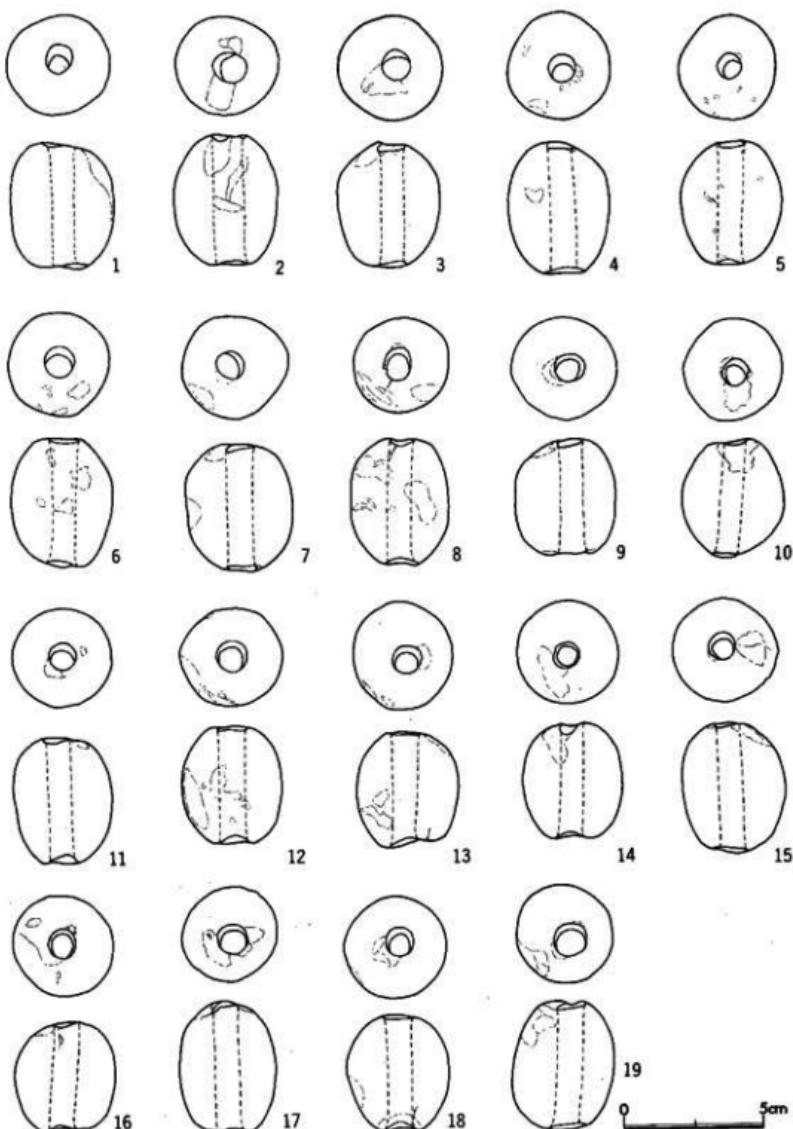
第50図 I区 ピット群出土遺物実測図 (1 : 4)
(1はピット7、2はピット8、3はピット6より出土)



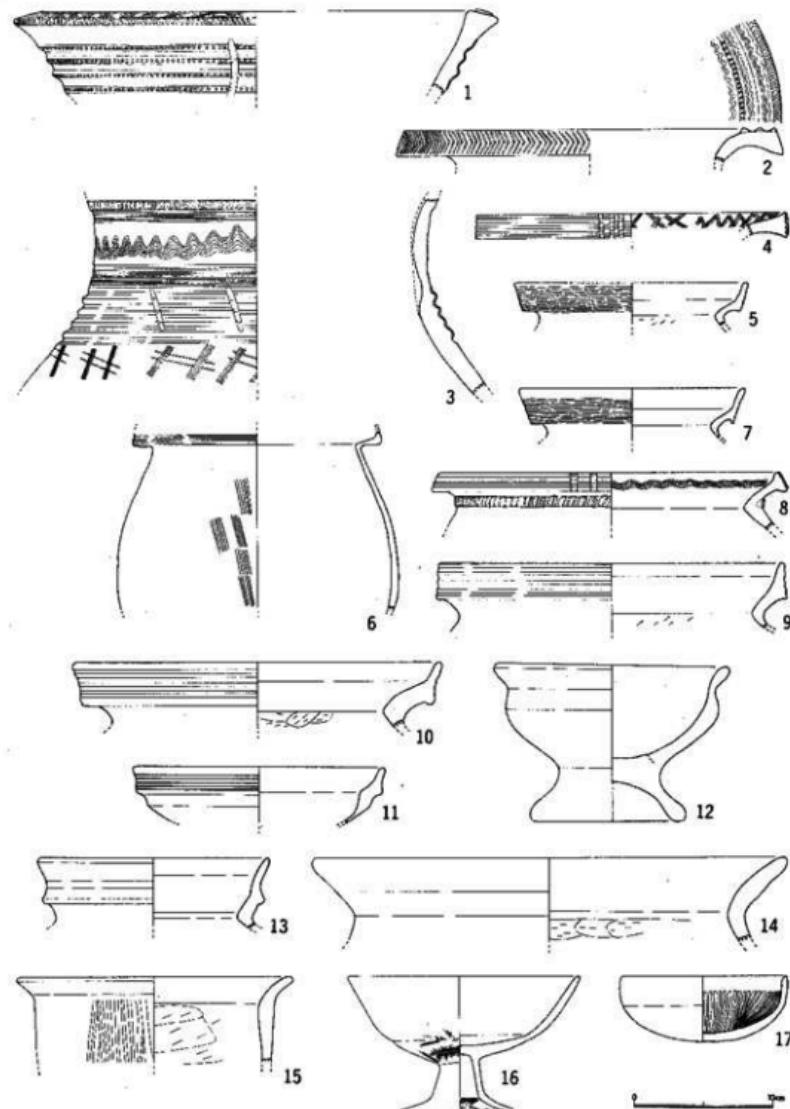
第51図 I区 土鍋溜り出土状況実測図 (1 : 5)



第52図 I区 土鍋溜り出土遺物実測図① (1 : 2)



第53図 I区 土鍵溜り出土遺物実測図② (1 : 2)

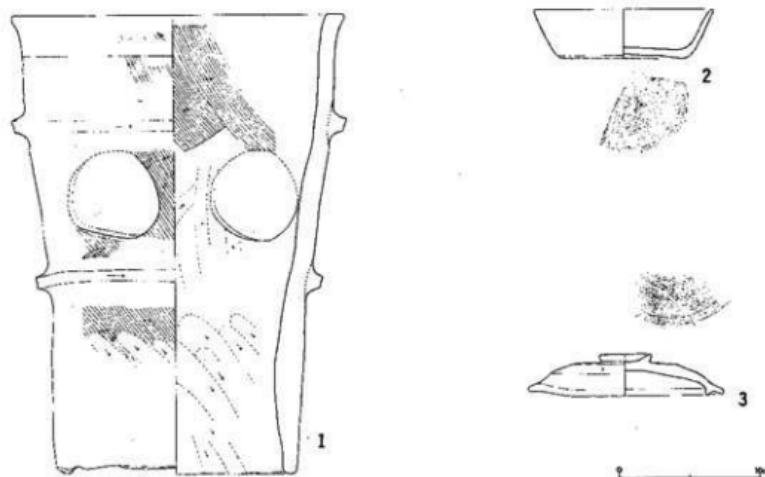


第54図 I区 包含層中出土遺物実測図① (1 : 4)

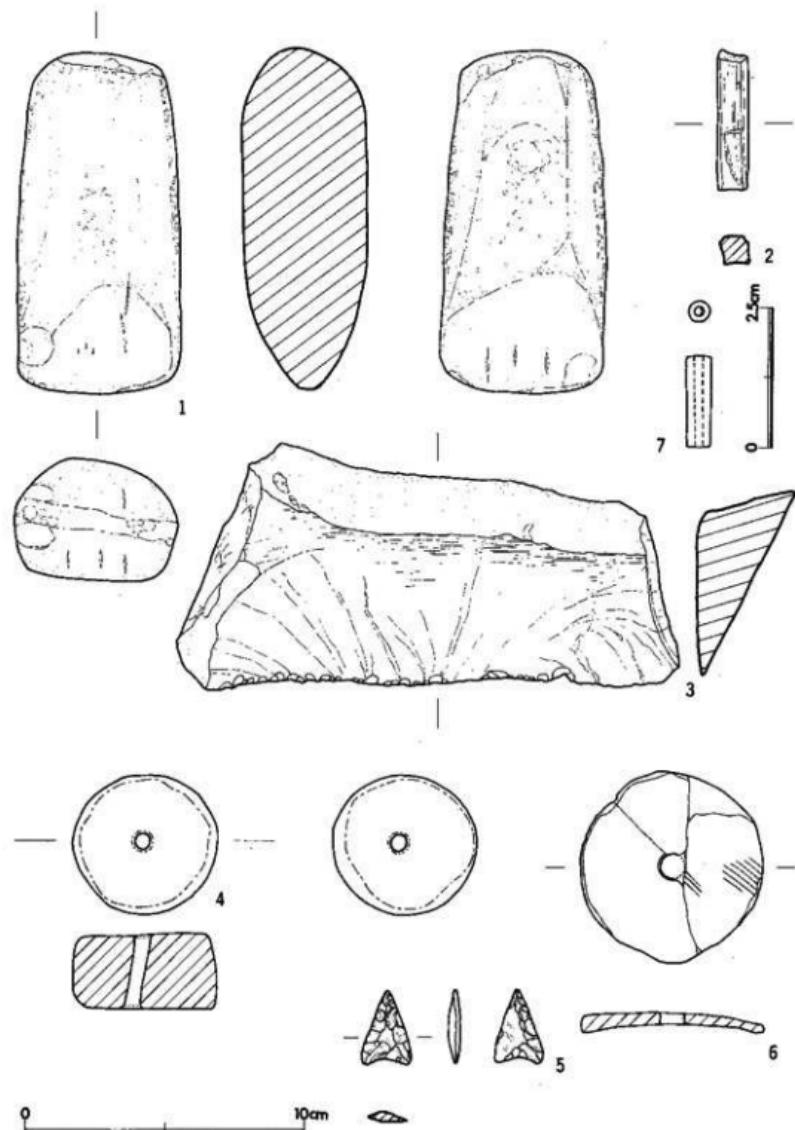
13は口縁部が複合口縁の退化した形態をとるもので、古墳時代中期中葉と推定される。14、15は外反する単純口縁をもつが、15はあまり脛が張らないものと思われる。16は高坏で、口縁部は斜め上方に緩やかにのび、坏部に稜をもつ。17は坏で、内面に暗文をもち、赤色顔料が塗布されている。16・17は古墳時代中期中葉～後葉と考えられる。

55-1は円筒埴輪で、遺物包含層の下に存在する砂層中から多数の破片が出土したが、そのうちほぼ完形に復元できたものである。底部から口縁部にかけてわずかに開き、タガは2段で台形の断面を呈するが、上端をわずかに突出させる。透孔は2方向に設ける。1次調整はナナメ方向のハケメ、2次調整は胴部がヨコ方向のハケメ、底部がナナメ方向のハケメである。基底部には押圧による底部調整を施しており、切断はしていない。2は須恵器の坏、3は坏蓋である。2は上げ底氣味の底部で、回転糸切りである。3は輪状つまみで、低いかえりをもつもので、天井部にはヘラ記号が確認できる。器形、調整の特徴から、2が出雲国庁幅年の第3ないし4形式、3が第1形式に相当すると思われる。

56図は石器、土製品である。1は蛤刃石斧で、先端は摩耗し丸みを帯びている。2は管玉の未製品、3は大形の石包丁である。4は土錘と考えられる。5は無茎の石鏟である。6は弥生土器転用の紡錘車である。7は管玉で、2方向から穿孔している。石材は2が緑色凝灰岩、3が玄武岩質安山岩、5はサヌカイト、6は壁玉である。



第55図 I区 包含層中出土遺物実測図② (1 : 4)



第56図 I区 包含層中出土遺物実測図③ (1 : 2)

II区

II区は、北西から南東へのびる丘陵上で、最高点で標高21mをはかり、本来調査区南端からさらに南へ100mのびる丘陵であるが、後世の加工により先端が切断されて独立しているように見える。⁽⁴⁾この先端部には、横穴墓があったとされている。堆積上中からかなりの量の遺物が出土したが、検出した遺構は比較的少なく、尾根上に送電用の鉄塔が存在したこと、地山の擾乱土層が厚く堆積していることなどから、後世の擾乱によりいくつかの遺構が消滅した可能性が考えられる。

S I - 01 (第58図)

II区西側の斜面から平坦面への傾斜変換点付近に立地し、標高は床面で4.0mである。一部が削られているが、周壁の上縁で直径4.8mをはかる円形住居跡である。記述の都合上II区に含めるが、I区の遺構群と位置的に近く、遺構群として捉える場合はI区に含めるべきであろう。

住居跡の斜面側では周壁の外側に幅50~70cmの平坦面がめぐり、そこから住居を掘り込んでいる。床面からは4つの主柱穴と中央ピットを検出したが、周溝は認められなかった。柱穴間の距離は2.3~2.4m、規模は上縁で径30~50cmで深さ60cm程度である。中央ピットは径40cmの円形プランで、深さ30cmである。

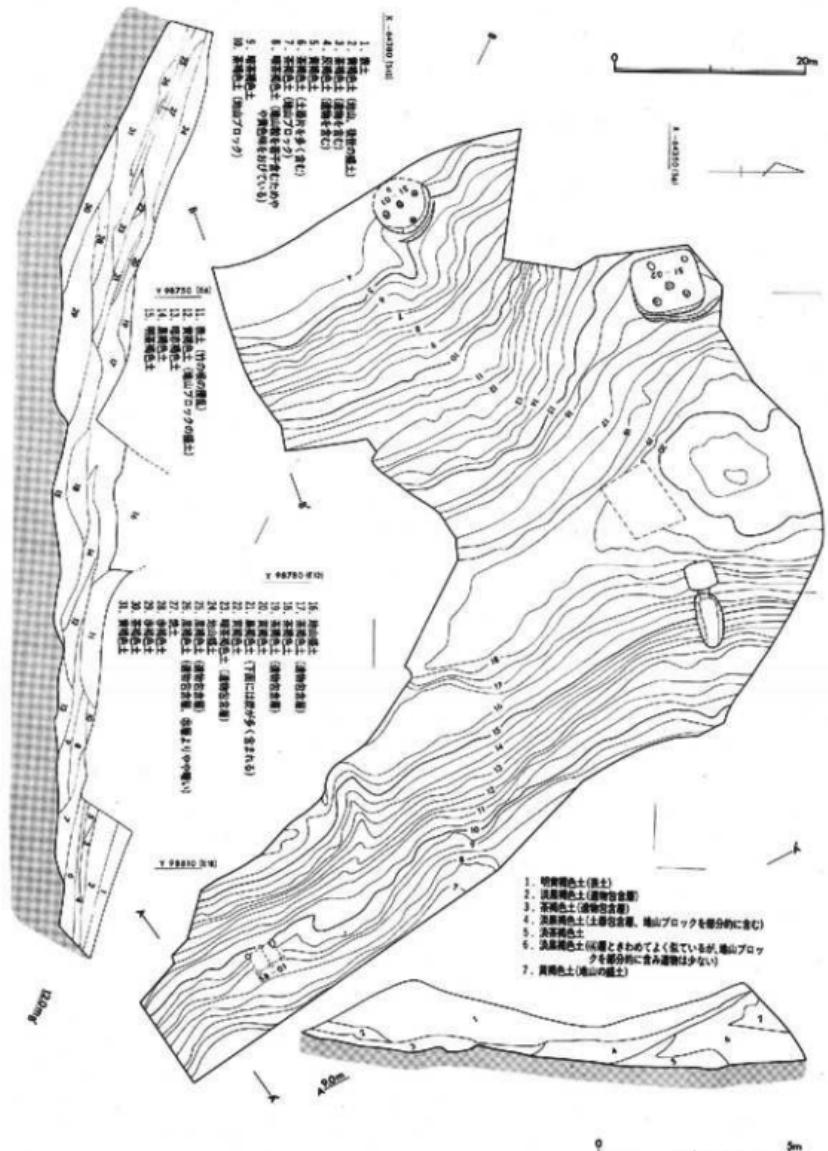
S I - 01出土遺物 (第59図)

3が床面から、そのほかは埋土巾から出土した。1・2は壺の口縁部で、1は文様をもたず、2は15条の平行沈線をもつ。4は壺の体部と考えられ、外面にはクシ状工具による刺突文、内面にはハケメを施す。4は底部で、底部穿孔されている。遺物の時期は、3が弥生時代中期中葉、1と2は後期後半である。

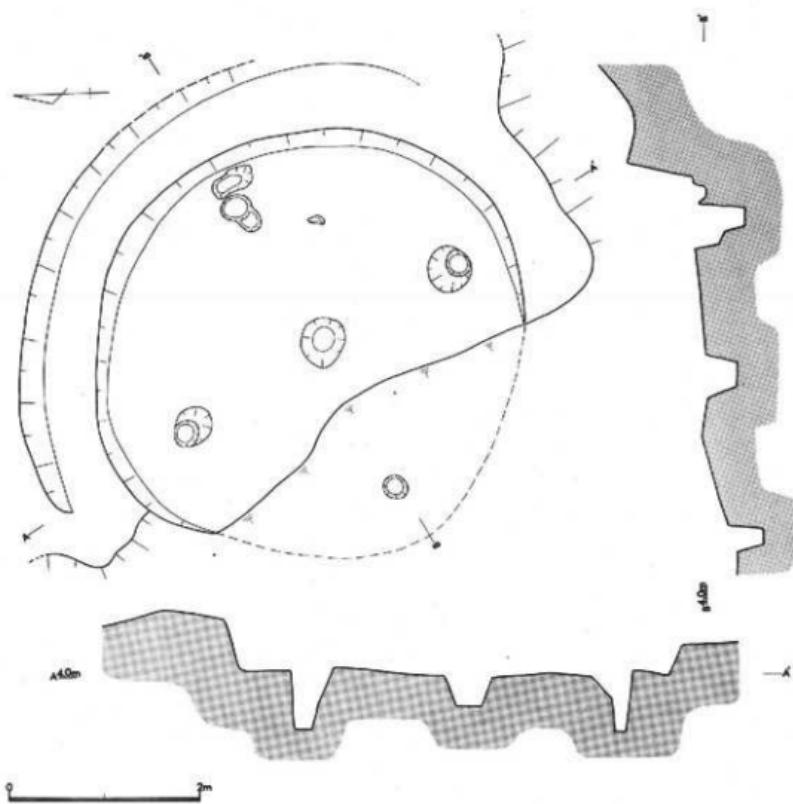
S I - 02 (第60図)

丘陵頂部からわずかに西側に下った緩斜面に立地する隅丸方形プランの竪穴住居跡で、規模は周壁上縁で、長辺5.9m、短辺4.9mである。標高は床面で15.9mをはかる。住居跡の周囲には3つの平坦面があるが、その性格は不明である。また、住居内を断層がはしり、断層北側は南側より約10cm高い。

周壁は北側、東側、南側に認められ、東側が40cmで最も高い。周溝は周壁に沿って存在するが、東側の一部で途切れている。床面では直径20cm~70cmのピットや、溝状のピットを約30基検出した。主柱穴は4穴で、上縁径50~80cm、深さ40~60cmをはかる。また、住居南部には壁状の段が認められることなどから住居を拡張したことが考えられ、南側の主柱穴がさらに南へ移動したと推定される。拡張前の柱穴間の距離は2.8~3m、拡張後は南北方向のみ80cm長くなり、中央ピットも位置を変えていると考えられる。この他のピットについては遺物の出土もなく、性格は不明である。



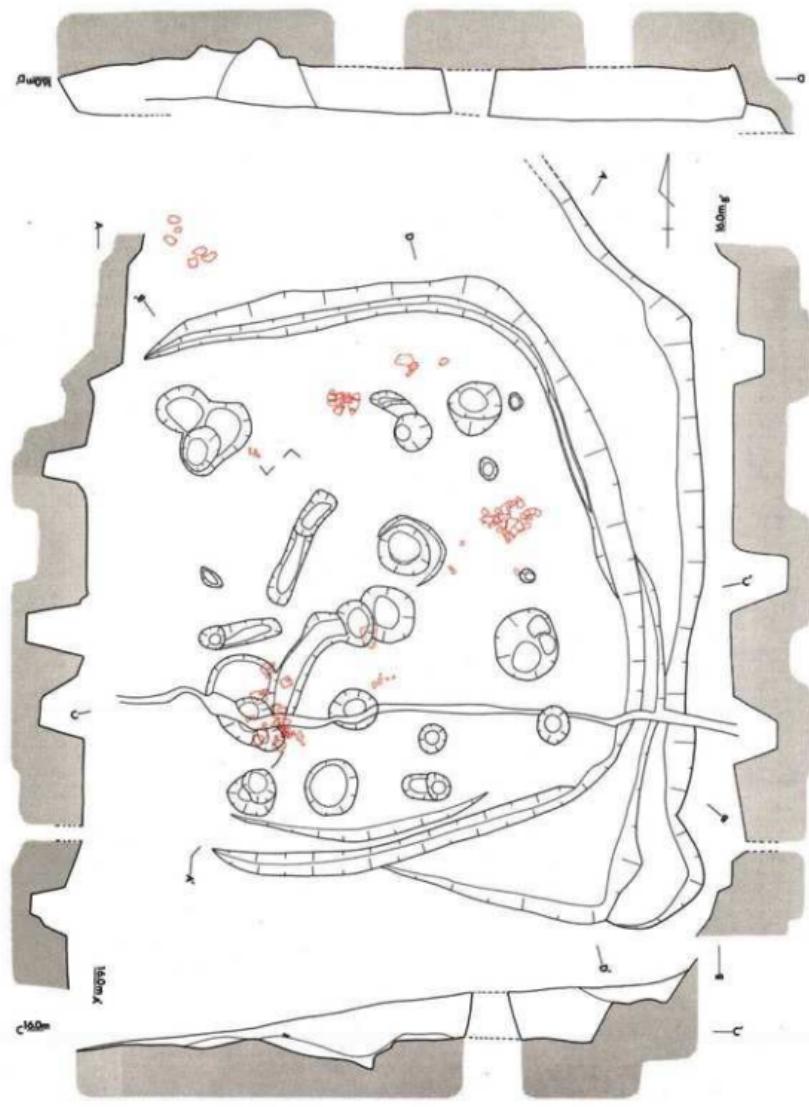
第57図 II区 遺構配置図 (1 : 600、セクションは1 : 150)



第58図 II区 S I - 01実測図 (1 : 60)



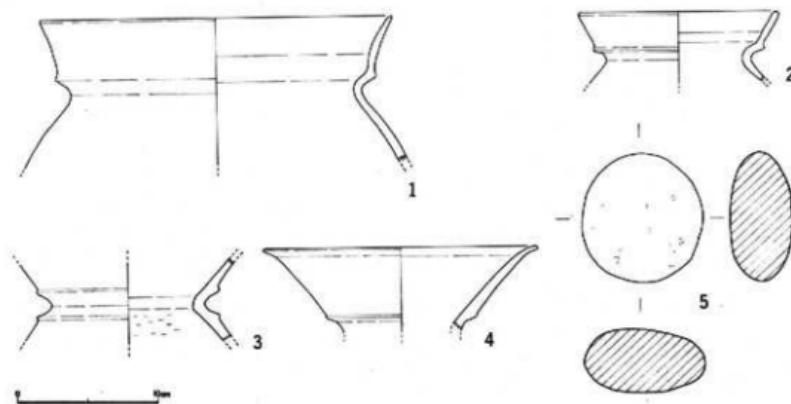
第59図 II区 S I - 01出土遺物実測図 (1 : 4) (3は床面、1・2・4は埋土中出土)



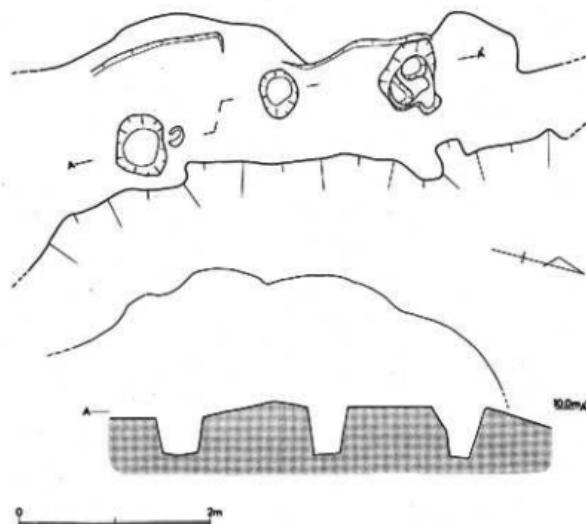
第60図 II区 SI-02実測図 (1:60)

S I -02出土遺物 (第61図)

1・2は甕、3・4は鼓形器台、5は敲石と考えられる。1は口縁が緩やかに外反し、端部は比較的鋭い。風化が著しいため施文、調整とも不明である。2は口縁が外傾し、端部は均一な厚さを



第61図 II区 S I -02出土遺物実測図 (1 : 4) (1・3・4は床面、2・5は埋土中出土)



第62図 II区 S B -01実測図 (1 : 60)

もつ。3、4も文様が施されないので、外面はヨコナデ、上台内面はヘラケズリののちヘラミガキ、脚台はヘラケズリである。5は、表面がかなり滑らかになっている。時期は、1・3・4が弥生時代後期、2が古墳時代前期である。

S B - 01 (第62図)

II区東側斜面に存在し、調査区の南端に近い緩斜面上に存在する。床面の標高は約10mで、斜面を削り出して平坦面をつくり建物を設けているが、後世の加工により平坦面がかなり削られており、平坦面は幅1.5m、柱穴も横行2間(3m)を検出したのみである。柱穴の規模は径、深さとも40～50cmである。これにともなう溝は確認されず、遺物も出土していない。

1号横穴墓 (第63～65図)

II区北部の東側斜面に存在する。II区の丘陵北端にわずかな高まりが存在するが、これが横穴墓の後背墳丘になる可能性がある。標高は前底部床面で12.8m、玄室床面で13.2mである。発掘調査に入る直前に落盤があり、玄室の天井部のほとんどと、左壁と奥壁の上半分が失われた。開口方向はほぼ真東で、わずかに北へ振っている。

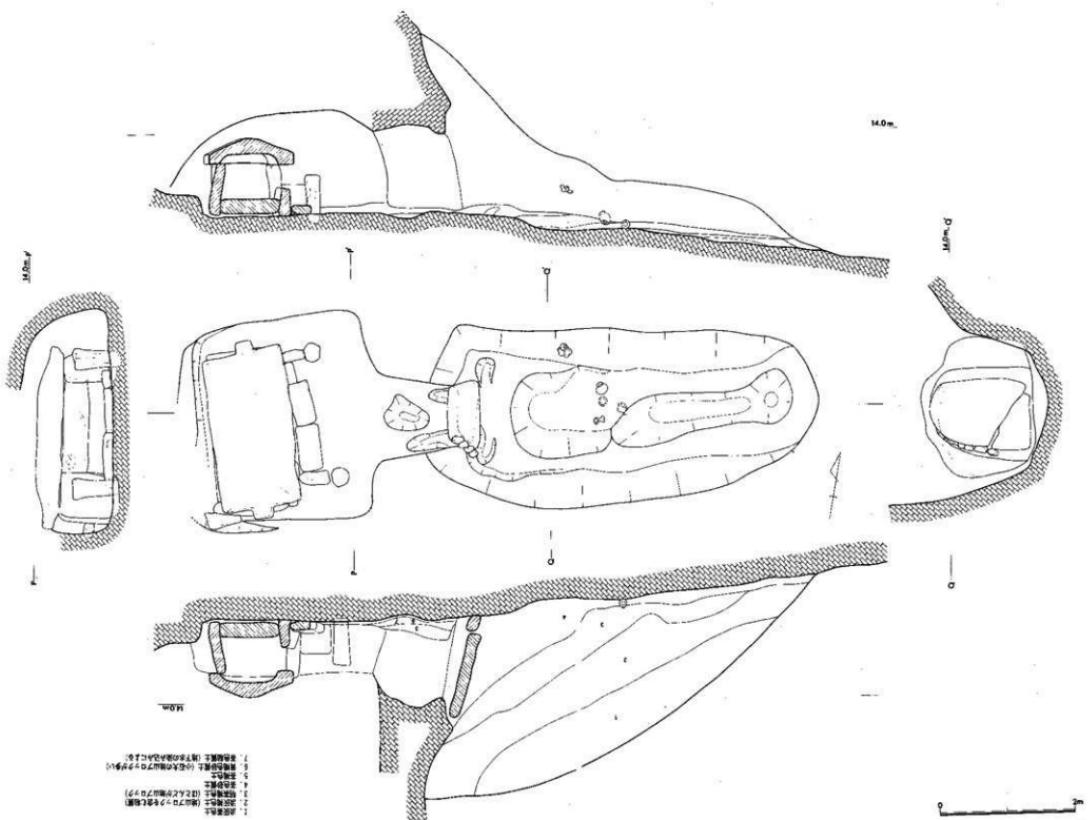
〈前庭部・閉塞施設〉

前庭部は、現状で長さ約5m、床面幅1.2～1.6mを測る比較的狹長なもので、床の横断面は浅いU字形を呈す。玄門部の床面には、閉塞石をはめこんでいるものとは別の刺込みをもつ。前庭部の土層は、最下層がいわゆる真砂土で、その上に地山ブロックを含む粘質土が2層にわたって厚さ60～100cmに堆積しており、自然の堆積ではなく、真砂土を入れた後、粘質土をかぶせるという意図的な埋め戻しを行っていることがわかる。また、層位的には粘質土より下は擾乱もなく、盜掘の行われた形跡は認められない。閉塞石は、上端幅70cm、下端幅90cm、高さ140cm、厚さ20cmの板状の一枚石を使用しているが、途中から割れ、わずかに上側がずれている。また、羨門と閉塞石の大きさが若干違っており、隙間には拳大～人頭大の礫を詰めている。玄門は上端幅60cm、下端幅90cm、高さ120cmを測り、幅10～25cm、深さ10～20cmの閉塞用刺り込みをもつ。

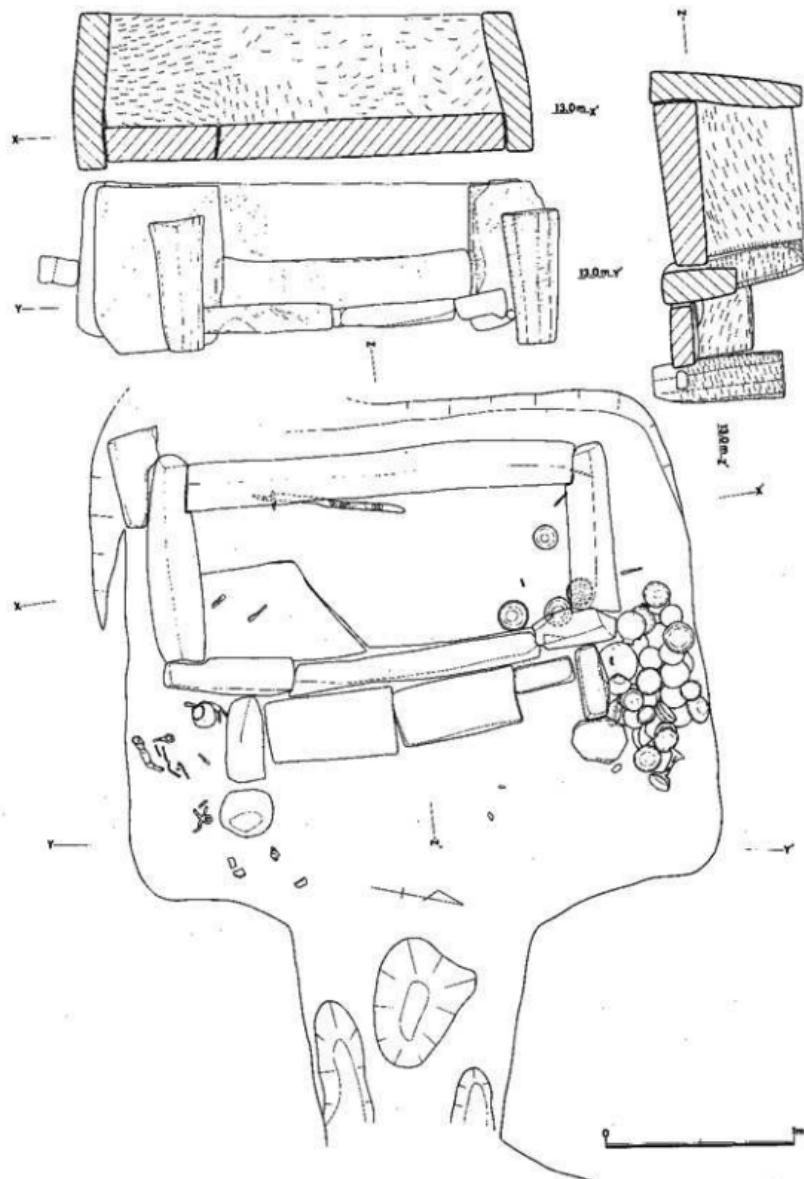
〈羨道・玄室・埋葬施設〉

羨道は、幅90～120cm、高さ120cmで床には浅いくぼみをもち、玄室に向かって緩やかに上る。玄室主軸は羨道の主軸からわずかに南へ振っており、平面形は幅2.6m、奥行き3mで、わずかに横長の長方形を呈す。四壁を画す明確な界線は認められない。天井はドーム形で、先述したように崩壊しているため最大高は不明であるが、現存最大高は1.4mで、最大高もそれほど変わらないと思われる。

埋葬施設は、横口をもつ組み合わせ式家形石棺とその前方に位置する樋石状の石材、柱状の石材などからなる。石棺は、主軸が玄室主軸に直交するように置かれている。石材のほとんどには幅7cmの加工痕が認められる。石棺に使用している石材は、厚さ15cm程度の切石でいざれも通称「荒島

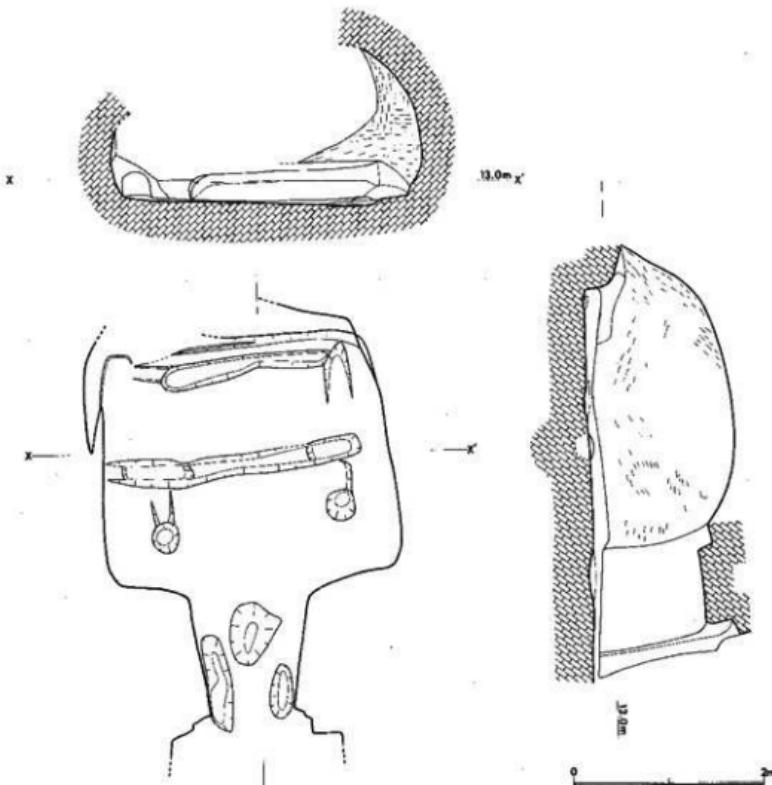


第63図 II区 1号横穴実測図（石棺天井石は復元）（1：60）



第64図 II区 1号横穴玄室内石棺及び床面遺物出土状況実測図 (1 : 30)

石」と呼ばれる軽石質凝灰岩と考えられる。前壁は3枚、両側壁と奥壁、床石、天井石はそれぞれ一枚の石を用いているが、天井石は落盤のため2枚に割れ、床石も一部割れ目が入っている。天井石は長辺230cm、短辺120cmを測るもので、外面は屋根形に加工し、内面もU字形に割り込んでいる。短辺側のはば中央に繩掛突起がつくが、右側のものは欠落しており、玄室内で出土した。石棺の規模は外法で長辺2.5m、短辺1.2mを測り、両側壁が割り込みをもち奥壁を受け、前壁も側壁を受けるための割り込みをもつ構造をとる。横口部は幅140cm、高さ40cmで、横口両側の前壁には割り込みを設け、横口下部の石と組み合わせている。横口の前方には3枚の切石をおき、その左右には高さ40cmの側壁状の切石を立てており、更にその前方に柱状の石材を2本設ける。この石材はともに高



第65図 II区 1号横穴石棺除去後の実測図 (1 : 60)

さ70cmで、平面が多角形になるように面取りがしてあり、底部のほうが細くなっている。

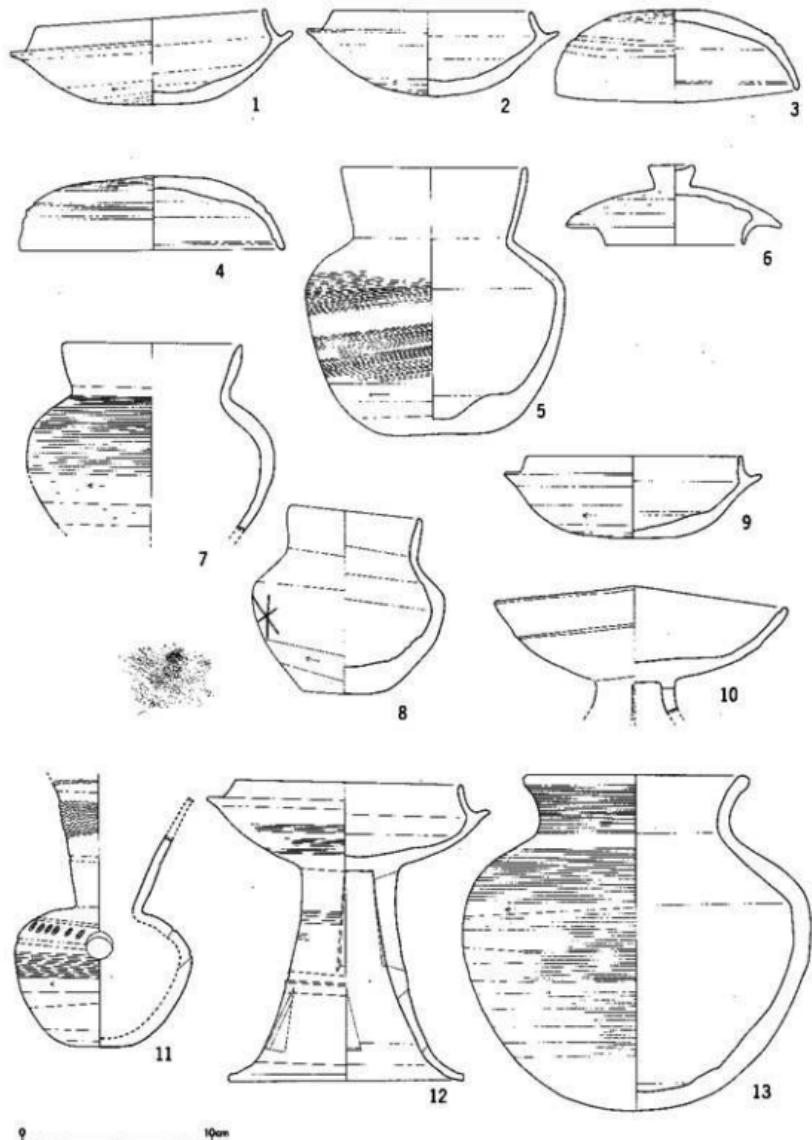
玄室奥壁や床面には石棺の奥壁や側壁、前壁、門柱状の石材などを据えるための掘り込みを設けている。また、天井のラインを復元すると、奥壁の後方約40cmから立ち上がりと推定され、奥壁からさらに奥に向かって平坦面が存在したことが判る。また柱状の石材については、10~15cmの掘り込みを設け、石材を据えた後、隙間に粘質土を詰めている。玄室の壁、天井にはかなりあらい加工痕が残る。

1号横穴出土遺物（第66~75図）

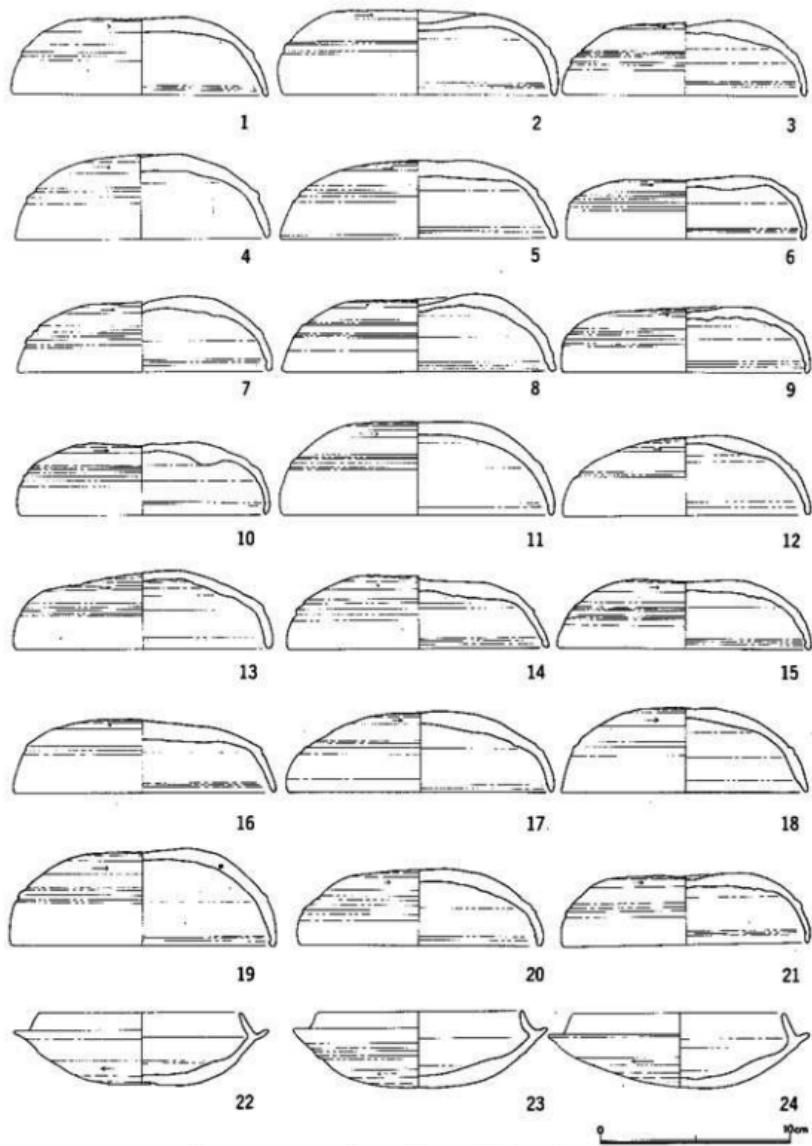
玄室内から出土した遺物は、須恵器、土師器と馬具、刀子などの鉄器類である。鉄器については、錆が著しく、X線撮影も行えなかったため、細部については確認できなかったものも多い。石棺内からは、大刀、鉄鎌、須恵器の蓋環が検出された。また、石棺右壁と玄室右壁との間に須恵器の高环・蓋环・提瓶・短頸壺・翫などの完形品約40点が積み重なった状態で出土した。この中には土師器の高环2点が含まれている。このほか、玄室床面から、飾帶金具、鞍金具、鍍金具、鉢具付金具、^{しきや}鎖綱（三連式兵庫鎖）付木製壺蓋などの馬具、鐵が確認された。この他、横穴の天井が落盤した際、玄室内から素環鏡板付轡が採集されている。前庭部からは須恵器が確認された。

66~1~4は石棺内、5は石棺の南側、その他は前庭部で検出したものである。环身の立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。1が口径が大きく、ヘラケズリの範囲が底部の1/2程度に及ぶのに対し、2は口径も小さく、ヘラケズリの範囲もせまい。3・4は天井部と体部の境界のつくりかた、口縁部内面に沈線をもつ点は共通するが、3がやや口径が大きく、偏平でヘラケズリの範囲も広い。5は文様をもたない平底の短頸壺で、底部外表面をヘラケズリする。6は輪状つまみをもち、内面にかえりのつく蓋である。7・8は短頸壺で、底部をヘラケズリする。8は「米」のヘラ記号をもつ。10・12は高环で、10は环部が比較的浅く、透孔は切込み状のもので、3方向に開けるものと推定される。12の环部は环身と同じ形態をとり、脚部は、3角形透孔を2段、3方向にもつ。11は、平底で、櫛描きの波状文、刺突文で飾る。13は丸底の壺で、外表面をヘラケズリした後、カキメ調整する。

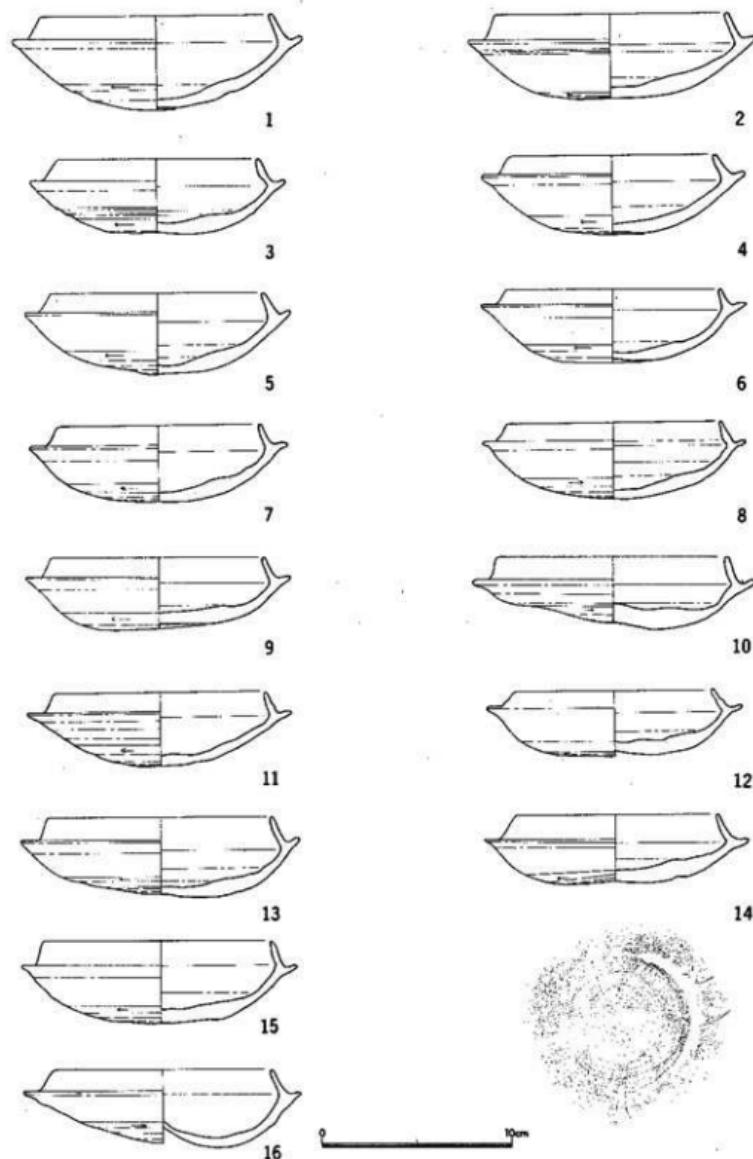
67図~70図は石棺北側から出土した土器で、70~1~2のみが土師器、他は須恵器である。环蓋（67~1~21）は天井部と口縁部の境界の稜が2本の沈線で表現され、口唇部内面に浅い沈線をもつものが多いが、天井部と口縁部の境界を1本の沈線で表すもの（12~16）や、口唇部を単に丸くおさめるもの（4~18）も存在する。また、环身（67~22~69~2）は、たちあがりが短く内傾し、口唇部は段をもたない。底部のヘラケズリは1/2に及ぶものから、ごく一部に施すものまである。69~3~4は提瓶である。3は口縁にしっかりした段をもち、環状になる把手を有す。体部は比較的丸みを帯び、カキメで調整する。4は偏平な胴部をもち、口縁を丸くおさめ、把手は突起状のも



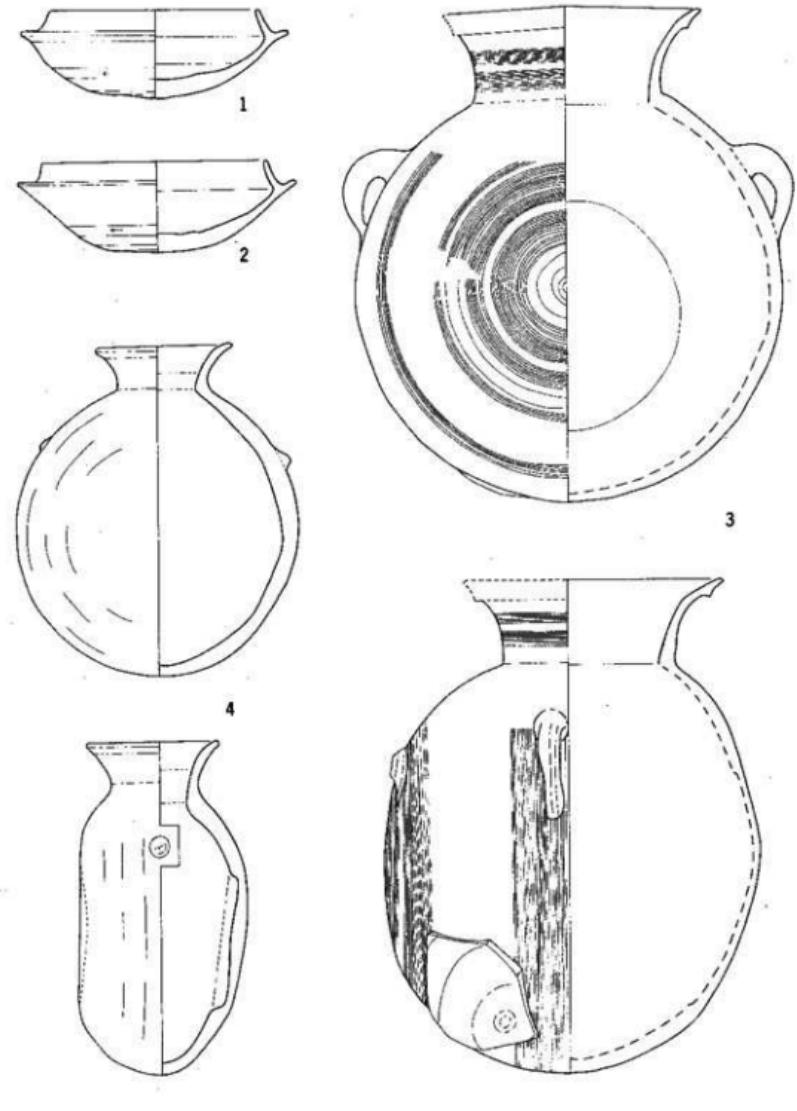
第66図 II区 1号横穴石棺内 (1~4)・石棺南側 (5)・前庭部 (6~13、6は埋土中)
遺物実測図 (1:3)



第67図 II区 1号横穴石棺北側遺物実測図① (1 : 3)



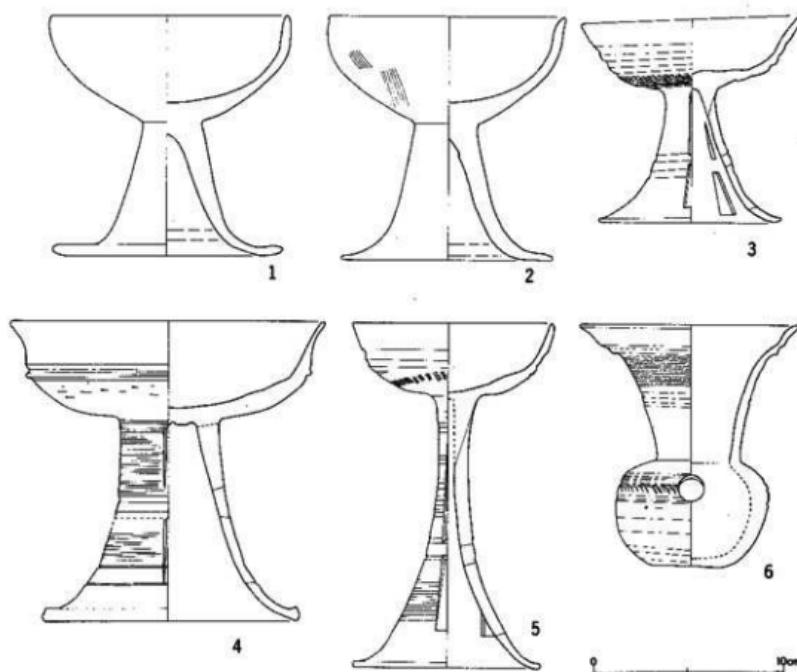
第68図 II区 1号横穴石棺北側遺物実測図② (1 : 3)



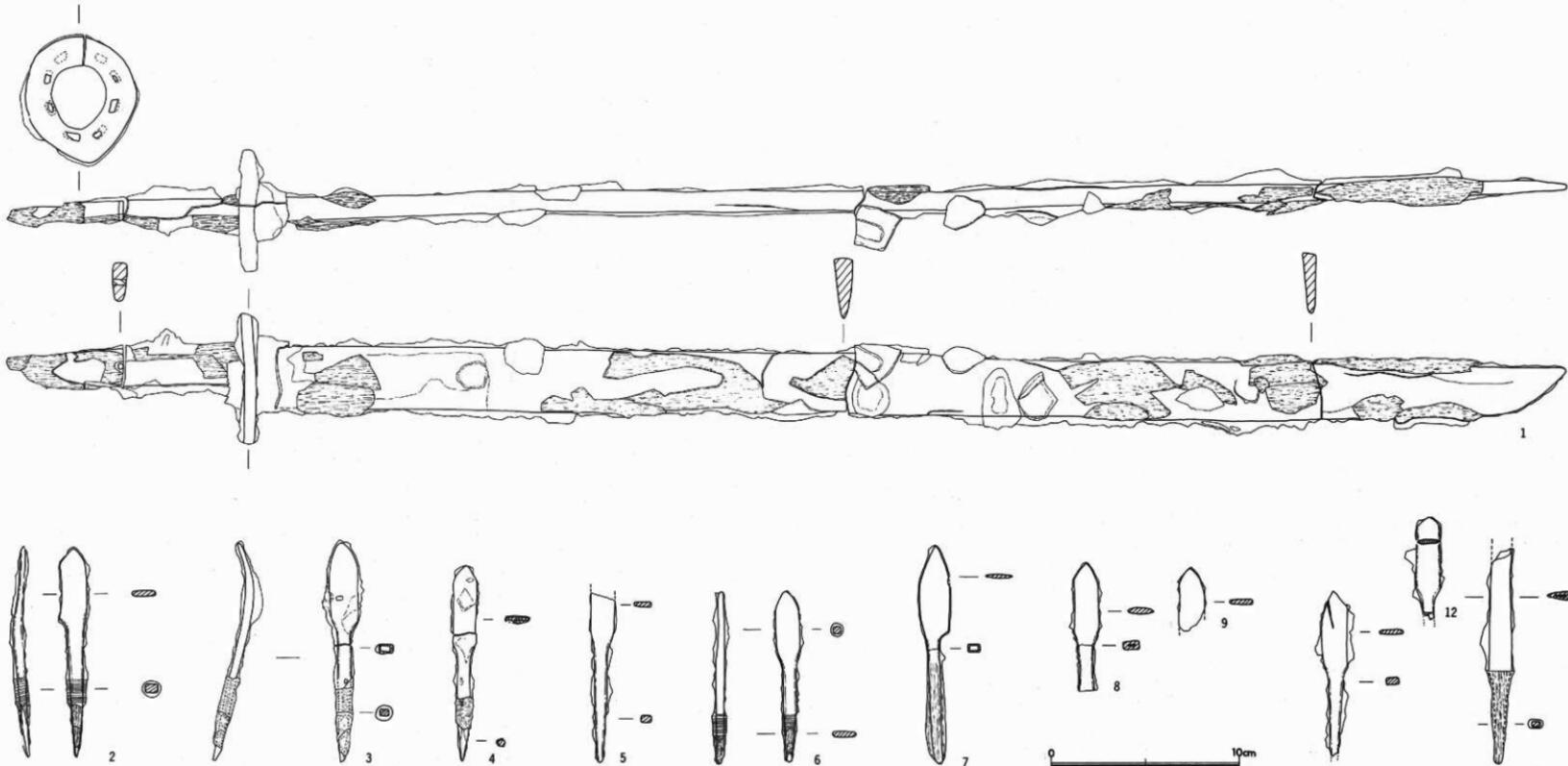
第69图 II区 1号横穴石棺北侧遗物实测图③ (1 : 3)

のである。70-1・2は土師器の高坏で、2の口縁部がわずかに外反するほかは、器形、法量ともほぼ同じものである。3～5は高坏である。3は、平坦な坏底部から口縁が斜めに直線的に立ち上がる。坏部外面に沈線、櫛描きの刺突文を施し、脚部には沈線と3方向2段透しをもつ。上段の透孔は3角形、下段は台形である。4は口縁端部が細くひきだされる形態をとり、坏部中段にはしつかりした稜をもち、脚端部には段をもつ。透孔は切込み状のもので、3方向2段である。調整は坏部下半が回転ヘラケズリ、脚は大部分にカキメ調整を施す。5は坏の口径に比べて脚が非常に長いものである。脚部には、3方向2段透しをもち、上段が3角形、下段が台形である。脚端部は丸くおさめる。6は罐で、口縁部に段をもち底部は平底で頭部に櫛描き波状文、体部には刺突文、沈線を施す。

71図は横穴墓から出土した武器類で、1・2・6が石棺内、3～5が石棺北側の土器群の下、7～9・11が石榴石材の隙間、10・12が玄室埋土中から出土した。1は鉄製の大刀で全長82.7cm、鍔



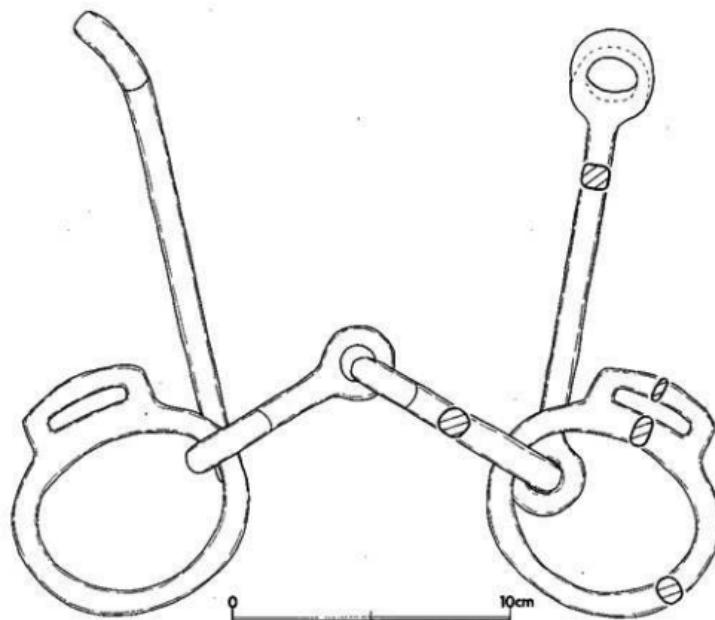
第70図 II区 1号横穴石棺北側遺物実測図④ (1 : 3)



第71図 II区 1号横穴出土大刀・鐵・刀子実測図 (1 : 2)

から先端までは70.2cmで、鋲が著しく、3カ所で折れるなど遺存状況は悪い。刀身、茎には、鞘、^{さや}柄と考えられる木質が全面に付着している。刀身は長さ69.3cm、断面は2等辺3角形を呈し、^{ハサミ}鞘はもたずふくらみもない。切先近くでは刀身の幅2.5cm、厚さ0.7cm、中央部で幅3.3cm、厚さ0.9cm、^{ハサミ}関近くで幅3.2cm、厚さ1.3cmである。刃は切先へ緩やかに移行し、切先は緩やかな弧をえがく。関は片関ではないかと考えられるが、鋲と破損のためはっきりしない。^{ハサミ}鞘も残っており、鍔と接しているがやはり鋲のため詳細は不明である。鍔は長径6.7cm、短径6.0cmの倒卵形で、台形の透孔8個をもつ。厚さは周縁部でふくらみ、0.8cmをはかることから覆輪をもつものであろう。茎は、正確な長さは関の位置が判らないため不明であるが、中央部で幅2.0cm、厚さは棟側が0.8cm、刃側が0.5cmである。目釘は1カ所が確認できる。2~10、12は鍔で、木質の残存しているもの(7)、木質と共に繊維質の痕跡が確認できるもの(2、3、4、6)がある。11は刀子で、刃部のかなりの部分を欠失している。両関で、関の部分から木質が付着している。

72図は素環鏡板付轡で、鏡板と引手を街の外側の環にからませる。鏡板は太さ1.0×0.8cmの鉄棒でつくった8.4×7.3cmの環体に4.6×1.5cmの長方形立聞をつけたものである。立聞には3.0×0.6cm



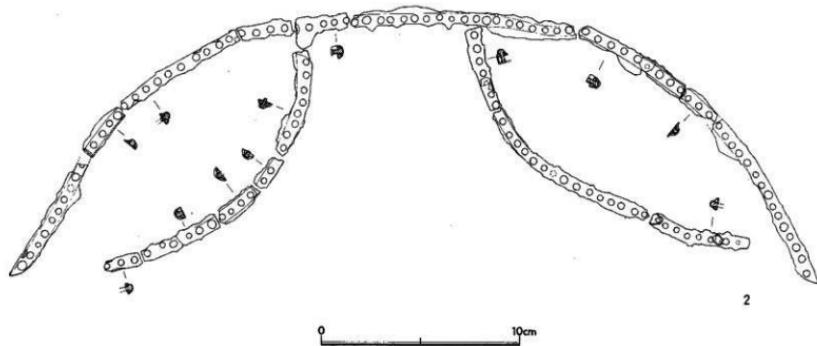
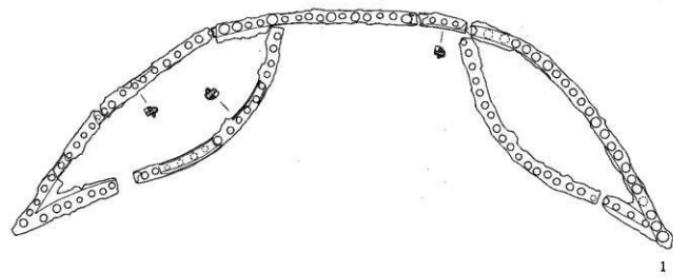
第72図 II区 1号横穴出土轡実測図 (1 : 2)

の方孔があく。方孔は環体に接して設けられるようである。引手は全長17.5cm、太さ1.0×0.8cmの開丸方形断面で、先端がわずかに折れ曲がり径3.3cmの引手壺をそなえる。銜は2連式で共に長さ8.5cmをはかり、一方の銜は、環の方向が90度ねじれている。

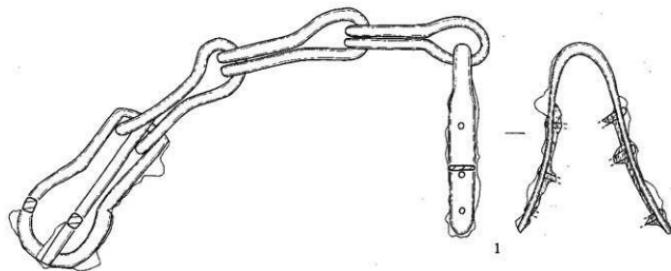
73図は鍍金具である。破片を推定復元したもので、1が前輪、2が後輪と考えられ、裏側には木質がかなり付着している。全体に錆がつくが、地金の見える部分では金箔が確認でき、鍍金していることがわかる。1は高さ約11cm、最大幅約33cm、2が高さ約13cm、最大幅約41cmと推定される。縁の金具は幅約7mm、厚さ約2mmで、断面は台形になる。鉢は頭部の径3mm、長さ約7mmであるが爪先部分の爪は鉢頭径6mmに達する大形のものを使用する。

74図は木製壺蓋を復元、展開したもので、鉢具、鉢軸、鉢金具まで一体となったものが2点出土した。1は6×8mmの鉄棒を曲げて輪金を長さ9.0cm、最大幅4.3cmにつくり、その基部に長さ約9cm、太さ6×7mmの鉄棒の端をまきつけて刺鉄としている。兵庫鎖は第1鎖が刺鉄を挟むように鉢具と連結し、第3鎖が直接鉢金具を吊す。長さは第1鎖7.8cm、第2鎖8.1cm、第3鎖7.3cmである。鉢金具は断面方形と考えられる吊手部と細長い舌状の脚部からなる。吊手部は逆U字形で、脚部は緩やかに開き、内側に木製壺蓋を挟み左右3本ずつの鉄釘で固定するが、釘の位置は左右で非対称である。脚部の内面には木質が付着する。2は鉢金具や鉢具などの一部を欠くもので、鉢具の基部の一方が突出する点が1と異なるが、他はほとんど同じつくりである。各部の計測値は、鉢具の長さ8.5cm、最大幅4.5cm、第1鎖8.7cm、第2鎖8.1cm、第3鎖8.4cmで、大きさは若干1と異なる。3～6は壺蓋の吊手～脚部の破片で、2の一部になるものであろう。

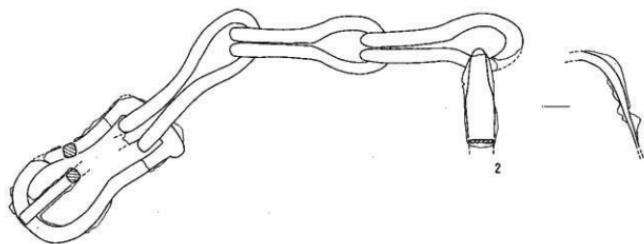
75-1・2は鉢金具である。凸字形の輪金、足、円形座金具からなり、輪金と足はいずれも方形断面の鉄棒を用いる。足には座金具から先端にかけて木質が付着することから、座金具を介して鞍橋にうちこみ、裏側に出た先端約3cmをJ字形に折り曲げて鞍橋に固定したと思われる。付着する木質から、鞍橋の厚さは約5cmと推定される。輪金の長さ6.1cm、環部の幅4.9cm、座金具は直径2.0cm高さ4mmである。2は足の一方の端を欠いているが1と同様のつくりで、1と一組をなしていたものであろう。各部の計測値もほぼ1に等しいが、輪金が環部先端でやや細くなる点、足を輪金に連結する際に1と反対方向から巻き、端部を座金具に通している点で異なる。1・2の座金具のみ鍍金が施される。3・4は飾金具と考えられ、3が長さ4.5cm、幅3.2cm、4が長さ4.8cm、幅3.1cmで中央に横円形の突起をもち、4隅に鉢を打つがそのうち3は2個、4は1個が欠落する。6・8は鉢具である。6は径6mmの鉄棒を曲げて輪金をつくり、刺鉄はもたない。輪金の長さ6.7cm、最大幅3.9cm、基部は一部を欠くが幅3.8cmと推定される。8は径5mmの鉄棒を用いるもので、長さ5.5cm、最大幅3.4cm、基部幅2.7cmである。輪金基部には刺鉄の基部が遺存し、外面には別の金属片も付着する。7は帶金具と考えられ、長さ2.4cm、幅2.6cm、厚さ4mmで2本の鉢を打つが、鉢の頭部、先



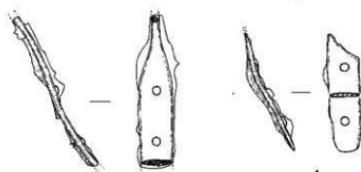
第73圖 II區 1號橫穴出土鞍金具實測圖 (1 : 2)



1



2

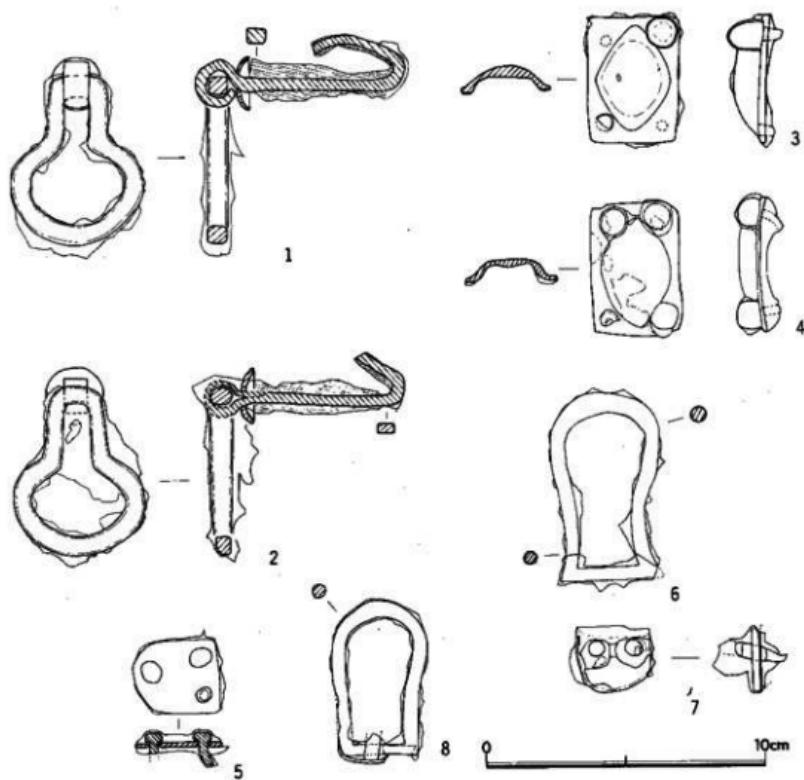


3

4



第74図 II区 1号横穴出土馬具実測図① (1 : 2)

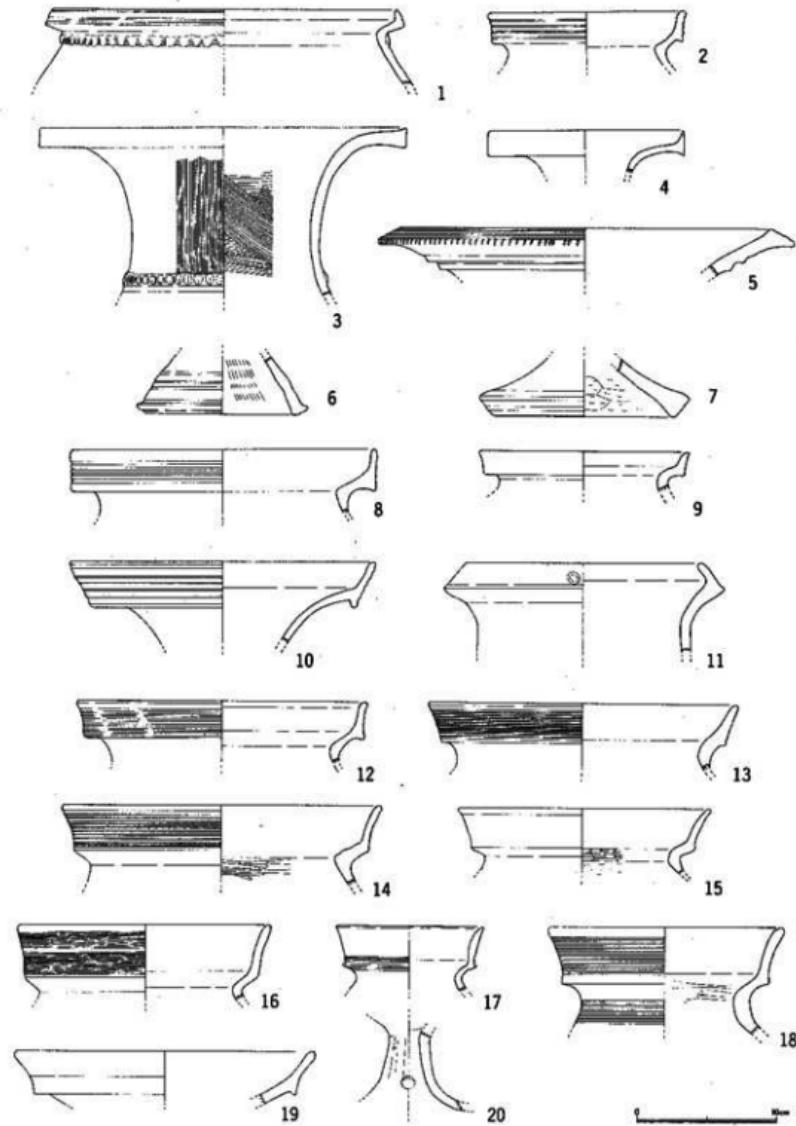


第75図 II区 1号横穴出土馬具実測図② (1:2)

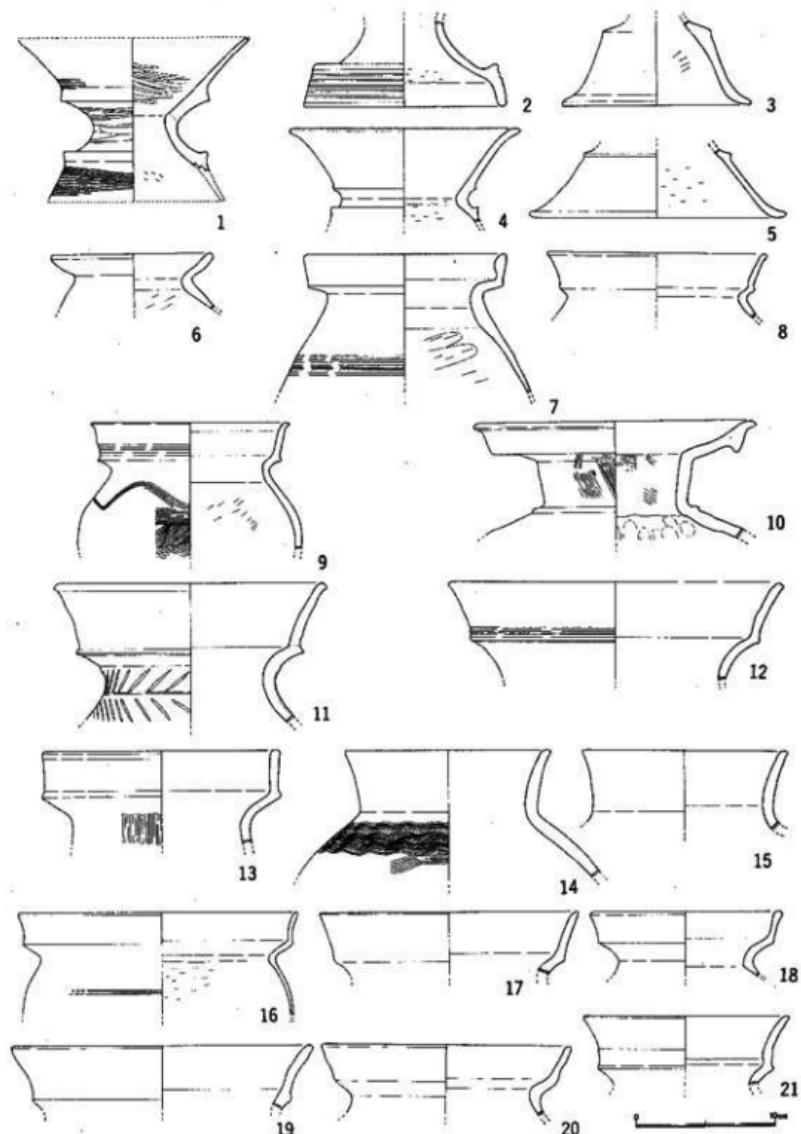
先端部とともに欠損し、長さは不明である。3～5・7には緑青がみられ、金箔が確認できる部分もあることから、鍍金されたものであろう。

II区包含層出土遺物 (第76～80図)

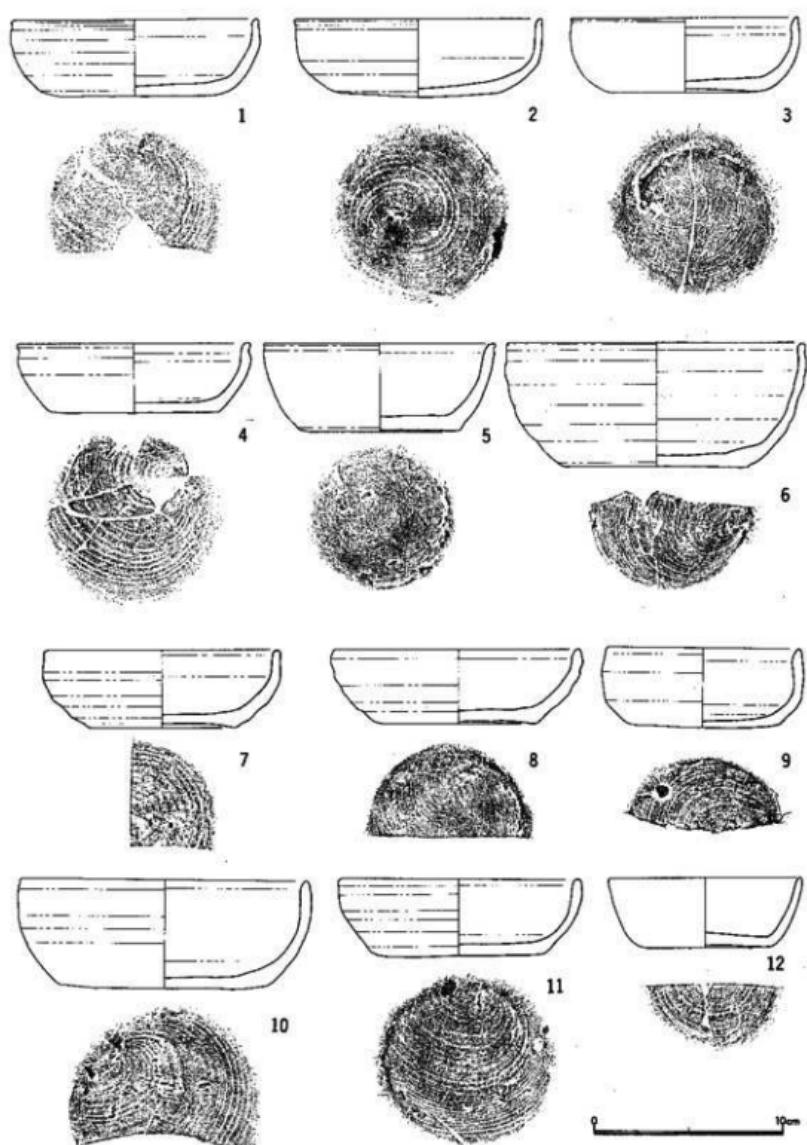
76図、77図が弥生土器・土師器で、78・79図が須恵器、80図が石器である。76-1・3～7は弥生時代中期中葉～後葉に位置づけられるもので、壺は口縁端部が拡張し、頭部に指頭圧痕突帯をもつものがあり（1）、壺も口縁端部が肥厚・拡張する（3～5）。脚は端部が肥厚し、沈線、凹線を施す（6・7）。76-2・8～10、77-2は、端部に凹線を施すが、無文のもの（9）も存在する。出雲・隱岐弥生土器編年のV-1様式に位置づけられる。高環や器台の脚端部も、口縁と同じ形態をとる（77-2）。76-12、13がV-2様式に属し、口縁端部の幅が広くなり、沈線が多条化する。



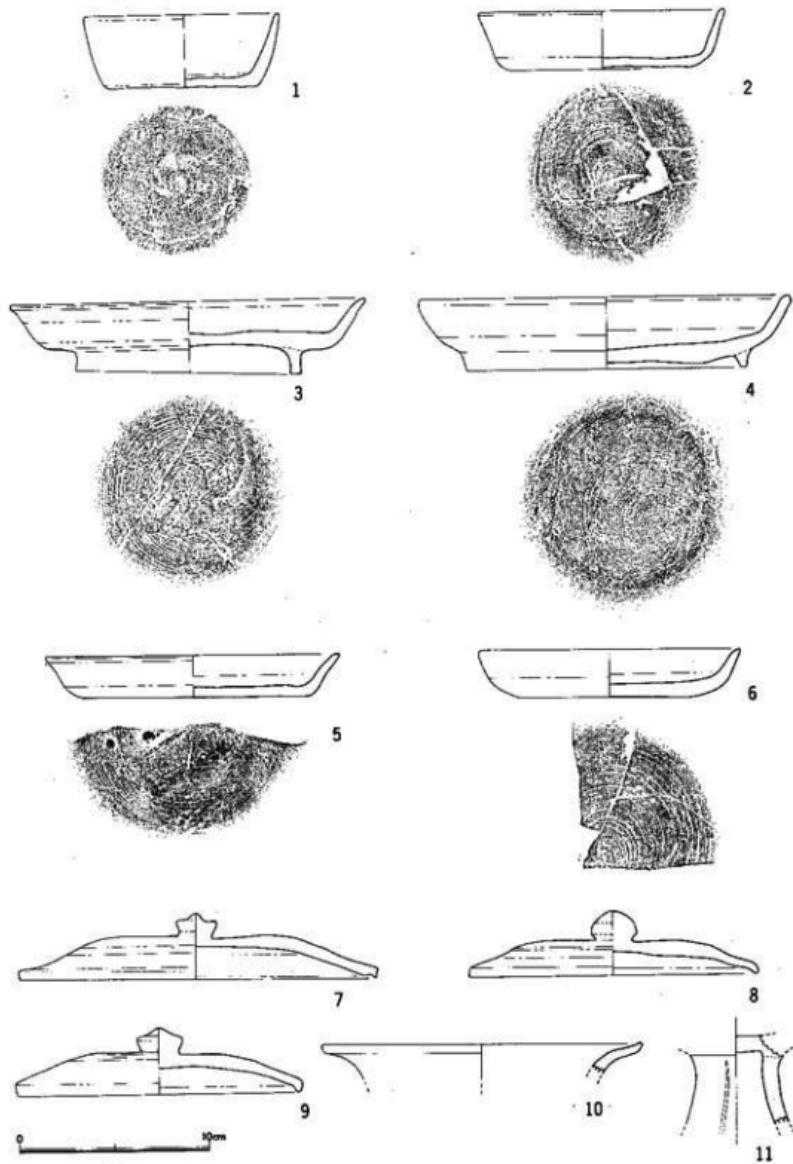
第76図 II区 包含層中出土遺物実測図① (1 : 4)



第77図 II区 包含層中出土遺物実測図② (1 : 4)



第78図 II区 包含層中出土遺物実測図③ (1 : 3)

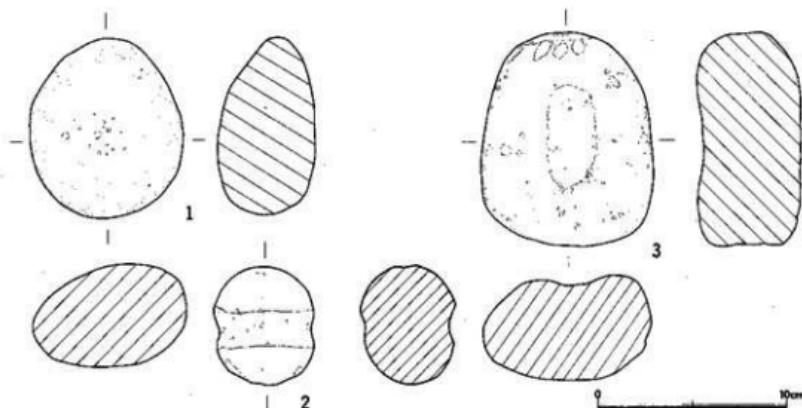


第79図 II区 包含層中出土遺物実測図④ (1 : 3)

76-14~16、18~20、77-1がV-3様式と考えられる。どの器種も口縁端部は一層拡張し、沈線もさらに多条化するが、無文のものも存在する(15・19)。壺は頸部内面をヘラミガキ調整するもの(14・15)が存在する。このほか、脚に円形の透孔をもつものがある(20)。76-17、77-3~5はV-4様式で、口縁端部の一部に沈線が残るものもあるが(17)、各器種とも文様をもたない。

土師器は、複合口縁とその退化した形態が多いが、この他に、畿内系と考えられる壺(10)、壺(6)⁽⁵⁾が出土している。畿内系の土器は、鹿島町南講武草田遺跡で大量に出土しているほか、松江市中竹⁽⁶⁾矢遺跡などにも例がある。10はここでは一応土師器として扱う。また単純口縁の壺と考えられるもの(14、15)があり、これも時期の判断が難しく、土師器に含めておく。6~11・14・15が古墳時代前期、12・13・16~18・21が中期前葉、19・20が中期中葉に相当しよう。

78-1~79-2は壺で、いずれも底部を回転糸切りしている。口縁端部が直立するもの(6、7など)と、わずかに外反するもの(1、4など)がある。また底部から口縁部へ直線的にのびるもの(78-12、79-1・2)もある。79-3・4は大形の高台付壺で、底部は共に回転糸切りだが、3の口縁が比較的鋭く、高台が底部につくのに対し、4は口縁端部を丸くしあげ、高台も底部と体部の境界付近につく。5・6は皿で、底部はいずれも回転糸切りする。7~9は蓋で、宝珠状つまみをもち、かえりを有しない。調整は9の天井部に部分的に回転ヘラケズリを用いる以外は回転ナデで仕上げる。10は壺の口縁、11は高壺脚部で、3方向に貫通する切込み状の透孔をいれる。これらの須恵器の時期には幅があるが、いずれも山陰須恵器編年IV期以降のもので、下限は出雲国庁編年の第4形式と考えられる。



第80図 II区 包含層中出土遺物実測図⑤ (1 : 3)

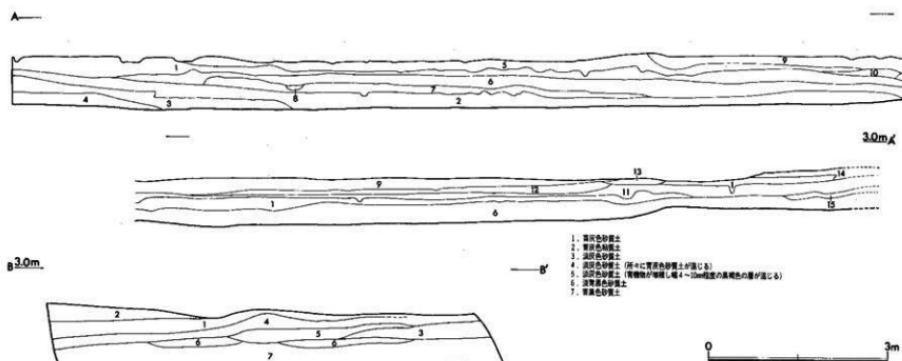
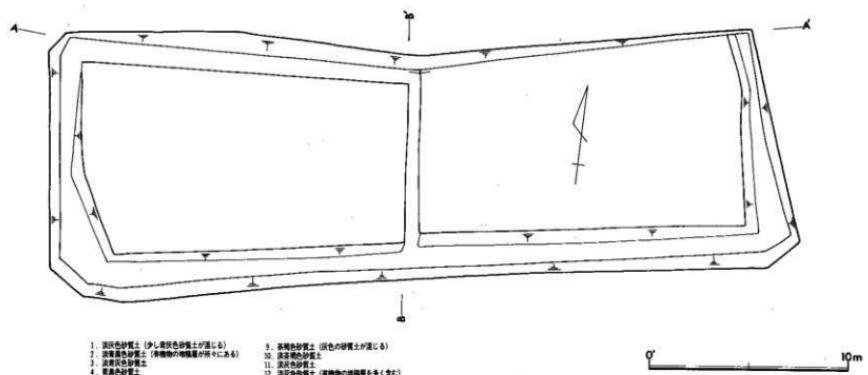
80-1は敲石と考えられる。2は石錘で、中央部に凹面がめぐる。3は台石と考えられ、中央にくぼみをもつ。1は安山岩、3は石英ハン岩である。

III区（第81図）

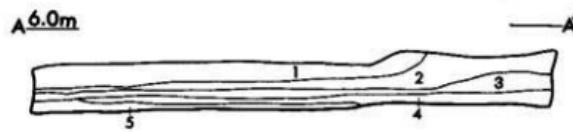
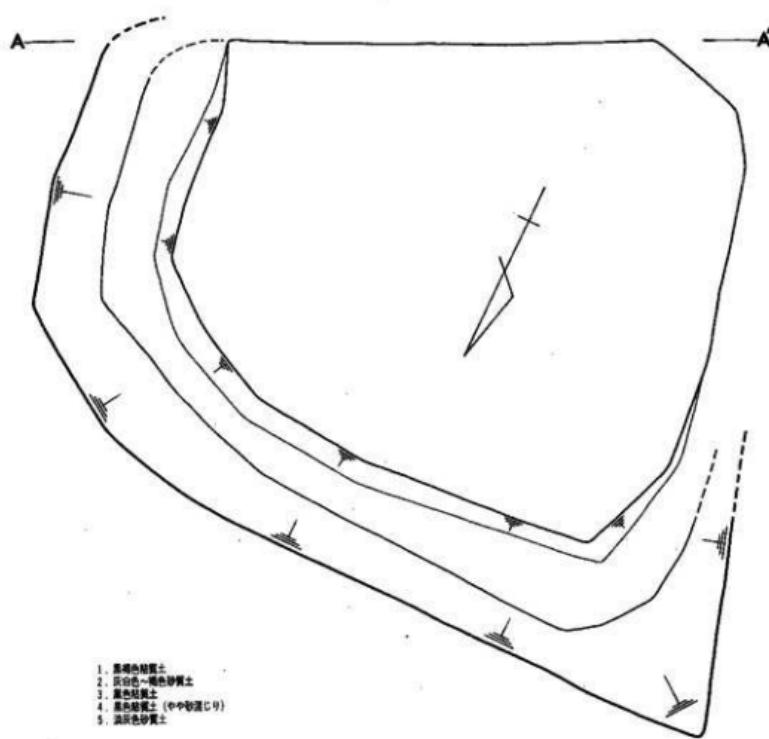
III区はII区とIV区の間に存在する谷部である。A区、B区とも上層の堆積は、遺物包含層があり、その下に厚い砂層が存在するという状況で、遺構は検出できなかった。調査区北端にあたるB区が、砂層検出面の標高が約6m、南端に位置するA区では標高約2mでかなりの標高差がある。

III区包含層出土遺物（第83図）

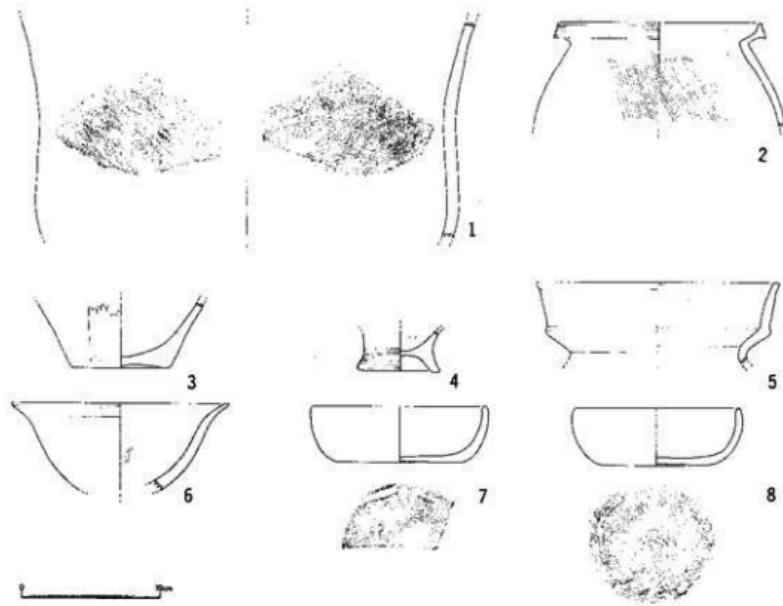
1はA区の砂層中から出土した縄文後晩期の深鉢である。2～4は弥生時代土器で中期～後期のものである。5・6は土師器で、古墳時代前期のものであろう。7・8は須恵器の壊で、出雲国庁編年の中3形式に相当する。砂層中から出土した1を除く他の遺物は、II区あるいはIV区から流れ込んだ可能性が高い。



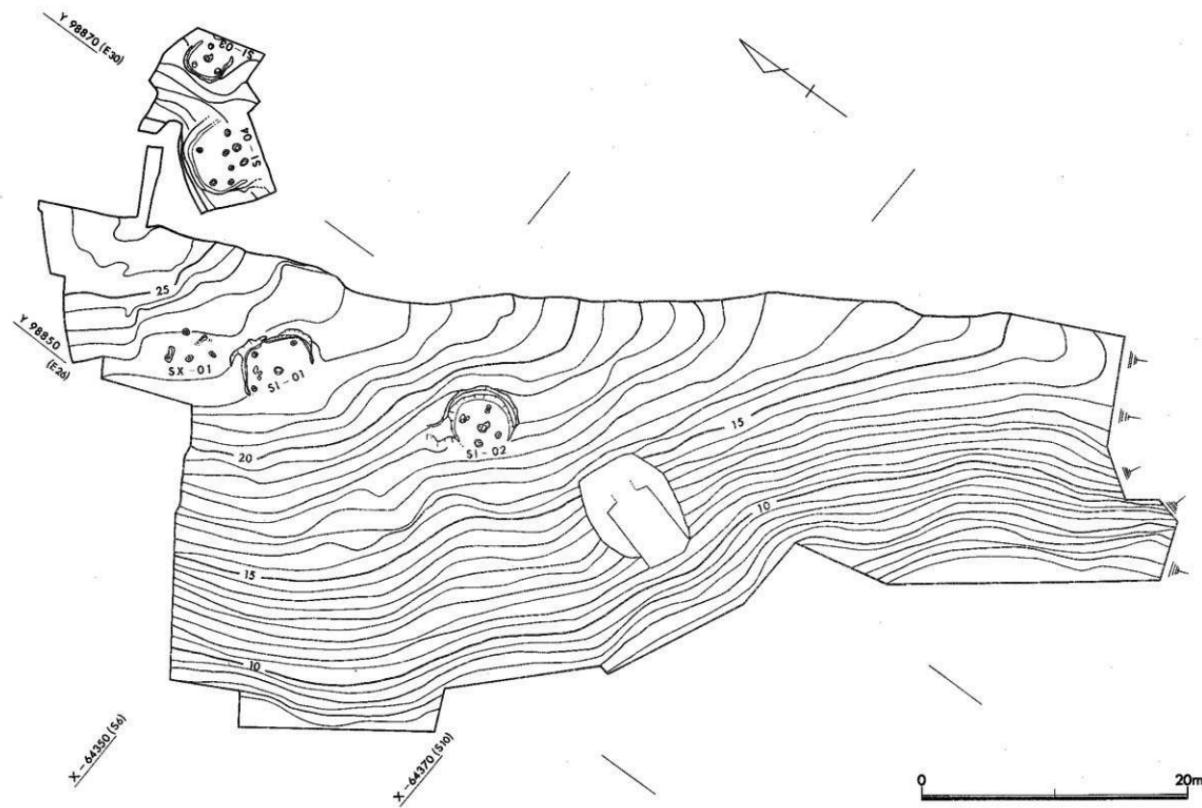
第81図 III区 A区調査後測量図



第82図 III区 B区調査後測量図 (1 : 150)



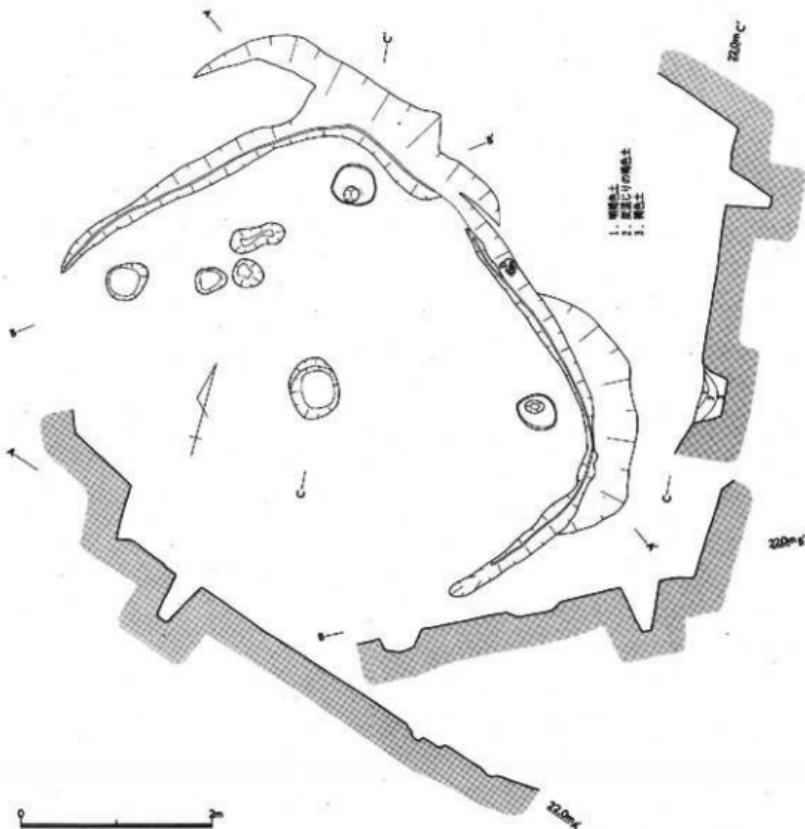
第83図 III区 包含層中出土遺物実測図 (1 : 4)



第84図 IV区 遺構位置図 (1 : 300)

IV区

IV区は、北西から南東へのびる丘陵上で、宮内遺跡の最も東側に位置する。標高は最高点で27mをはかる。この丘陵も後世の加工により丘陵先端がカットされている。尾根筋では土の堆積はほとんどなく、地山が露出しており、斜面には地山の風化土が堆積している。遺構は、丘陵北側の尾根上～西側斜面中腹から検出されている。



第85図 IV区 SI-01実測図 (1 : 60)

S I - 01 (第85図)

IV区の尾根からわずかに西側斜面よりに位置し、平面形は隅丸方形プランである。住居の規模は周壁で5.3×3.5m、床面の標高は22mをはかる。北西～東側にかけて、斜面を垂直にカットして高さ50～80cmの壁をつくりだし、壁の内側には溝をめぐらすが、北東の一部で途切れている。溝は断面コの字形で、幅10～20cm、深さ2～6cmをはかる。床面で確認したビットは合計7基あり、主柱穴は本来4基あったものと考えられるが、南側隅では柱穴にあたるビットを検出できなかった。柱穴間の距離は西側柱穴～北側柱穴が2.6m、北側柱穴～東側柱穴が3.0mである。柱穴は、上縁径は40cm前後でほぼ等しいものの、深さは北側のものが50cm、西側のものが30cm、東側のものが10cm以下でかなりばらつきがある。中央ビットは径60cm、深さ30cmで、埋土中には炭を含む。

S I - 01出土遺物 (第86図)

住居北東の周壁沿いから、弥生土器が出土している。複合口縁の甕で、端部に11条の平行沈線を施し、調整は内外面ともヨコナデである。出雲・隱岐弥生土器編年のV-3様式と考えられる。

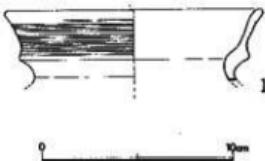
S I - 02 (第87図)

丘陵の西側斜面中腹に存在し、ややいびつであるが径5mをはかる円形住居と考えられる。標高は床面で17.8mである。住居北側から南西にかけて、幅20～50cmの狭い平坦面が存在している。住居の周壁は高さが最大70cmで、その内側に壁溝がめぐる。溝は幅5～15cm、深さは6cmで、断面コの字形を呈す、しっかりしたものである。検出されたビットは6基で、主柱穴は4基と考えられる。柱穴の規模は、上縁径40～50cm、深さ40～60cmである。住居北東側にはビットが2つあり、他のビットも2つの下端をもつことから、建て替えを行ったと考えられる。柱穴間の距離は、1.8m～2.3mをはかる。中央ビットは、建て替えにともない、いくつかのビットが切りあっているようだが、上縁で100×50cm、深さ40cmをはかる。

S I - 02出土遺物 (第88図)

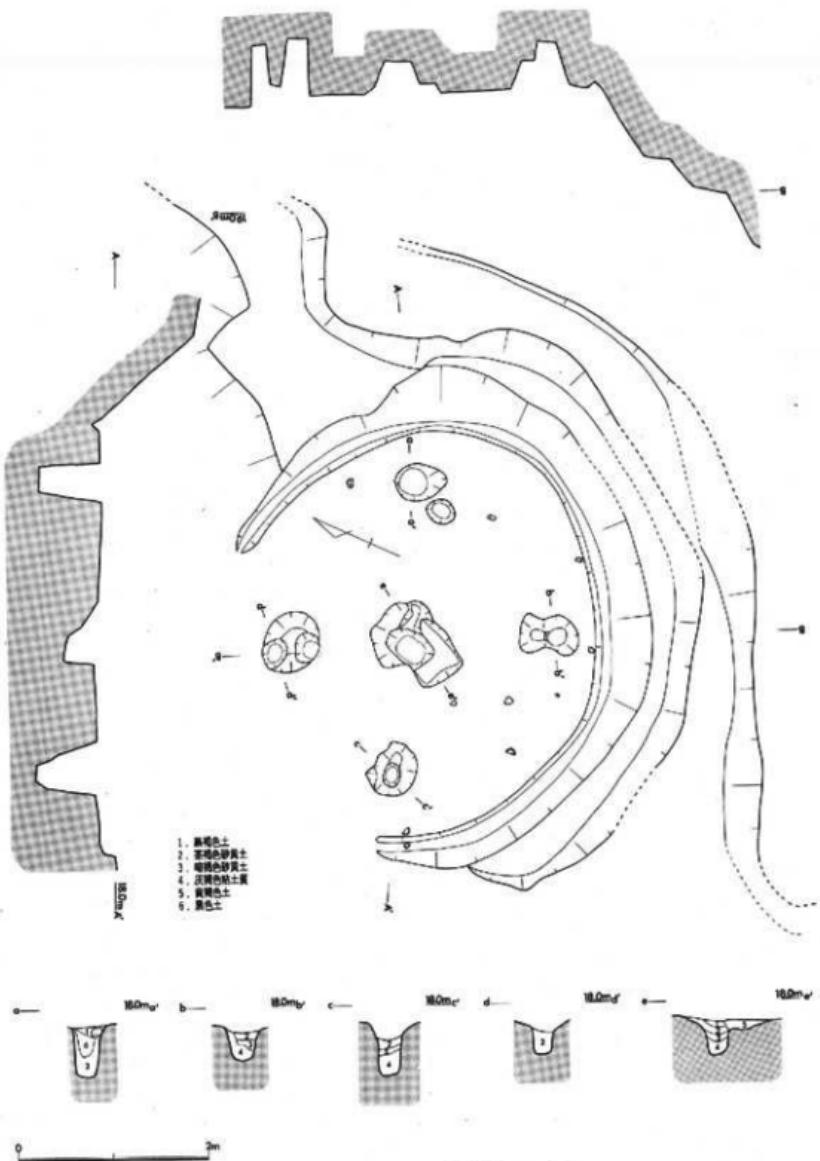
S I - 02床面で検出した土器は、壺ないしは壺の胸部と考えられる破片1点で、風化が著しく、固化できなかった。このほかに出土した遺物は石器、砥石類である。

1は筋砥石で片面に2カ所、反対側の面に1カ所の研磨痕が認められる。石材は流紋岩である。2は形態から石斧と考えられるが、風化が進み使用痕など不明である。石材は流紋岩を使用している。3も砥石である。平面図で示している面と、その右側面の2面を使用している。石材は石英ハニ岩である。これらの時期は、土器の時期が不明なため詳細はつかめないが、住居の形態などから、

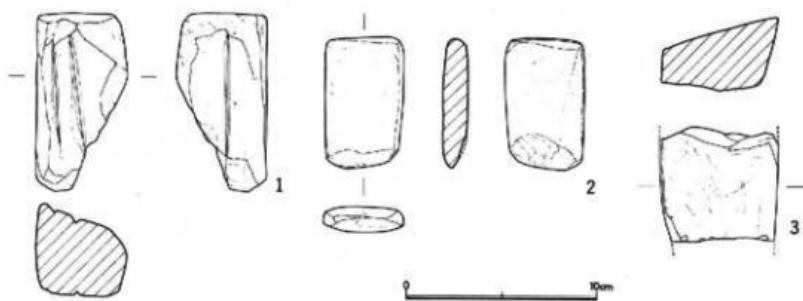


第86図 IV区

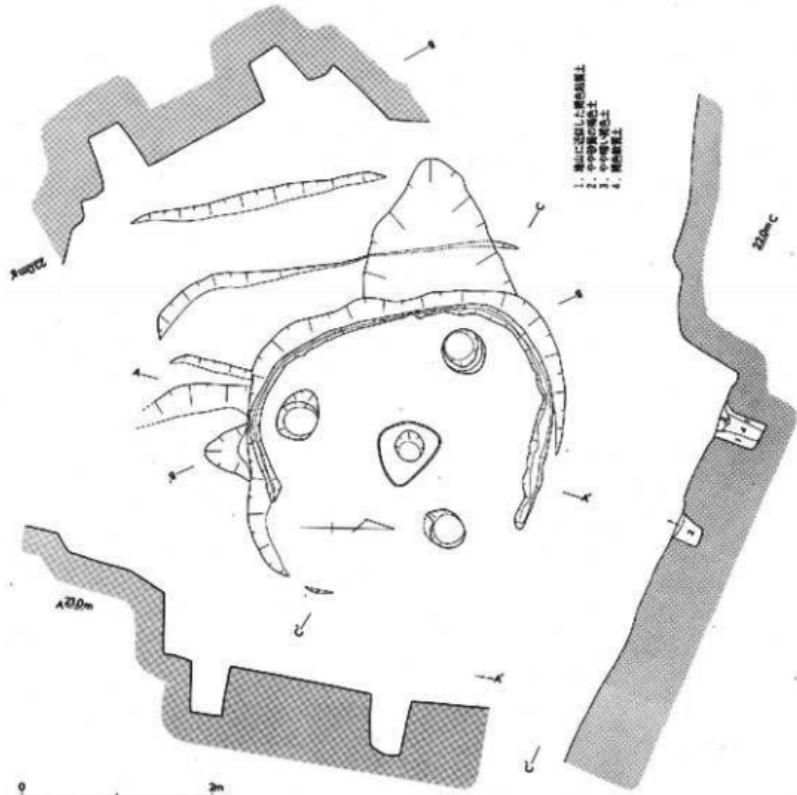
S I - 01出土遺物実測図 (1 : 3)



第87図 IV区 S I - 02実測図 (1 : 60)



第88図 IV区 S I - 02出土遺物実測図 (1 : 3)



第89図 IV区 S I - 03実測図 (1 : 60)

弥生時代中期～後期と推定される。

S I -03 (第89図)

丘陵の最高点からやや東側に下った斜面上に立地し、床面の標高は21.7mである。平面形は柱穴の位置などから考えて、一辺3m前後の隅丸3角形と推定される。この住居跡も西側に幅40～70cmの平坦面を2段有する。周壁は最大高70cmで、壁の内側には壁溝をもつ。溝は上縁で幅5～20cm、深さ2～4cmで、断面コの字状を呈する。住居跡床面から検出されたビットは合計4基で、主柱穴3穴である。主柱穴間の距離はいずれも2mで、中央ビットを中心にはば等間隔に配されている。柱穴は径40～50cmで、深さ50cmである。中央ビットは径40cm、深さ50cmで、柱穴とほほ同じ大きさである。

S I -03出土遺物 (第90図)

いずれも埋土中からあるが、土器の小片が3点出土している。1・2は壺の頸部付近の破片で、口縁は複合口縁となり、端部が拡張して外面に多条の平行沈線を施す。内面頸部以下はヘラケズリ調整する。3は鼓形器台の上台部と考えられ、1・2と同様に端部外面には多条の浅い平行沈線を施している。調整は外面はヨコナデ、内面はナデである。遺物の時期は、出雲・隱岐弥生土器編年のV-3様式と考えられる。

S I -04 (第91図)

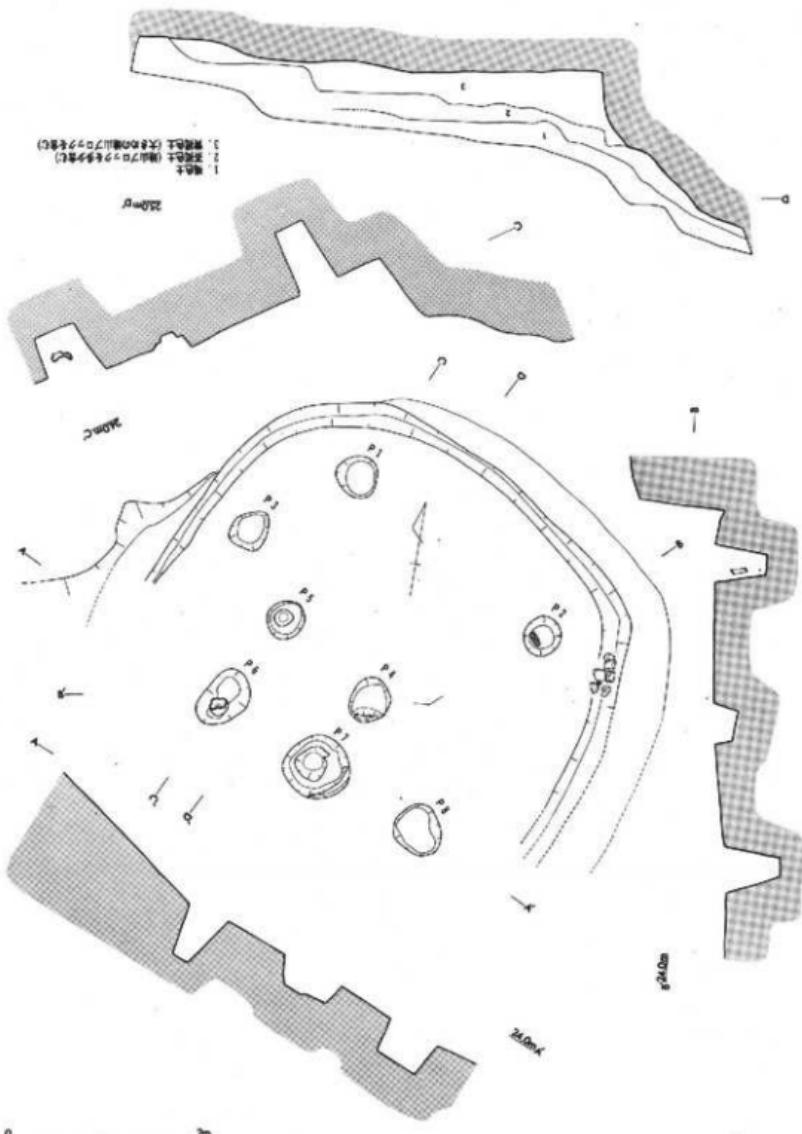
S I -03の西側に位置し、床面の標高は23.7mである。南西側の壁と、南側の床面端が明確でないが、一辺約5mの隅丸方形住居跡と考えられる。住居跡の北側から南西側にかけて、幅30cm前後の平坦面が存在する。壁の高さは最大80cmで、内側には断面V字状の壁溝がめぐる。壁溝の幅は上縁で、10～20cm、深さ4cmである。床面から検出したビットは8基で、そのうち主柱穴と考えられるものは4基(P1、P2、P6、P8)で、柱穴の規模は、上縁径で40cm～50cm、深さ30～60cmである。柱穴間の距離は2.5m～2.8mをはかる。中央ビットはP4と考えられ、規模は長径50cm、短径40cm、深さ20cmである。P3、5、7の性格は不明である。遺物は、P2内から弥生土器の壺の口縁部、P6内から直口壺の上半部の破片が出土している。

S I -04出土遺物 (第92図)

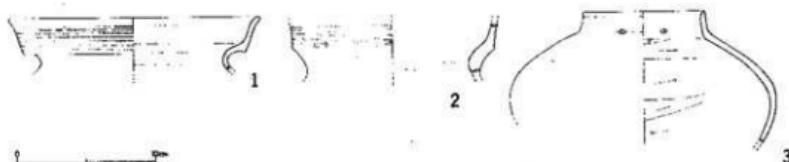
1は壺の口縁で、複合口縁の端部に7条の平行沈線を施す。2も同様の形態であるが、1よりも



第90図 N区 S I -03出土遺物実測図 (1:4)(1~3 埋土中出土)



第91図 IV区 SI-04実測図 (1 : 60)



第92図 IV区 S I - 04出土遺物実測図 (1 : 4)
(1はP 2、3はP 6、2は埋土中出土)

沈線が細く、多条化するものである。1は内外面ともヨコナデ、2は口縁部内外面をヨコナデ、頭部以下はヘラケズリで調整する。3は直口壺である。口縁が短くやや内傾し、胴が大きく張る。文様はもたず、頭部付近の対向する2方向に円孔を有し、蓋をもつものと考えられる。調整は、外面は風化のため不明であるが、口縁部内面はナデ、頭部以下はヘラケズリを施す。この土器の色調は褐色を呈し、いわゆる吉備系の土器の胎土に近い印象を受ける。遺物の時期は、出雲・隱岐弥生土器編年の中V-3様式に相当する。

1号横穴墓（第93・94図）

IV区中央部の西側斜面中腹に位置する。標高は前庭部床面で11m、玄室床面で11.4mである。開口方向は西南西である。

〈前庭部・羨道・閉塞施設〉

前庭部は、現状で長さ約5.4m、床面幅3.2mをはかる長方形の平面形を呈すかなり大きなものであるが、先端部が流出しており、本来はさらに長いものだったと考えられる。床面は平坦で、ほとんど傾斜をもたない。羨道部は天井が一部崩れており、床面で長さ1.8m、幅は前庭部側で1.2m、玄門部側で1.6m、高さは1.8mである。閉塞には、2枚の切石を用いており、その前方に拳大～人頭大の礫を積み重ねている。切石の大きさは、向かって左側のものが上端幅40cm、下端幅50cm、高さ110cm、右側のものが上端幅35cm、下端幅40cm、高さ105cmで、厚さは共に20～30cmである。閉塞石に使用している石材はいわゆる「荒島石」と考えられる。玄門部には、閉塞石を受ける削り込みなどではなく、石材を玄門部にたてかけるようにして閉塞している。前庭部の土層観察では、10～13層のように辺縁後の埋め戻しと考えられる切り合いが見られる。閉塞石の上方が崩れて土砂が流入しているが、閉塞が完全に行われていることから盜掘は行われていないと思われる。遺物は前庭部の床面及び壁沿いから、須恵器の蓋坏、高坏などの完形品が出土している。

〈玄門・玄室〉

玄門は上端幅60cm、下端幅70cm、高さ90cm、長さ120cmで天井が部分的に崩れている。羨道と玄門との境界の床面にはわずかな段がつく。玄室は、前壁側で幅2.8m、奥壁側で2.4m、奥行き2.0m、

高さは玄室中央部で1.7mをはかる、平面形は台形に近い横長の長方形を呈す平入りの疑似四注式である。前壁、両側壁、奥壁は明瞭な界線で画すが、天井と各壁面は界線で区画せず、なだらかにカーブを描いて棟線に至る。棟も他の界線と同様に、一本の線で表現される。玄室床面には、入口付近から中央にかけて幅40~90cm、深さ5~10cmの溝が見られる。これによって両方の側壁側と奥壁側の床面が若干高くなり、コの字状の屍床を形成する。この他、玄室奥壁～右側壁～右前壁にかけて浅い溝が巡るが、性格は不明である。玄室内からは、拳大～人頭大の礫、左奥壁沿いから人骨、玄室入口付近の溝埋土中から獸骨が検出された。土器類は、玄室内では全く確認できなかった。

1号横穴出土遺物（第95図）

いずれも前庭部から出土したもので、4・5・9が埋土中、そのほかは床面である。

1・2は坏蓋で、天井部と体部は稜、沈線などで区画されずなだらかにつながり、口縁端部も単に丸くおさめ、沈線などはもない。調整も回転ナデのみを施す。3・4は坏身で、たちあがりは非常に短く内傾する。調整は、坏蓋と同様回転ナデのみを施す。5は小形の坏身で、わずかに丸底を呈し、口縁端部は引き出されたように鋭く、わずかに外反する。調整は全体に回転ナデを施し、底部に回転糸切りは認められない。6は高坏である。坏部は緩やかに内湾し、端部はわずかに外傾する。口縁端部は丸くおさめ、脚端部には段を有するが、鋭さはなく丸みを帯びている。坏と脚を別々につくり、接合した痕跡が認められる。文様、透孔は全く施さない。調整は回転ナデである。7・8は平瓶である。7は、肩部に径1cmのボタン状突起を2つもち、胸部下位1/3程度を回転ヘラケズリし、そのほかは回転ナデで調整する。8は肩部に突起をもたないもので、胸部の上位～中位をカキメ調整、胸部下位は回転ヘラケズリで調整する。9は玉の原石と考えられる。石材は流紋岩である。遺物の時期は山陰須恵器編年のIV期以降で、回転糸切りをもつ坏が見られないことから、出雲国庁編年の第1形式～第2形式が下限と考えられる。

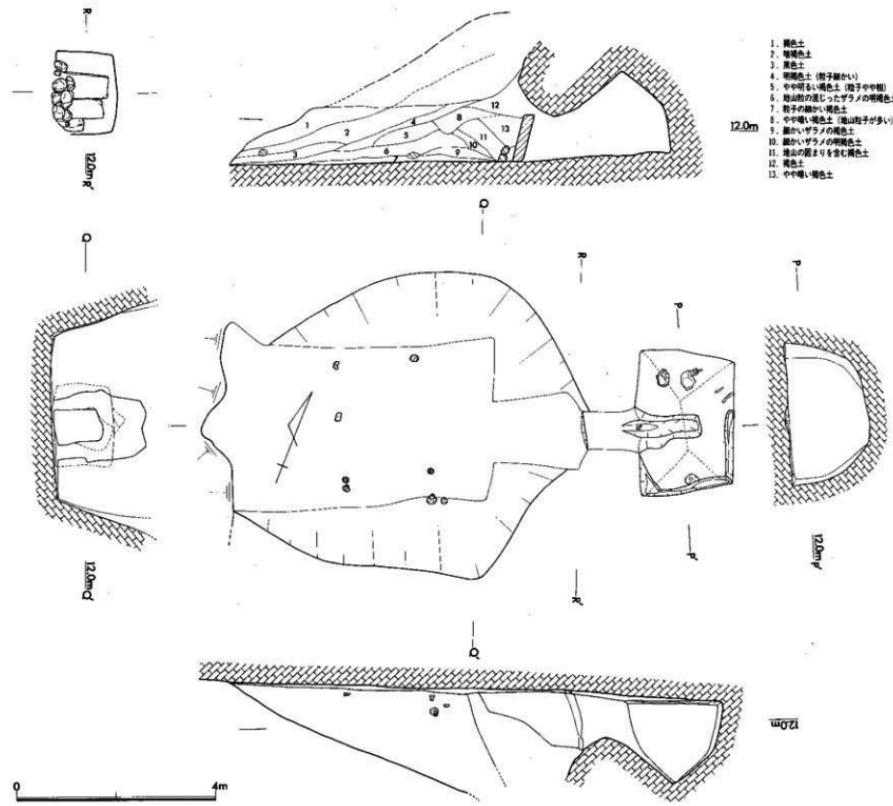
S X - 01（第96図）

S X - 01の北側に隣接し、地山を加工して平坦面をつくり、ピットと溝を掘りこんでいる。平坦面の標高は約24mをはかる。ピットは上緑径50~60cm、深さ10~20cmの浅いものである。溝付近には凝灰岩（荒島石）製の石棺蓋石の残欠が積み重なった状態で出土している。またこの石材の南東3mから、須恵器の壺、罐などの完形品5点が出土しており、S X - 01と何らかの関連をもつと考えられる。

石棺実測図（第97図）

S X - 01で検出された石棺の蓋石の中で、特徴の判るものを見図示した。

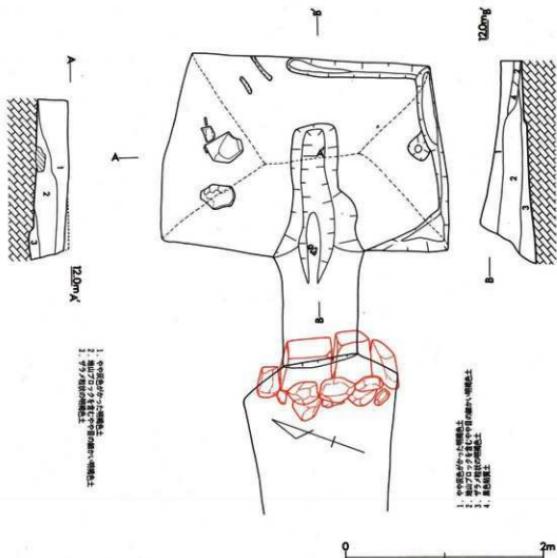
1、2とも外面は風化が著しいが、屋根形を意識して加工したものと考えられ、内面には浅いレンズ状の割り込みの一部と平坦面が確認できる。石材は荒島石を用いている。



第93図 N区 1号横穴実測図 (1 : 80)

地山直上出土遺物 (第98図)

S X -01の南東地山直上から出土した須恵器である。1は壺である。頸部が細く口縁が外反するが、胴部に比べて口縁部がかなり小さい。口縁部と頸部の境の段もなだらかで、底部は完全な平底である。底部外面には「○」状のヘラ記号をもつ。調整は、底部付近の一部を回転ヘラケズリする他は、回転ナデを施す。2は長頸壺で、口縁部を欠失している。頸部の中位に2条の浅い沈線を施す。調整は、底部付近を回転ヘラケズリし、そのほかは回転ナデを施す。肩部には「卜」状のヘラ記号をもつ。3は甕で、口縁部は直線的にのび、端部は丸くおさめる。口縁部は回転ナデ、胴部はタタキで調整し、胴部の上半には部分的にカキメ調整を行っている。肩部には斜格子文状の浅いヘ



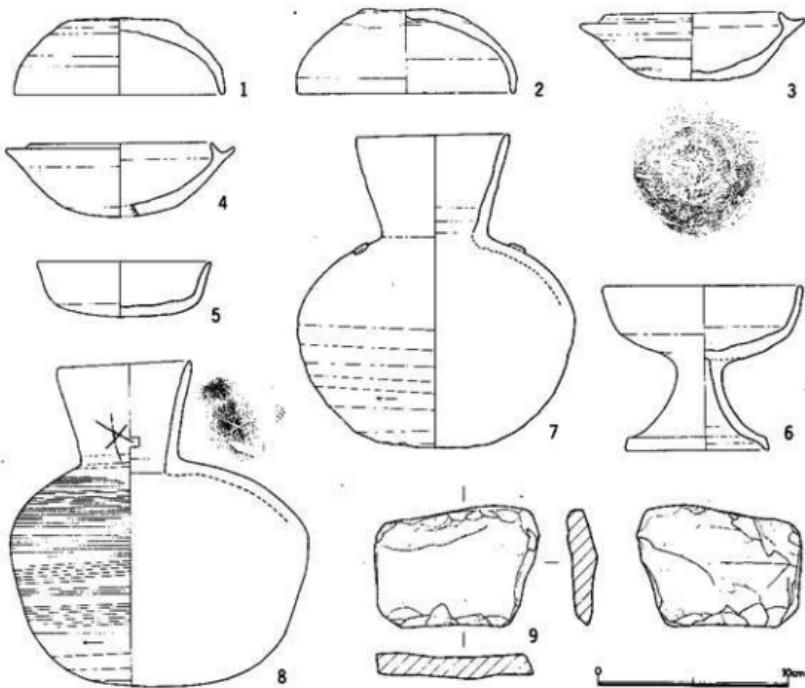
第94図 IV区 1号横穴玄室内遺物出土状況・陶器実測図 (1 : 40)

ラ記号をもつ。4は直立する頭部から口縁が緩やかに外反し、口唇部にはわずかな面をもつ。調整は口縁部が回転ナデ、胴部がタタキである。5は小形の壺に比較的高い高台をつけるもので、あまり類例の知られない形態である。壺部は比較的深く、壺底部の下位で屈曲し、直線的に口縁に至る。脚端部には緩やかな段を有する。調整は、壺底部を部分的に回転ヘラケズリするほかは回転ナデである。遺物の時期は、1号横穴と同じく山陰須恵器編年IV期以降で、出雲國庁編年第1形式～2形式のものである。

包含層中出土遺物（第99図）

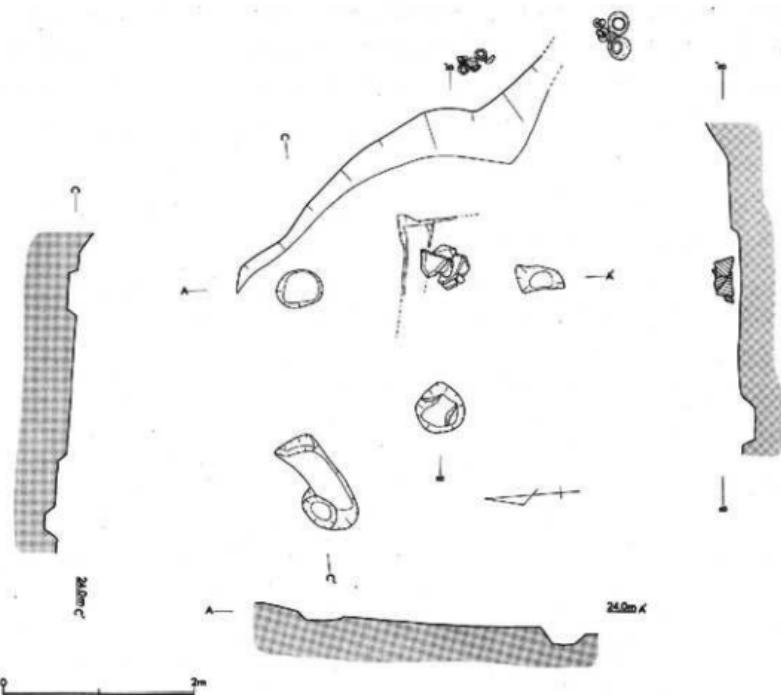
他の調査区と比較して、包含層中から出土した遺物は少なかったが、特徴的なものを図示した。

1～4は須恵器の壺蓋である。いずれも器高が低く、内面に短く内傾するかえりをもつ。天井部には宝珠状つまみがつき、1・2・4はつまみの中央がわずかにくぼむ。調整は外面上半が回転ヘラケズリ、そのほかは回転ナデである。5～8は須恵器の壺である。5は、底部がわずかに丸底と

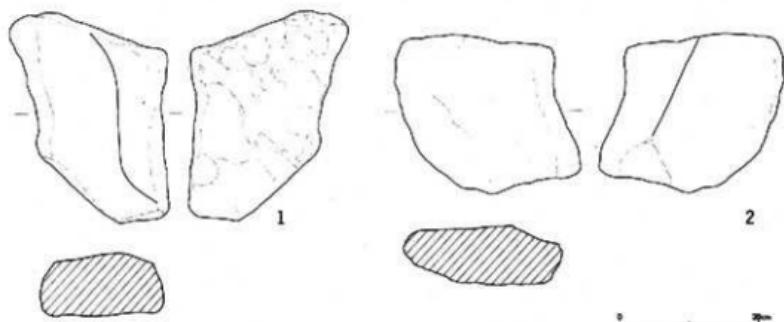


第95図 IV区 1号横穴出土遺物実測図 (1 : 3)

(1・2・3・6・7・8は前庭部床面、4・5・9は前庭部埋土中出土)

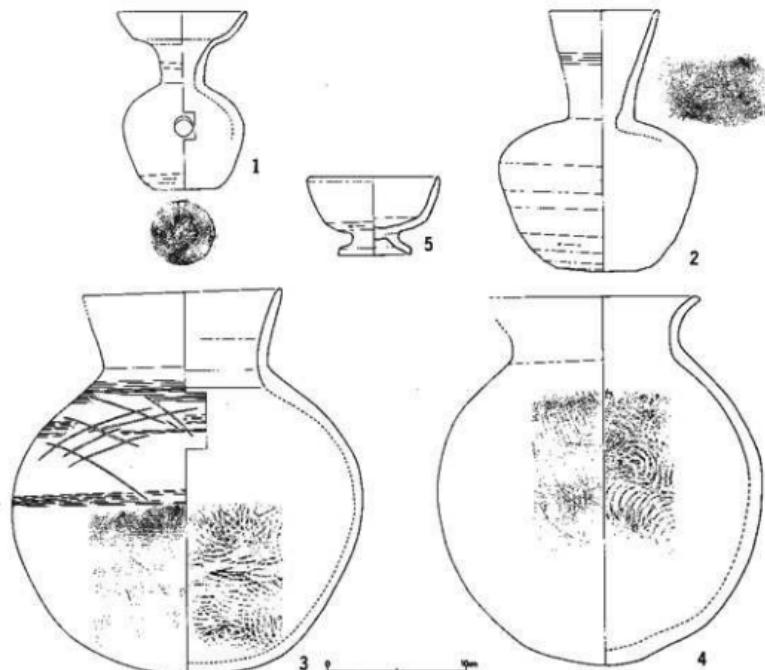


第96図 IV区 SX-01実測図 (1 : 60)

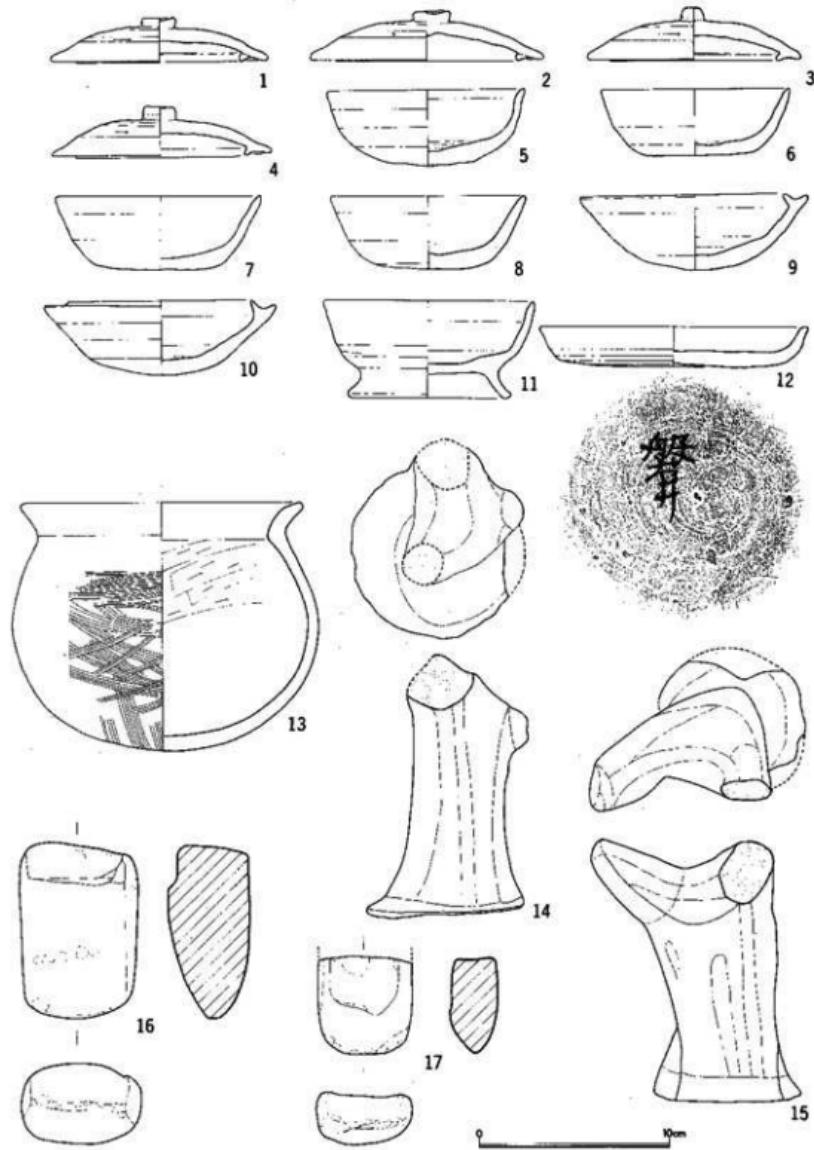


第97図 IV区 SX-01出土石棺実測図 (1 : 8)

なり、口縁端部がわずかに外反する。調整は全体に回転ナデを施し、回転糸切りは認められない。6～8は平底の壺である。いずれも回転ナデで調整し、底部に糸切りを用いないもので、法量もほぼ同じである。9・10は短く内傾する立ち上がりをもつ須恵器の壺身で、ともに回転ナデでしあげる。11は高台付壺で、98-5に形態が類似するが、高台がハ字状に緩やかに開き、端部には段をもたないものである。13は皿で、器壁が厚く、口縁部は短く立ち上がってわずかに外反する。底部外面には「磐井」と読める墨書がある。13は土師器の甌で、口縁は短く外反し、胴部は球形で、口縁よりも大きく張り出す。12が13の蓋をした状態で埋土中から出土している。14・15は上製支脚である。15は突起を3又突起、16は2又突起のものである。脚は平底で、ナデの痕跡が著しい。16・17は始刀石斧で、刃部先端がかなり摩滅している。石材は16がセンリョク岩、17は安山岩である。遺物の時期は、13が出雲国府編年第5形式、その他の須恵器については、川陰須恵器編年Ⅳ期以降で、出雲国府編年第1形式～第2形式のものと考えられる。



第98図 IV区 地山直上出土遺物実測図 (1 : 4)



第99図 IV区 包含層中出土遺物実測図 (1 : 3)

宮内遺跡土器観察表

検査番号	方法	出土地点	器種	法 量 (cm)	手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
35回-3	35	I区SI-01 床面	壺? (弥生土器)		外面:ヨコナデ 内面:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	良好	外面:褐白色 内面:淡白色	
35回-4	35	I区SI-01 床面	底部 (弥生土器)		外面:ヨコナデ 外側: 並行造内外面:ナデ 大五:ヘラケヌリ後ナデ?	微砂粒を少暈含み密	良好	灰白色	
35回-5	35	I区SI-01 埋上中	高环 (弥生土器)	口径26.0	尖端部:ヨコナデ 外側:ハ ケル音一帯:ラミガキ 内面:変化のため不明	1mm以下の砂粒を少暈含む	良好	外面:黒灰色 内面:灰白色	
37回-1	35	I区SB-01 ピット4	环 (須恵器)		底部:回転糸切り その他:回転ナデ	1mm以下の砂粒を微量含む	良好	淡灰色	
37回-2	35	I区SB-01 ピット6	环 (須恵器)		外側:回転ナデ 底面外側:回転糸切り 内面:回転ナデ、ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	外面:灰白色 内面:白灰色	外面に炭化物付着
38回-1	35	I区 SK-02	壺 (土師器)	口径25.8	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ 内面頂部以下:ヘラケズリ	2mm以下の砂粒を含む	良好	外面:淡褐色 内面:淡褐色	内外面に炭化物付着
38回-2	35	I区 SK-02	壺 (土師器)	口径25.4	外側:ヨコナデ 口縁部 内面:ヨコナデ 内面頂部以下:ヘラケズリ	2mm以下の砂粒を含む	良好	外面:淡褐色 内面:淡褐色	
38回-4	35	I区 SK-02	环 (須恵器)	底径 7.6	环器:回転ナデ 底部:回転糸切り	微砂粒を含む	良好	青灰色	
40回-1		I区SB-02 ピット5	壺 (弥生土器)	口径31.0	ヨコナデ	1mm以下の石粒 石英粒を多く含む	やや不良	赤褐色	
42回-1	36	I区 SK-01	高环 (土師器)	口径16.6 (くわね部径 2.8)	外面:ナデ?	石英、長石 風化物を少暈含む	やや不良	淡褐色	内面:丹塗り、暗文
42回-2	36	I区 SK-01	高环 (土師器)	口径18.0 (くわね部径 1.8)	环器外側:タチ方角ハケメ 内側:ヨコ方角ハケメ 环:脚接合部:ハメ	1mm以下の石粒 石英粒を少暈含み密	良好	淡赤茶色	
42回-3	36	I区 SK-01	高环 (土師器)	口径17.6 (くわね部径 3.4)	环器部、环-脚接合部: ハケメ 脚内面:シボリ その他:ナデ	2mm以下の砂粒を含み密	良好	茶黄色	
42回-4	36	I区 SK-01	高环 (土師器)	くわね部径 2.7	环-脚接合部:ハケメ その他:ナデ	2mm以下の砂粒を含み密	良好	外側:淡茶色、その他の内面:赤茶色	
42回-5	36	I区 SK-01	高环 (土師器)	口径18.0 (くわね部径 2.8)	ナデ	石英、長石 風化物を少暈含み密	良好	淡褐色	脚部外面に 黒斑
42回-6	36	I区 SK-01	高环 (土師器)	口径18.0 (くわね部径 2.8)	环-脚接合部:ハケメ 脚内面:シボリメ その他:風化のため不明	3mm以下の砂粒を含み密	良好	环と脚の接合部: 風化色、その他の内面: 茶黄色	环と脚の接合方法が分 かる資料
42回-7	36	I区 SK-01	長腰壺 (土師器)	口径 9.7 (最大径12.3 器高 5.1)	脚部外側:タチ方角ハケメ 内側:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	良好		全体に削離な つくり、内面に 擦痕が残る
43回-1	37	I区 SK-01	环身 (須恵器)	口径 9.7 (最大径12.3 器高 5.1)	脚部外側:ヨコヘラケズリ、白 土音、底部内面:ナデ も の他:回転ナデ	比較的大きい 石英、長石粒を 多く含む	良好	灰色	
43回-2	37	I区 SK-01	环身 (須恵器)	口径11.0 (直径 5.6)	底部外側:回転ヘラケズリ、 内面:ナデ その他:回転ナデ	褐色~1mm 下の黑色部、 以上~1mm セラミック部	やや不良	淡灰色	
43回-3	37	I区 SK-01	环身 (須恵器)	口径 10.2 (最大径12.7 器高 4.9)	底部外側:回転ヘラケズリ、 内面:ナデ その他:回転ナデ	石英、長石の 小粒を多く含む。 大きめの セラミック部	良好	灰色	
43回-4	37	I区 SK-01	壺 (須恵器)	口径11.6 (器高 4.5)	天井外側:回転ヘラケズリ、 内面:ナデ 天井部内面:ナデ その他:回転ナデ	石英、長石の 小粒を少暈含む	良好	外面:青灰褐色 内面:淡灰色	

測定番号	基準番号	出土地点	器種	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
43回-5	37	I区 SK-01 (須恵器)	壺环	口径11.7 高さ4.6	天井部外底:回転ヘラケ リ、回転ナデ その他:回転ナデ	長石・長英 の砂粒を多く含む	良好	外面:灰色 内面:青灰色	
43回-6	37	I区SK-01 (須恵器)	高环 (須恵器)	口径11.9 底径7.7 高さ8.5	环部外底下半分:回転ヘ ラケズリ 胎部外底:カ キメ その他:回転ナデ	石英・長石 の砂粒を多く含む	良好	青灰色	3方向1段 円形透し
43回-7	37	I区 SK-01 (須恵器)	高环	口径17.7 底径10.7 高さ13.8	环部外底下半分:カキメ その他:回転ナデ	1mm前後 の砂粒・ 長石粒	良好	灰色	3方向1段 三角形透し
46回-1	38	I区 SK-03 (弥生土器)	壺	口径37.0	外面:不明 内面:ヨコナデ	1mm以下 の砂粒を 多く含む	良好	淡赤桃色	
46回-2	38	I区 SK-03 (弥生土器)	壺	口径35.0	外面:ヨコナデ 内面:ハケメ	1mm以下 の砂粒を 多く含む	良好	淡褐色	
46回-3	38	I区 SK-03 (弥生土器)	壺		口縁部:ヨコナデ 胎部内面:ハ タケズリ 両面:ヨコナデ 胎部 外底:ヨコナデ テテ舌凹ハタケ	1mm程の 砂粒を 多く含む	良好	灰白色	頸部に指頭 圧痕突起
46回-4	38	I区 SK-03 (弥生土器)	底部	底径12.0	外面:不明 内面:ナデ	2mm以下 の砂粒を 多く含む	良好	外周:淡赤褐色 内面:淡赤褐色	
48回-1	38	I区 土器群 (弥生土器)	壺	口径29.0	外面:ハケメ 内面:ナデ	1mm以下 の砂粒を 多く含む	良好	淡灰色	
48回-2	38	I区 土器群 (弥生土器)	壺		外面:タチ方向ハケメ 内面:ヨコ方向ハケメ	2mm以下 の砂粒を 多く含む	良好	淡桃灰色	頸部に指頭 圧痕突起
48回-3	39	I区 土器群 (弥生土器)	底部	底径12.6	外面:ヘラミガキ 内面:ハケメ	1mm以下 の砂粒を 多く含む	良好	淡灰色	外周に炭化 物付着
48回-4	38	I区 土器群 (弥生土器)	底部	底径14.0	外面:ヘラミガキ 内面:ハケメ	1mm以下 の砂粒を 多く含む	良好	淡桃灰色	
48回-5	38	I区 土器群 (弥生土器)	底部	底径10.0	内外面:ヘラミガキ	1mm以下 の砂粒を 多く含む	良好	淡灰色	外周に炭化 物付着
50回-1	39	I区ピット群 ピット7	底部 (弥生土器)	底径4.2	外底:ヘラミガキ 底面:ナデ 内面:ヘラケズリ後ナデ	1mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	外面:墨灰色～ 淡赤茶色 内面:淡灰茶色	
50回-2	39	I区ピット群 ピット8	底部 (弥生土器)	底径14.8	外面:ヘラミガキ 底部:ナデ 内面:ナデ	2mm以下 の砂粒を 含む	良好	淡泊褐色	
54回-1	40	I区 E 3 S 12 埋土中	壺 (弥生土器)	口径31.0	ヨコナデ	1mm以下 の砂粒を 含む	良好	淡褐色	・圧痕突起 ・浮文
54回-2	40	I区 E 3 S 14 埋土中	壺 (弥生土器)	口径26.8	ヨコナデ	2mm以下 の砂粒を 含む	良好	淡灰白色	
54回-3	40	I区 E 3 S 12 埋土中	壺 (弥生土器)		ナデ	1mm以下 の砂粒を 多く含む	良好	淡桃色	
54回-4	40	I区 E 3 S 12 埋土中	壺 (弥生土器)	口径22.0	ヨコナデ	1mm以下 の砂粒を 多く含む	良好	淡灰白色	
54回-5	40	I区 E 3 S 14 埋土中	壺 (弥生土器)	口径16.6	外面:ヨコナデ 口縁部外底:ヨコナデ 内面底部以下:ヘラケズリ	2mm以下 の砂粒を 多く含む	良好	外面:淡茶褐色 内面:淡茶褐色	
54回-6	41	I区 E 3 S 14 埋土中	壺 (弥生土器)		口縁部:ヨコナデ 腹部外底:ハケメ 胴部内面:不明	1mm以下 の砂粒を 多く含む	良好	外周:淡灰白色 内面:淡灰色	
54回-7	41	I区 E 3 S 18 埋土中	壺 (弥生土器)	口径18.0	外底:ヨコナデ 口縁部内面:ヨコナデ 内面底部以下:ヘラケズリ	2mm以下 の砂粒を 多く含む	良好	外面:暗褐色 内面:淡褐色	外周に炭化 物付着

擇図番号	写真 回数	出土地点	器 様	法 量 (cm)	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
54図-8	41	I区 E 3 S 14 埋土中	壺 (弥生土器)	口径23.6	ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	淡灰白色	口縁部内面に波状文
54図-9	41	I区 E 3 S 18 埋土中	壺 (弥生土器)	口径24.6	外面：ナデ 口縁部内面：ヨコナデ 内面面部以下：ヘラケズリ	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	外面：淡青白色 内面：淡灰白色	
54図-10	41	I区 E 5 S 16 埋土中	壺 (弥生土器)	口径26.2	外面：ヨコナデ 口縁部内面：ヨコナデ 内面面部以下：ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を少々含む	良好	口縁部外面：第茶色 その他：灰白色	
54図-11	41	I区 E 3 S 14 埋土中	高环 (弥生土器)	口径18.2	ヨコナデ	石英・長石の微粒を少々含む	良好	淡褐色	
54図-12	42	I区 E 3 S 13 埋土中	高环 (弥生土器)	口径17.0 高さ7.5 底径11.35	ナデ？	1mm程の石英・長石を多く含む	やや不良	淡褐色	
54図-13	41	I区 E 3 S 16 埋土中	壺 (土器類)	口径16.4	口縁部外面～外底部：ヨコナデ 外面部内面以下：ナデ 内面：氯化のため不明	1mm以下の砂粒を含む	良好	外面：暗褐色 内面：淡褐色	外面に少量の炭化物付着
54図-14	41	I区 E 3 S 16 埋土中	壺 (土器類)	口径33.8	口縁部：ヨコナデ 内面面部以下：ヘラケズリ	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	外面：茶灰色 内面：茶白色	口縁部外面に少量の炭化物付着
54図-15	41	I区 E 3 S 14 埋土中	壺 (土器類)	口径20.0	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヘラケズリ 胴部外面：ハケメ	砂粒を含み密	良好	外面：赤茶色 内面：淡赤茶色	
54図-16	42	I区 E 3 S 14 埋土中	高环 (土器類)	口径19.8 高さ9.7 底径9.7	底部上半：ナデ 底部下半：ハケメ その他：ナデ	石英・長石・青白石の微粒を少々含む	良好	淡褐色	外面：丹塗り模
54図-17	42	I区 E 3 S 14 埋土中	环 (土器類)	口径12.1 器高 4.7	内面：ナデ	石英・長石の微粒を少々含む	やや不良	外面：灰 内面～底～淡褐色 内壁：墨塗り、繪文	
55図-2	42	I区 E 3 S 14 埋土中	环身 (須恵器)	口径12.6	底部外面：阿蘇糸切り 底面：回転ナデ後不整方向ナデ その他：回転ナデ	3mm以下の砂粒を少々含む	良好	青灰色	
55図-3	42	I区 E 3 S 14 埋土中	环蓋 (須恵器)	口径13.9 つまみ径3.65 底径3.0	天井部外面：回転ヘラケズリ その他の蓋：回転ナデ	石英微粒を少々含む	良好	灰色	「メ」状の ヘラ記号
59図-1	43	II区SI-01 埋土中	壺 (弥生土器)		外面：ヨコナデ 内面：風化のため不明	1mm程の砂粒を含む	良好	外面：茶黄色 内面：暗褐色	外面口縁部中央に黒色化物付着
59図-2	43	II区SI-01 埋土中	壺 (弥生土器)	口径19.2	内外面：ヨコナデ	1mm程の白色砂粒を含む	良好	外面：淡茶褐色 内面：黑灰色	
59図-3	43	II区SI-01 ピット 1	壺 (弥生土器)		外面：指突文 内面：ハケメ	1mm以下の砂粒を含む		外面：淡黄褐色 内面：淡灰色	
59図-4	43	II区SI-01 埋土中	底部 (弥生土器)		磨滅のため不明	2～5mmの大粒の白色砂粒を含む	良好	淡茶褐色	底部に穿孔がある
61図-1	44	II区SI-02 床面	壺 (弥生土器)	口径25.2	外面：磨滅のため不明 内面：ヨコナデ	1mm以下の白色砂粒を含む	良好	茶褐色	
61図-2	44	II区SI-02 埋土中	壺 (土器類)		外面：ヨコナデ 口縁部内面～内面面部以下：ヨコナデ 内面面部以下：氯化のため不明	黒色の粗砂粒を含む	良好	口縁部外面～内面：淡茶褐色、外壁面部以下：淡黃白色	
61図-3	44	II区SI-02 ピット 8	鼓形器台 (弥生土器)		外面：ヨコナデ 受易内面：ヘラケズリ その他の内面：ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡黄白色	
61図-4	44	II区SI-02 床面	鼓形器台 (弥生土器)	口径19.0	外底：ヨコナデ 底面内面：ヨコナデ その他の底面：ヘラケズリ 後面：タミガキ？	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡黄白色	
66図-1	44	II区 横穴石棺内	环身 (須恵器)	口径12.0 器高 4.9	底部外面：回転ヘラケズリ 回転ナデ 底面内面：ナデ その他：回転ナデ	1mm以下の砂粒を含み密	良好	淡灰色	

探査番号	実測 深度	出土地点	器種	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
66回-2	44	II区 横穴石棺内	坏身 (須恵器)	口径10.4 器高 4.9	裏部外面：回転ヘラケズリ、回 転ナデ 底部内面：ナデ そ の他：回転ナデ	1mm以下 の砂粒を 含み密	良好	淡青灰色	内面に黒い 炭化物
66回-3	44	II区 横穴石棺内	坏蓋 (須恵器)	口径12.8 器高 4.8	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	2mm以下 の砂粒を 含み密	良好	淡青灰色	内面に自然 釉がかかる
66回-4	44	II区 横穴石棺内	坏身 (須恵器)	口径14.0 器高 3.9	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 大井部内面：多方 向ナデ その他：回転ナデ	微砂粒を 多く含み 密	良好	淡青灰色	
66回-5	44	II区 横穴石棺内	壺 (須恵器)	口径 9.5 底径 6.0 器高14.0	口縁部：カキメ後ナデ 胴部：カキメ 腹部下半 ～底部：回転ヘラケズリ	1mm以下の 白色砂粒を 少々含み密	良好	黑灰色	
66回-6	45	II区 横穴石棺底部 埋土中	坏蓋 (須恵器)	口径 11.2 底径 7.1 器高 4.2	外側：ヘラケズリ後回転 ナデ 回転ナデ 内面：回転ナデ	1mm以下の 砂粒を多く 含み密	良好	淡灰茶色 内面：淡青灰色	
66回-7	45	II区 横穴前庭部	短瓶壺 (須恵器)	口径 9.4	口縁部外面：回転ナデ 腹部 外側：カキメ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	1mm以下の 砂粒を少量 含み密	良好	淡灰色	
66回-8	45	II区 横穴前庭部	壺 (須恵器)	口径 6.7 底径 4.5 器高 9.9	胴部下半：回転ヘラケズリ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を多く 含み密	良好	外側：白灰色。 淡黒灰色 内面：淡青灰色	「水」形の ヘア記号
66回-9	45	II区 横穴前庭部	坏 (須恵器)	口径 11.3 底径最大13.6 器高 4.3	底部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 腹部内面： ナデ その他：回転ナデ	1mm以下の 砂粒を多く 含み密	良好	外側：淡色。 内面：淡青灰色	
66回-10	45	II区 横穴前庭部	高壺 (須恵器)	口径15.4	回転ナデ	2mm以下の 砂粒を 多く含む	やや 軟質	外側：青灰白色 内面：青白色	ハサウエ工具によ る削り込み操作 後あり(おそらく 3月前)
66回-11	45	II区 横穴前庭部	壺 (須恵器)	口径 3.5 底径最大1.9 器高 4.4	脚部～脚部上半：回転ナデ 脚部巾位：カキメ 脚部下位：回転ヘラケズリ	密	良好	淡灰色	
66回-12	45	II区 横穴前庭部	坏环 (須恵器)	口径11.9 底径 5.4 器高15.8	脚部下半、脚の一部 その他：回転ナデ	密	良好	淡青灰色	
66回-13	45	II区 横穴前庭部	壺 (須恵器)	口径12.0 底径17.7	内面：口縁部外面：回転 ナデ 腹部上半： カキメ 腹部下半： 回転ヘラケズリ後カキメ	2mm以下の 砂粒を多く 含み密	良好	淡灰色	
67回-1	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径13.0 器高 4.0	大井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 天井部内面：多方 向ナデ その他：回転ナデ	2mm以下の 砂粒を 含み密	良好	外側：黒灰色。 淡紫色 内面：青灰色	外側半分程 自然釉がかかる
67回-2	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径14.2 器高 4.4	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 大井部内面：多方 向ナデ その他：回転ナデ	1mm以下の 砂粒を多く 含み密	良好	外側：淡青灰色。 黑色 内面：淡青灰色	
67回-3	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径12.5 器高 3.8	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	微小白色 砂粒を少 量含み密	良好	淡青灰色	
67回-4	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径13.4 器高 4.4	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	1mm以下の 白色砂粒を 含み密	良好	青灰色	
67回-5	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径14.4 器高 4.1	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 大井部内面：多方 向ナデ その他：回転ナデ	1mm以下の 砂粒を多く 含み密	良好	外側：淡黒灰色 内面：淡青灰色	外側に一部 自然釉がかかる
67回-6	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径12.4 器高 3.3	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 天井部内面：多方 向ナデ その他：回転ナデ	1mm以下の 砂粒を含み密	良好	青灰色	
67回-7	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径13.2 器高 3.9	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	微砂粒を 少量含み密	良好	青灰色	
67回-8	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径14.5 器高 3.8	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	1mm以下の 砂粒を少 量含み密	良好	青灰色	
67回-9	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径12.6 器高 3.3	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	1mm以下の 砂粒を少 量含み密	良好	青灰色	

測定番号	実測値	出土地点	器 様	法 直 (cm)	手 法 の 特 徴	胎 上	燒成	色 調	備 考
67回-10	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径13.0 器高 3.8	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナメ 天井部内面：多方 向ナメ その他：回転ナメ	微砂粒を 少量含み 密	良好	青灰色	
67回-11	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径14.2 器高 4.9	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナメ 天井部内面：ナメ その他：回転ナメ	1mm以下 の砂粒を 含み密	良好	淡灰色	
67回-12	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径12.7 器高 4.2	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナメ 天井部内面：多方 向ナメ その他：回転ナメ	1mm以下 の砂粒を多く 含み密	良好	青灰色	
67回-13	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径13.2 器高 4.0	大井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナメ 大井部内面：ナメ その他：回転ナメ	1mm以下 の砂粒を少 量含み密	良好	青灰色	
67回-14	46	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径13.6 器高 3.8	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナメ 天井部内面：ナメ その他：回転ナメ	微砂粒を 少量含み 密	良好	外面：暗灰色 内面：淡灰色	
67回-15	47	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径13.4 器高 3.5	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナメ 大井部内面：ナメ その他：回転ナメ	1mm以下 の砂粒を少 量含み密	良好	暗灰色	
67回-16	47	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径13.6 器高 3.8	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナメ 天井部内面：多方 向ナメ その他：回転ナメ	1mm以下 の砂粒を多く 含み密	良好	青灰色	
67回-17	47	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径13.8 器高 4.2	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナメ 天井部内面：多方 向ナメ その他：回転ナメ	1mm以下 の砂粒を 含み密	良好	外面：淡灰色 内面：青灰色	
67回-18	47	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径12.8 器高 4.4	大井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナメ 天井部内面：多方 向ナメ その他：回転ナメ	2mm以下の 砂粒を多く 含み密	良好	青灰色	
67回-19	47	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径13.7 器高 5.1	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナメ 天井部内面：多方 向ナメ その他：回転ナメ	1~3mmの 砂粒を少 量含み密	良好	淡灰色	
67回-20	47	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径12.5 器高 3.9	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナメ 天井部内面：ナメ その他：回転ナメ	微小白色 砂粒を少 量含み密	良好	暗青灰色	
67回-21	47	II区 横穴石棺北側	坏蓋 (須恵器)	口径12.9 器高 3.6	天井部外面：回転ヘラケズリ、 回転ナメ 天井部内面：多方 向ナメ その他：回転ナメ	微小白色 砂粒を少 量含み密	良好	暗青灰色	
67回-22	47	II区 横穴石棺北側	坏身 (須恵器)	口径 10.2 最大径13.4 器高 3.7	底部外面：底部ヘラケズリ、回 転ナメ 底部内面：ナメ そ の他：回転ナメ	1mm以下 の砂粒を少 量含み密	良好	青灰色	
67回-23	47	II区 横穴石棺北側	坏身 (須恵器)	口径 10.6 最大径13.4 器高 4.0	底部外面：回転ヘラケズリ、回 転ナメ 底部内面：ナメ そ の他：回転ナメ	小砂粒を 含み密	良好	暗青灰色	
67回-24	47	II区 横穴石棺北側	坏身 (須恵器)	口径 11.1 最大径13.7 器高 4.0	底部外面：回転ヘラケズリ、回 転ナメ 底部内面：ナメ そ の他：回転ナメ	1mm以下 の砂粒を少 量含み密	良好	青灰色	
68回-1	47	II区 横穴石棺北側	坏身 (須恵器)	口径12.0 器高 5.0	底部外面：回転ヘラケズリ、回 転ナメ 底部内面：ナメ そ の他：回転ナメ	1mm以下 の白砂粒を 多く含み密	良好	淡青灰色	
68回-2	47	II区 横穴石棺北側	坏身 (須恵器)	口径 12.2 最大径15.2 器高 4.4	底部外面：回転ヘラケズリ、回 転ナメ 底部内面：多方向ナ メ その他：回転ナメ	1mm以下 の砂粒を多く 含み密	良好	淡灰色	
68回-3	47	II区 横穴石棺北側	坏身 (須恵器)	口径 10.5 最大径13.3 器高 3.9	底部外面：回転ヘラケズリ、回 転ナメ 底部内面：多方向ナ メ その他：回転ナメ	1mm以下 の砂粒を少 量含み密	良好	青灰色	
68回-4	47	II区 横穴石棺北側	坏身 (須恵器)	口径 10.8 最大径13.9 器高 4.0	底部外面：回転ヘラケズリ、回 転ナメ 底部内面：ナメ そ の他：回転ナメ	1mm以下 の白色砂粒を 多く含み密	良好	青灰色	
68回-5	48	II区 横穴石棺北側	坏身 (須恵器)	口径 11.2 最大径14.0 器高 4.3	底部外面：回転ヘラケズリ、回 転ナメ 底部内面：ナメ そ の他：回転ナメ	1mm以下 の白色砂粒を 多く含み密	良好	青灰色	炭化物付着
68回-6	48	II区 横穴石棺北側	坏身 (須恵器)	口径 11.3 最大径14.6 器高 3.9	底部外面：回転ヘラケズリ、回 転ナメ 底部内面：ナメ そ の他：回転ナメ	1mm以下 の砂粒を多く 含み密	良好	外面：淡青灰色 内面：青紫色	炭化物付着

拂図番号	写真 説明	出土地点	器種	法景 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
68回-7	48	II区 横穴石棺北側	环身 (須恵器)	口径 19.6 最大径 13.7 基高 4.9	底部外面: 回転ヘラケズリ、回 転ナデ 底部内面: 多方向ナ デ その他: 回転ナデ	1mm以下の 砂粒を少量 含み密	良好	青灰色	
68回-8	48	II区 横穴石棺北側	环身 (須恵器)	口径 11.2 最大径 14.0 基高 4.6	底部外面: 回転ヘラケズリ、回 転ナデ 底部内面: 多方向ナ デ その他: 回転ナデ	1mm以下の 砂粒を少量 含み密	良好	青灰色	
68回-9	48	II区 横穴石棺北側	环身 (須恵器)	口径 11.2 最大径 14.0 基高 3.7	底部外面: 回転ヘラケズリ、回 転ナデ 底部内面: ナデ そ の他: 回転ナデ	微小白色 砂粒を少 量含み密	良好	暗青灰色	
68回-10	48	II区 横穴石棺北側	环身 (須恵器)	口径 12.0 最大径 15.0 基高 3.8	底部外面: 回転ヘラケズリ、回 転ナデ 底部内面: 多方向ナ デ その他: 回転ナデ	微砂粒を 少量含み密	良好	淡青灰色	
68回-11	48	II区 横穴石棺北側	环身 (須恵器)	口径 11.2 最大径 14.0 基高 3.8	底部外面: 回転ヘラケズリ、回 転ナデ 底部内面: ナデ そ の他: 回転ナデ	1mm以下の 砂粒を少量 含み密	良好	暗灰色	
68回-12	48	II区 横穴石棺北側	环身 (須恵器)	L1径 10.4 器高 3.4	底部外面: 回転ヘラケズリ、回 転ナデ 底部内面: ナデ そ の他: 回転ナデ	微小白色 砂粒を少 量含み密	良好	青灰色	
68回-13	48	II区 横穴石棺北側	环身 (須恵器)	口径 11.8 最大径 14.6 基高 4.2	底部外面: 回転ヘラケズリ、回 転ナデ 底部内面: ナデ そ の他: 回転ナデ	2mm以下の 砂粒を多く 含み密	良好	青灰色	
68回-14	48	II区 横穴石棺北側	环身 (須恵器)	口径 10.6 最大径 14.0 基高 3.6	底部外面: 回転ヘラケズリ、回 転ナデ 底部内面: 多方向ナ デ その他: 回転ナデ	微砂粒を 多く含み密	良好	青灰色	「メ」形の ヘラ記け
68回-15	48	II区 横穴石棺北側	环身 (須恵器)	口径 11.6 最大径 14.4 基高 4.3	底部外面: 回転ヘラケズリ、回 転ナデ 底部内面: 多方向ナ デ その他: 回転ナデ	1mm以下の 砂粒を多く 含み密	良好	外著: 黑色 淡灰色 内著: 淡灰色	外著一箇に 自然釉がかかる
68回-16	48	II区 横穴石棺北側	环身 (須恵器)	L1径 11.5 最大径 14.7 基高 3.8	底部外面: 回転ヘラケズリ、回 転ナデ 底部内面: 多方向ナ デ その他: 回転ナデ	1mm以下の 砂粒を少量 含み密	良好	青灰色	
69回-1	48	II区 横穴石棺北側	环身 (須恵器)	口径 10.8 基高 4.6	底部外面: 回転ヘラケズリ、回 転ナデ 底部内面: ナデ そ の他: 回転ナデ	微砂粒を 少量含み密	良好	外面: 晴灰色 内面: 淡灰色	
69回-2	48	II区 横穴石棺北側	环身 (須恵器)	口径 12.0 最大径 14.8 基高 4.7	底部外面: 回転ヘラケズリ、回 転ナデ 底部内面: 多方向ナ デ その他: 回転ナデ	1mm以下の 砂粒を多く 含み密	良好	淡灰色	
69回-3	49	II区 横穴石棺北側	提枢 (須恵器)	口径 13.7 器高 25.7	底部外面: 回転カキメ 反対回転カキメ	1mm以下の 砂粒を多く 含み密	良好	灰白色	内著(イタキ)と 上口(カキメ) に自然釉
69回-4	49	II区 横穴石棺北側	提枢 (須恵器)	口径 7.2 直径 4.8 基高 17.4	回転ナデ	密	良好	黑灰色	全体に自然 釉がかかる
70回-1	49	II区 横穴石棺北側	高坏 (土師器)	口径 12.3 底径 12.5	底内: ナデ(外著にハケメ?) 底部外面: ナデ 底部内面: ハラケズリ	1mm以下の 砂粒を多く 含み密	良好	淡褐色	坏部に赤色 顔料
70回-2	49	II区 横穴石棺北側	高坏 (土師器)	口径 12.3 底径 11.0 基高 12.7	底内: ハケメ後ナデ 底部外面、脚部外面: ナデ 脚部内面: ハラケズリ	1mm以下の 砂粒を含み密	良好	淡褐色	坏部に赤色 顔料
70回-3	49	II区 横穴石棺北側	高坏 (須恵器)	口径 11.6 最大径 9.7 基高 9.7	底部、脚部内面: 多方向ナデ その他: 回転ナデ	0.5mm以下の 砂粒を少 量含み密	良好	暗灰色	3方向2段 透し
70回-4	49	II区 横穴石棺北側	高坏 (須恵器)	L1径 16.4 底径 13.6 基高 15.6	脚部外面: カキメ後回転ナデ 底部外面: ハラケズリ 脚部下: 回転ナデ	2mm以下の 砂粒を少量 含み密	やや 軟質	灰白色	3方向2段 透し
70回-5	49	II区 横穴石棺北側	高坏 (須恵器)	L1径 10.4 直径 2.7 底径 9.8 基高 18.0	坏部: 回転ナデ 脚部: 回転ナデ、カキメ	密	良好	淡灰色	3方向2段 透し
70回-6	49	II区 横穴石棺北側	题 (須恵器)	口径 11.3 底径 4.0 器高 12.6	口縁部外面: 壁部上: 直軸 ナデ 脚部下: 回転ヘラケ ズリ 内面: 回転ナデ	微小白色 砂粒を少 量含み密	良好	淡黑灰色	
76回-1	52	II区 E 6 S 14 埋土中	题 (弥生土器)		内外面: ヨコナデ ・部壓痕のため不明	3mm以下の 砂粒を 多く含む	良好	黄白色	压痕突起

辨認番号	写真番号	出土地点	器種	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
76図-2	52	II区 E 4 S14 埋土中	甕 (弥生土器)	口径14.0	ヨコナデ	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	外面: 淡茶褐色 内面: 黄~灰褐色	外面に黒色の炭化物付着
76図-3	52	II区 E 4 S16 埋土中	甕 (弥生土器)		外面: ハケメ 口縁部内面: ヨコナデ 内面腹部以下: ハケメ	1~2mm程の砂粒を含む	良好	茶褐色	内面口縁部に一部黒斑
76図-4	52	II区 E 2 S14 埋土中	甕 (弥生土器)		ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	赤茶褐色	赤色顔料が残る
76図-5	52	II区 E 6 S16 埋土中	甕 (弥生土器)	口径26.4	内外面: ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	茶白色	
76図-6	52	II区 E 6 S14 埋土中	高环脚部 (弥生土器)	底径10.2	外面: ヨコナデ 内面: ハケメ後継くナデ、ヨコナデ	1mm以下の砂粒を少暈含む	良好	青褐色	黒斑
76図-7	52	II区 E 7 S15 埋土中	高环脚部 (弥生土器)	底径12.6	外面: ヨコナデ 内面: ヘラケズリ後ナデ	1mm以下の砂粒を少暈含む	良好	外面: 淡茶褐色 内面: 黑灰色	
76図-8	52	II区 埋土中	甕 (弥生土器)	口径21.6	内外面: ヨコナデ	1~2mm程の白色砂粒を多く含む	良好	外面: 茶褐色 内面: 淡茶褐色	
76図-9	52	II区 E 8 S12 埋土中	甕 (弥生土器)	口径15.2	内外面: ヨコナデ	1mm以下の砂粒を少暈含む	良好	外面: 増茶褐色 内面: 明茶褐色	外面に炭化物付着
76図-10	52	II区 E 6 S16 埋土中	甕 (弥生土器)	口径22.0	口縁端部: ヨコナデ 頸部: ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	口縁端部外面: 淡茶褐色 内面: 淡茶褐色 頸部: 茶白色	
76図-11	52	II区 E 20 S14 埋土中	甕 (弥生土器)		磨滅のため不明	1mm以下の白色砂粒を含む	良好	茶褐色	竹留文が残る
76図-12	52	II区 埋土中	甕 (弥生土器)	口径20.6	内外面: ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	良好	外面: 淡茶褐色 内面: 明茶褐色	
76図-13	52	II区 E 8 S12 埋土中	甕 (弥生土器)	口径22.0	内外面: ヨコナデ	1~2mm程の白色砂粒を多く含む	良好	茶褐色	外面に炭化物付着
76図-14	52	II区 E 4 S14 埋土中	甕 (弥生土器)		外面: ヨコナデ 頸部内面: ヘラミガキ その他の内面: ヨコナデ	1~2mm程の砂粒を含む	良好	灰褐色	
76図-15	52	II区SI-02 埋土中	甕 (弥生土器?)	口径18.0	外面: ヨコナデ 頸部内面: ヘラミガキ 頸部内面: ヘラケズリ	1mm以下の白砂粒を多く含む	良好	外面: 淡黄褐色 内面: 淡茶褐色	
76図-16	52	II区 E 20 S14 埋土中	甕 (弥生土器)	口径18.0	内外面: ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	黑灰色	外面に炭化物付着
76図-17	52	II区 E 20 S16 埋土中	甕 (土師器)	口径10.6	内外面: ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	淡赤茶色	
76図-18	52	II区 E 4 S14 埋土中	甕 (弥生土器?)	口径16.6	外面: ヨコナデ 口縁部内面: ヨコナデ 頸部内面: ヘラミガキ	1mm以下の白色砂粒を含み少	良好	淡赤褐色	
76図-19	52	II区 埋土中	高环 (弥生土器)		ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含み少	良好	外面: 淡茶褐色 内面: 淡茶褐色	外面に赤色顔料付着
76図-20	52	II区 E 20 S16 埋土中	高环 (弥生土器?)	くびれ部径 2.9	外面: ナデ	長石・石英・黑色砂粒を多く含む	軟質	淡褐色	円形孔が2つある
77図-1	53	II区 E 8 S12 埋土中	鼓形器台 (弥生土器)	口径16.5 底径12.7	両面部外面: ミガキ その他の外 面: ヨコナデ 上台面内面: ヨコナデ 下台面内面: ヨコナデ その他の内面: ヘラケズリ後ナデ	長石・石英・黑 色砂粒を多く含む	やや 不良	明褐色	外面: 赤色顔料を塗布
77図-2	53	II区 埋土中	甕	底径14.0	裏上面外面: ミガキ 方向ミガキ? 上台面内面: ヨコナデ 下台面内面: ヨコナデ その他の内面: ヘラケズリ後ナデ	1mm以下の砂粒を少暈含む	良好	淡茶色	

神園番号	写真 図版	出土地点	器種	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
77図-3	53	II区 E18S10 埋土中	鼓形器台 (弥生上器)	口径13.6	外面:ヨコナデ 内面:ヘラケズリ、ナデ	2mm以下の砂粒を含む	良好	外面:明茶色 内面:淡茶色	
77図-4	53	II区 埋土中	鼓形器台 (土器器)	口径16.6	外面:ヨコナデ 受部内面:ヘラミガキ? その他内面:ヘラケズリ	1mm程の砂粒を含む	良好	外面:淡茶白色 内面:明茶褐色	
77図-5	53	II区 E20S14 埋土中	鼓形器台 (土器器)		外面:ヨコナデ 内面:ヘラケズリ?	1mm以下 の砂粒を含む	良好	淡茶白色	
77図-6	53	II区 E10S16 埋土中	壺 (土器器)	口径10.8	外面:ヨコナデ 内面頸部以下:ヘラケズリ後ナデ その他の内面:ヨコナデ	1mm以下 の砂粒を含む	良好	赤茶色	
77図-7	53	II区 E20S16 埋土中	壺 (土器器?)	口径14.0	外面:ヨコナデ 内面頸部以下:ヘラケズリ その他内面:ヨコナデ	1mm以下 の砂粒を少 量含む	良好	淡黄色 内面:淡赤茶色	
77図-8	53	II区 E16S10 埋土中	壺 (土器器?)	口径15.4	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	2mm以下 の砂粒を多く含む	良好	淡黄色	
77図-9	53	II区 E20S14 埋土中	壺 (弥生土器?)		外面:ヨコナデ 内面底部以下:ヘラケズリ	1~2mm の砂粒を多く含む	良好	外面:黒褐色 内面:黄白色	
77図-10	53	II区 E20S16 埋土中	壺 (土器器?)	口径19.6	外面底部以下:ハタメ その他 内面:ヨコナデ 内面底部以下:ハタメ後ナデ 埋土内面:ヨコナデ その他内面:ナデ	3mm以下 の砂粒を多く含む	良好	明茶褐色 内面:黄白色	
77図-11	54	II区 E20S14 埋土中	壺? (土器器)	口径19.0	内外面:ヨコナデ	1mm以下 の白砂 砂粒を含む	良好	外面:乳褐色 内面:茶褐色	
77図-12	54	II区 E16S10 埋土中	壺? (土器器)	口径23.2	内外面:ヨコナデ	2mm以下 の砂粒を含む	良好	淡明茶色	
77図-13	54	II区 E20S14 埋土中	壺 (土器器?)	口径16.0	口縁部外面:ヨコナデ 口縁部内面:タナヒタハケメ 内面:ヨコナデ、ナデ	1mm以下 の砂粒を少 量含む	良好	口縁部外面:乳 茶褐色、内面 以下:茶白色、内 面:明茶褐色	
77図-14	53	II区 E4S14 埋土中	壺 (弥生土器?)		外面:ヨコナデ 内面:磨滅により不明	1mm以下 の白色砂 粒を含む	良好	内面:赤褐色 断面:茶褐色	
77図-15	54	II区 E4S16 埋土中	壺 (弥生土器?)	口径14.4	外面:ナデ 内面:不明	2mm以下 の砂粒を多く含む	良好	明茶色	
77図-16	54	II区 S10E20 埋土中	壺 (土器器?)	口径9.7	外面:ヨコナデ? 内面:ヨコナデ? 腹部内面:ヘラケズリ後ナデ?	2mm以下 の砂粒を少 量含む	良好	外面:茶白色 内面:淡灰色	
77図-17	54	II区 E8S12 埋土中	壺 (弥生土器)	口径18.6	内外面:ヨコナデ	1mmの白 色砂粒を多 く含む	良好	外面:暗茶灰色 内面:淡茶褐色、内 面:明茶褐色	
77図-18	54	II区 E8S10 埋土中	壺 (土器器?)	口径13.4	不明	1mm以下 の砂粒を多く含む	良好	淡黄色	
77図-19	54	II区 N8S12 埋土中	壺 (土器器)	口径21.6	外面:磨滅のため不明 内面:ヨコナデ	2mm以下 の白色砂 粒を含む	良好	外面:茶褐色 内面:淡茶灰色	
77図-20	54	II区 E8S12 埋土中	壺 (土器器)	口径18.0	磨滅のため不明	白色砂粒を多 く含む	良好	淡茶灰色	
77図-21	54	II区 E8S12 埋土中	壺 (土器器)	口径14.8	内外面:ヨコナデ	微砂粒を少 量含む	良好	淡黃茶色	
78図-1	54	II区 E18S14 埋土中	壺 (須恵器)	口径12.8 底径8.0 器高4.0	底部外面:回転糸切り 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	微小白色 砂粒を少 量含む	良好 堅緻	青灰色	
78図-2	54	II区 E20S14 埋土中	壺 (須恵器)	口径13.0 底径8.7 器高4.1	底部外面:回転糸切り 底部内面:ナデ その他:回転ナデ	微小茶色 砂粒を少 量含む密	やや 軟質	淡青灰色	

被災箇所番号	被災箇所	山土地点	器種	法 量 (cm)	手 法 の 特 徴	船 土	焼 成	色 調	備 考
78回-3	54	II区 E18S14 埋土中	壺 (須恵器)	口径12.0 底径8.0 器高3.9	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	表面な白色を 帯び、内部は 褐色を呈する 砂粒を少 量含む	やや 軟質	外面：青灰色 内面：淡青灰色	
78回-4	54	II区 E18S14 埋土中	壺 (須恵器)	口径12.0 底径8.6 器高3.6	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	1mm以下 の石英を 含む	良好 堅致	青灰色	
78回-5	54	II区 E18S12 埋土中	壺 (須恵器)	口径12.1 底径8.5 器高4.6	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	1mm以下の石 英を含む。3 mm位の砂粒を 少量化	良好 堅致	暗青灰色	
78回-6	54	II区 E18S14 埋土中	壺 (須恵器)	口径15.5 底径9.7 器高6.5	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	1mm程の 石英を含む	良好 堅致	外面：上部は淡青 色で下部は青灰色 内面：淡青灰色	
78回-7	54	II区 E18S14 埋土中	壺身 (須恵器)	口径12.0 底径4.7 器高4.1	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	表面な白色を 帯び、内部は 褐色を呈する 砂粒を少 量含む	良好 堅致	青灰色	
78回-8	54	II区 E18S14 埋土中	壺身 (須恵器)	口径12.6 底径8.0 器高3.9	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	表面な白色を 帯び、内部は 褐色を呈する 砂粒を少 量含む	良好 堅致	青灰色	
78回-9	55	II区 E18S12 埋土中	壺 (須恵器)	口径10.0 底径9.7 器高4.2	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	表面な白色を 帯び、内部は 褐色を呈する 砂粒を少 量含む	良好 堅致	青灰色～暗青灰色	
78回-10	55	II区 E18S14 埋土中	壺 (須恵器)	口径15.0 底径10.8 器高5.7	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	0.5mm程 の砂粒を 少量化	良好 堅致	口縁部：青灰色 底部：淡青灰色	
78回-11	55	II区 E18S14 埋土中	壺 (須恵器)	口径12.5 底径8.5 器高4.1	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	緻密	やや 軟質	淡青灰色	
78回-12	55	II区 埋土中	壺身 (須恵器)	口径10.1 底径6.5 器高3.7	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	表面な白色を 帯び、内部は 褐色を呈する 砂粒を少 量含む	良好 堅致	青灰色	
79回-1	55	II区 E18S14 埋土中	壺 (須恵器)	口径10.2 底径7.8 器高3.8	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	微小な白粒 を含み、褐色 を呈している	良好 堅致	青灰色	
79回-2	55	II区 E18S12 埋土中	壺 (須恵器)	口径12.8 底径9.5 器高3.0	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	1mm程の 砂粒を少 量含む	やや 軟質	淡灰色	
79回-3	55	II区 E18S14 埋土中	壺 (須恵器)	口径12.5 底径9.0 器高3.0	底部内面：ナデ その他：回転ナデ	1mm以下 の石英を 含む	良好 堅致	青灰色	
79回-4	55	II区 E18S12 埋土中	壺 (須恵器)	口径19.4 底径14.1 器高3.8	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm程の 砂粒を少 量含む	やや 軟質	淡青灰色	
79回-5	55	II区 E18S14 埋土中	壺 (須恵器)	口径15.5 底径12.0 器高2.2	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	3mm以下 の白色砂粒 を少量化	やや 軟質	淡青灰色	
79回-6	55	II区 E18S14 埋土中	壺 (須恵器)	口径13.8 底径9.0 器高2.5	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	微小な白粒 を含み、褐色 を呈している	良好 堅致	青灰色	
79回-7	55	II区 E18S14 埋土中	蓋 (須恵器)	口径18.8 器高3.4	天井部外面：回転ヘラケヅリ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	緻密	良好	淡青灰色	宝珠状つま み
79回-8	55	II区 E18S14 埋土中	蓋 (須恵器)	口径15.1 器高3.4	天井部外面：回転ヘラケヅリ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	1mm以下 の石英を 含む	やや 軟質	淡青灰色	宝珠状つま み
79回-9	55	II区 E18S14 埋土中	壺蓋 (須恵器)	口径14.8 器高3.5	大井形外側：回転ヘラケヅリ 大井形内面：多方向 ナデ その他：回転ナデ	表面な白色を 帯び、内部は 褐色を呈する 砂粒を少 量含む	軟質	口縁部：暗青灰色 その他の部分：淡青灰色	宝珠状つま み
79回-10	55	II区 E18S14 埋土中	壺?	(須恵器)	口径17.0	回転ナデ	緻密	良好 堅致	断面：灰褐色 その他の部分：青灰色
79回-11	55	II区 E18S14 埋土中	高杯脚部 (須恵器)		外面：回転ナデ	緻密	良好 堅致	3mm向切り 込み伏透し	

鉢器番号	発掘記録	出土地点	器種	法量(cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
83回-1	56	田区 北トレンチ 淡青色粘土上	深鉢 (弥生土器)		外面: ヘラ状工具による ケズリ後ナデ 内面: ナデ	2mm程の 砂粒を多 く含む	良好	黒灰色	
83回-2	56	田区(B) 黒灰色粘土上	甕 (弥生土器)	口径14.2	内外面: ハケメ	粗砂粒を少 量含む	良好	淡黒灰色	
83回-3	56	田区(B) 黒灰色粘土上	底部 (弥生土器)	底径 7.0	外面: ヘラミガキ 内面: ナデ	2mm以下 の砂粒を含む	良好	淡黒灰色	
83回-4	56	田区(B) 黒灰色粘土上	脚部 (弥生土器)	底径 6.0	外面: ナデ 内面: ヘラケズリ	1mm以下 の砂粒を含む	良好	淡灰白色	
83回-5	56	田区 青灰色粘土上	甕 (土師器)	口径17.0	ヨコナデ	1mm以下 の砂粒を多 く含む	良好	淡橙白色	
83回-6	56	田区 青灰色粘土上 (上部器?)		口径15.6	外面: ヘラミガキ? 内面: ナデ?	1mm以下 の砂粒を多 く含む	良好	淡橙灰色	
83回-7	56	田区 青灰色粘土上 (須恵器)	壺	口径12.0	底部外面: 回転糸切り 底部内面: ナデ その他: 回転ナデ	1mm以下 の砂粒を多 く含む	良好	淡黒灰色	
83回-8	56	田区 (須恵器)	壺	口径11.6	底部外面: 回転糸切り 底部内面: ナデ その他: 回転ナデ	1mm以下 の砂粒を含む	良好	青灰色	
86回-1		IV区SI-01 床面	甕 (弥生土器)	口径13.6	ヨコナデ?	1mm程の石 英・長石粒 を含み否	やや 不良	淡褐色	側部外に 炭化物付着
90回-1	56	IV区SI-03 埋土中	甕 (弥生土器)		外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ 内面頭 部以下: ヘラケズリ	1mm以下 の砂粒を多 く含む	良好	淡黄茶色 内面: 淡黒灰色	
90回-2	56	IV区SI-03 埋土中	甕 (弥生土器)		外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ 内面頭 部以下: ヘラケズリ	1mm以下 の砂粒を多 く含む	良好	淡黄白色 内面: 淡黄茶色	
90回-3	56	IV区SI-03 埋土中	器台 (弥生土器)		外面: ヨコナデ 内面: ナデ	1mm以下 の砂粒を含む	良好	淡黒紫色 内面: 淡黄茶色	
92回-1	56	IV区SI-04 ピット2	甕 (弥生土器)	口径18.0	ヨコナデ	1mm程の石 英・長石粒 を含み否	やや 不良	淡褐色	
92回-2	56	IV区SI-04 埋土中	甕 (弥生土器)		外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ 内面頭 部以下: ヘラケズリ	1mm以下 の砂粒を含む	良好	淡黄茶色 内面: 淡黄色	
92回-3	56	IV区SI-04 ピット6	短頸壺	口径 8.7 脚部厚19.1	外面: 不明 内面: ナデ 脚部内面: ヘラケズリ	1mm程の石 英・長石粒 を少量含む	やや 不良	赤褐色 内面: 淡褐色	口縁部に円 孔をもつ
95回-1	57	IV区 1号横穴 前庭部床面	壺蓋 (須恵器)	口径11.0 器高 4.0	天井部: ヘラ切り その他: 回転ナデ	1mm程の長 石粒を少量 含み否	やや 軟質	灰色	
95回-2	57	IV区 1号横穴 前庭部床面	壺蓋 (須恵器)	口径11.5 器高 4.5	天井部: ヘラ切り後ナデ その他: 回転ナデ	1mm程の 長石粒を少 量含む	やや 軟質	淡灰色	
95回-3	57	IV区 1号横穴 前庭部床面	壺身 (須恵器)	口径 9.7 受汁部厚 11.8 脚高 3.7	底部: 回転ヘラケズリ後 四輪ナデ その他: 回転 ナデ	黒色砂粒・ 石英・長石 の微粒を少 量含む	良好	淡灰色	「S」状の ヘラ記号
95回-4	57	IV区 1号横穴 前庭部埋土中	壺身 (須恵器)	口径 9.5 受汁部厚 12.0 脚高 3.8	回転ナデ	黒色砂粒・ 石英・長石 の微粒を少 量含む	良好	灰色	
95回-5	57	IV区 1号横穴 前庭部床面	壺身 (須恵器)	口径 9.0 器高 2.9	底部: 回転ヘラケズリ後 四輪ナデ その他: 回転ナデ	石英・長石 の微粒を少 量含み否	良好	灰色	
95回-6	57	IV区 1号横穴 前庭部床面	高壺 (須恵器)	口径 9.5 受汁部厚 12.5 脚高 3.8	底部: 四輪ヘラケズリ後 四輪ナデ その他: 四輪ナデ	長石微粒 を含み否	良好	淡灰色	

標図番号	写真番号	出土地点	器種	法量(cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
95図-7	57	IV区 1号櫻穴 前庭部床面	平瓶 (須恵器)	口径9.1、底径 14.5、高さ 16.4	底部下位:回転ヘラケズリ その他:回転ナデ	石英・長石 の微粒を多く含む	良好	灰色	肩部に円形 突起
95図-8	57	IV区 1号櫻穴 前庭部床面	平瓶 (須恵器)	口径7.7、底径 13.7、高さ 17.0	上縁部:回転ナデ 胸部上・中位:カキメ 胸部下位:回転ヘラケズリ	石英・長石 の微粒を少 量含む	良好	灰色	頭部に「人」 形のヘラ記 号
95図-1	59	IV区 E28S 2 地面上	罐 (須恵器)	口径9.25、 底径4.6、 高さ12.8	底部外側:回転ヘラケズリ 底内面:回転ヘラケズリ その他:回転ナデ	1mmの長石 を多く含む 6.5mmの 長石を多く含む	良好	灰色	
95図-2	59	IV区 E28S 2 地面上	長颈壺 (須恵器)	口径7.8、 底径4.8、 高さ14.3、 口径8.7	口部:青筋:回転ヘラケズリ 腹部:回転ヘラケズリ 底部下位:回転ヘラケズリ	石英・長石 の微粒を多 く含む	良好		「舟」形 の ヘラ記号
95図-3	58	IV区 E28S 2 地面上	壺 (須恵器)	口径12.8、 底径12.5、 高さ21.1 口径27.3	口部:回転ナデ 胸部:タタキ後カキメ	3mm以下 の砂粒を 含み密	やや 軟質	淡灰茶色	肩部に浅い ヘラ記号
95図-4	58	IV区 E28S 2 地面上	壺 (須恵器)	口径11.9、 底径11.6 高さ23.3 口径26.3	外周:タタキ後一面カキメ 内面:タタキ後内面:ナデ 底部:回転ヘラケズリ 底部外側:回転ナデ?	1mm以下 の砂粒を 含み密	やや 軟質	外面:淡茶灰色 内面:茶灰色	
95図-5	60	IV区 E28S 2 埋土中	低脚付坛 (須恵器)	口径9.55、 底径5.2、 高さ5.65	外部外面:回転ヘラケズリ その他:回転ナデ	石英・長石 の微粒を多 く含む	良好	灰色~黒灰色	
95図-1	59	IV区 E28S 2 埋土中	坏蓋 (須恵器)	口径11.4、 底径5.75、 高さ2.3	天井部外面:回転ヘラケズリ 天井部内面:ナデ その他:回転ナデ	陶粒~1mm の長石を含む 長石を含む	良好	外面:灰色 内面:淡灰色	
95図-2	59	IV区 E28S 2 埋土中	坏蓋 (須恵器)	口径12.3、 底径5.9、 高さ2.65	天井部外面:回転ヘラケズリ 天井部内面:多孔ナデ その他:回転ナデ	石英・長石 の微粒を多く 含む	良好	灰色~淡灰色	
95図-3	59	IV区 E28S 2 埋土中	坏蓋 (須恵器)	口径11.2、 底径5.1、 高さ2.8	天井部外面:回転ヘラケズリ 天井部内面:ナデ その他:回転ナデ	石英・長石 の微粒を多く 含む	良好	灰色	
95図-4	59	IV区 E28S 2 埋土中	坏蓋 (須恵器)	口径11.6、 底径5.2、 高さ4.5	天井部外面:回転ヘラケズリ 天井部内面:ナデ その他:回転ナデ	陶粒~1mm の長石を含む 長石を多く 含む	やや 軟質	灰色	
95図-5	59	IV区 E28S 2 埋土中	坏身 (須恵器)	口径10.4、 底径4.5、 高さ5.0	底部外周:回転ヘラ切り? その他:回転ナデ	石英・長石 の微粒を少 量含む	やや 軟質	淡灰色	
95図-6	59	IV区 E28S 2 埋土中	坏身 (須恵器)	口径9.9、 底径6.0、 高さ4.5	底部外周:ヘラ切り? その他:回転ナデ	石英・長石 の微粒を多 く含む	やや 軟質	淡灰色	
95図-7	59	IV区 E28S 2 埋土中	坏身 (須恵器)	口径10.7、 底径6.8、 高さ3.9	底部外周:ヘラ切り? その他:回転ナデ	石英・長石 の微粒を多 く含む	やや 軟質	淡灰色	
95図-8	59	IV区 E28S 2 埋土中	坏身 (須恵器)	口径10.2、 底径6.0、 高さ8.2	回転ナデ	石英・長石 の微粒を少 量含む	良好	淡灰色	
95図-9	59	IV区 埋土中	坏身 (須恵器)		回転ナデ	砂粒を少 量含み密	良好	灰白色	
95図-10	59	IV区 埋土中	坏身 (須恵器)		回転ナデ	砂粒を少 量含み密	良好	灰白色	
95図-11	60	IV区 埋土中	高台付坏	口径11.1、 底径8.6、 高さ5.1	回転ナデ	石英・長石 の微粒を少 量含む	良好	灰白色	
95図-12	60	IV区 E28S 6 埋土中	皿 (須恵器)	口径14.1、 底径11.9、 高さ2.1	底部外周:回転糸切り その他:回転ナデ	石英・長石 の微粒を少 量含む	やや 軟質	淡灰色	底部外周に 墨書きがある
95図-13	60	IV区 E28S 6 埋土中	壺 (土師器)	口径14.8、 器高13.0	上縁部:ヨコナデ 胸部外周上面:ヘラ ケズリ 底部内面下半:ナデ	6.5mmの 長石を 多く含む	良好	淡褐色	

宮内遺跡土製品観察表

検査番号	写真番號	出土地点	器種	法差 (cm) (全長×最大径×孔径)	重量 (g)	胎土	焼成	色調	備考
38回-3	35	I区 SK-02	土鍋	6.8×2.9×0.6~0.7	44.5	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	黒灰色	
40回-2	37	I区 SB-02 ピット5	土鍋	5.4×3.5×4.5	67.5	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	茶白色	
50回-3	39	I区 ピット群 ピット6	紡錘車	5.6×0.8×0.8	23.5	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	外面: 淡茶白色 内面: 灰白色	寄生擾転用
52回-1	40	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.45×3.75×1.0	48.1	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡褐色	
52回-2	40	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.75×3.4×0.9	46.8	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡褐色	
52回-3	40	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.5×3.65×0.9	46.4	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰褐色	
52回-4	40	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.6×3.75×0.95	50.5	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰褐色	
52回-5	40	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.6×3.4×1.0	42.5	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡褐色	
52回-6	40	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.75×3.6×1.0	50.9	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰褐色	
52回-7	40	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.2×3.6×0.9	45.5	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡褐色	
52回-8	40	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.35×3.55×1.0	46.3	1~2mm前後の砂粒を多く含む	良好	淡褐色	
52回-9	40	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.25×3.7×1.0	43.6	1~2mm前後の砂粒を多く含む	良好	平面: 淡褐色 平面: 暗灰褐色	
52回-10	40	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	3.95×3.45×0.95	33.4	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡褐色	
53回-1	39	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.5×3.7×0.95	49.0	1~2mm前後の砂粒を含む	良好	淡褐色	
53回-2	39	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.7×3.75×1.05	49.5	1mm程の砂粒を多く含む	良好	暗灰褐色	
53回-3	39	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.5×3.7×1.05	48.2	1~2mm前後の砂粒を多く含む	良好	淡褐色	
53回-4	39	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.7×3.6×0.95	50.1	1mm程の砂粒を多く含む	良好	平面: 灰褐色 平面: 淡褐色	
53回-5	39	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.4×3.6×0.9	48.2	1~2mm前後の砂粒を含む	良好	淡褐色	
53回-6	39	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.6×3.65×1.05	45.2	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	灰褐色	
53回-7	39	I区 E3S12 土鍋削り	土鍋	4.6×3.8×0.95	49.3	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	淡褐色	

辨図番号	写真 図版	出土地点	器種	法 量 (cm) (全長×最大径×孔径)	重量 (g)	胎 土	焼成	色 調	備 考
53図-8	39	I区 E 3 S 12 土縫割り	土 球	4.55×3.55×0.95	41.5	1~2mm前後 の砂粒を含む	良好	淡褐色	
53図-9	39	I区 E 3 S 12 土縫割り	土 球	4.1×3.6×1.0	45.2	1~2mm前後 の砂粒を含む	良好	淡褐色	
53図-10	39	I区 E 3 S 12 土縫割り	土 球	4.25×3.65×0.95	42.2	1mm程の砂粒 を含む	良好	灰褐色	
53図-11	39	I区 E 3 S 12 土縫割り	土 球	4.5×3.5×0.95	45.1	1mm前後の砂 粒を含む	良好	淡褐色	
53図-12	39	I区 E 3 S 12 土縫割り	土 球	4.2×3.55×1.1	43.5	1~2mm前後 の砂粒を多く 含む	良好	灰褐色	
53図-13	39	I区 E 3 S 12 土縫割り	土 球	4.1×3.7×0.95	44.7	1~2mm前後 の砂粒を多く 含む	良好	淡褐色	
53図-14	39	I区 E 3 S 12 土縫割り	土 球	4.1×3.6×0.9	44.5	2mm以下の砂 粒を多く含む	良好	暗灰褐色	
53図-15	39	I区 E 3 S 12 土縫割り	土 球	4.65×3.75×0.95	51.1	1~2mm前後 の砂粒を多く 含む	良好	上面: 暗灰褐色 下面: 淡褐色	
53図-16	39	I区 E 3 S 12 土縫割り	土 球	3.9×3.6×1.0	40.8	1~2mm前後 の砂粒を多く 含む	良好	淡褐色	
53図-17	39	I区 E 3 S 12 土縫割り	土 球	4.65×3.45×1.0	43.3	1~2mm前後 の砂粒を多く 含む	良好	半面: 淡褐色 半面: 暗灰褐色	
53図-18	39	I区 E 3 S 12 土縫割り	土 球	4.1×3.75×0.95	42.1	2mm以下の砂 粒を多く含む	良好	半面: 暗灰褐色 半面: 淡褐色	
53図-19	39	I区 E 3 S 12 土縫割り	土 球	4.6×3.65×1.15	44.4	2mm以下の砂 粒を多く含む	良好	半面: 暗褐色 半面: 淡褐色	
56図-4	43	I区 E 3 S 12 埋土中	纺錘車	5.1×2.7×0.55	85.2	2mm以下の砂 粒を少量含む	良好	淡灰白色	
56図-6	43	I区 E 3 S 14 埋土中	纺錘車	6.55~6.8×0.3~0.6	23.9	1mm以下の砂 粒を含む	良好	淡赤褐色	
99図-14	60	IV区 E 30 S 4 埋土中	土製支脚	底径: 9.0	623.1	2mm程の砂粒 を含む	良好	淡赤褐色	ナメ
99図-15	60	IV区 E 30 S 4 埋土中	土製支脚	底径: 8.0	586.2	3mm程の砂粒 を少量含む	良好	淡赤褐色	ナメ

宮内遺跡・埴輪観察表

辨図番号	写真 図版	出土地点	器種	法 量 (cm)	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
55図-1	42	I区 S 3 E 18 埋土中	円筒埴輪	L1径 底径 高さ 23.8 17.2 32.75	一回調溝: ナメ方斜ハケメ 二回調溝: ナメ方斜ハケメ 表面: ナメ方斜ハケメ	胎土: 1mm の石青粒、瓦 の石青粒を多 く含む	良好	淡橙褐色	底部調整を行 う

宮内遺跡石器観察表

捕獲番号	裏面	山土地点	器種	法基(全長×幅×厚さ) (cm)	重 量 (kg)	石 材	備 考
35回-1	35	I区SI-01 埋土中	石錐	(最大) 6.5×6.5×2.9	189.1	安山岩	
35回-2	35	I区SI-01 床面	石斧	5.7×2.7×2.25	28.7	凝灰岩	
48回-6	39	I区 土器群	蛤刃石斧	12.8×5.4×2.3	289.2	安山岩	
56回-1	43	I区 E 3 S 12 埋土中	石斧	12.1×5.8×4.4	336.9		
56回-2	43	I区 埋土中	管玉未製品	5.0×1.0×1.0	7.7	凝灰岩	
56回-3	43	I区 E 3 S 14 埋土中	石包丁?	18.0×8.5×3.0	437.9	玄武岩質安山岩	
56回-5	43	I区 E 3 S 15 埋土中	石錐	2.6×1.75×0.4	1.1	サヌカイト	
56回-7	43	I区 埋土中	管玉	1.6×0.4	0.4	碧玉	二方向から穿孔
61回-5	43	II区SI-02 埋土中	磨石	9.2×8.6×4.6	495.6	長石・石英が少量混じる	
80回-1	55	II区 埋土中	敲石?	9.3×8.1	528.4	安山岩	
80回-2	55	II区 埋土中	石錐	6.2×4.7~5.3	202.5		
80回-3	55	II区 埋土中	台石	10.8×8.5×5.2	829.6	石英ハニ岩	
88回-1	56	IV区SI-02 床面	研磨石	9.35×4.7×2.8	215.6	流紋岩	
88回-2	56	IV区SI-02 床面	石斧	6.6×4.2×1.2	51.7	流紋岩	
88回-3	56	IV区SI-02 床面	砥石	6.0×6.0×3.8	160.1	石英ハニ岩	
95回-9	57	IV区 1号横穴 前部埋土中	五作未製品	6.4×8.7×1.3	101.1	流紋岩	
97回-1	58	IV区 SX-01	石棺蓋石	24.0×20.0×10.0	4000.0	凝灰岩	
97回-2	58	IV区 SX-01	石棺蓋石	21.0×21.0×7.0	3100.0	凝灰岩	
99回-16	60	IV区 E 28 S 5 埋土中	石斧	9.2×6.2×4.2	379.8	センリョク岩	
99回-17	60	IV区 E 28 S 18 埋土中	石斧	5.1×5.0×2.7	98.8	安山岩	

VI 自然科学分析

宮内遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

1. 概要

須恵器の伝播・流通の研究はまず、地元の窯の製品が古墳・遺跡にどのように供給されているのかという問題を解明することから始まる。次いで、搬入品の須恵器がどの古墳・遺跡に送られていたのか、その時期はいつ頃かといった具合に進められる。

松江市を中心とした地域では、大井群（池ノ奥群を含めて）という山陰地域で最大とみられる須恵器生産工場があるので、地元産の須恵器がどのように供給されていたかが、まず、問題の中心となる。次いで、初期須恵器として全国各地の古墳から出土する大阪陶邑産の須恵器がどの古墳から出土するかといったことが問題になる。これまでのところ、これ以外の地域からの搬入品は全く検出されてはいない。

このようなこれまでの研究成果を背景として、宮内遺跡から出土した須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2. 調査方法

土器試料は表面を研磨してのち粉碎した。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3～5mmの鋳剤試料として蛍光X線スペクトルを測定した。

分析結果は表1に示されている。すべての分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値で表示されている。

これまでの研究結果からデータ解析法として、地元産か大阪陶邑からの搬入品かという2群間判別分析を行った。地元の母集団として、門生群、大井群、池ノ奥群を選択し、これに大阪陶邑を含めて、各母集団の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値を計算した。その結果は表1に示されている。

基礎データとして、全国各地の窯跡出土須恵器を分析した結果では、どの窯又は窯群（母集団、Xとする）についても、 $D^2_{(X)} \leq 10$ の領域に各母集団のサンプルの95%以上のものが分布した。 D は母集団（X）の重心からマハラノビスの汎距離である。したがって、逆に、古墳・遺跡出土の須恵器が母集団（X）に帰属し得るかどうかの判断の基準に窯出土須恵器のもつ所属条件を活用するこ

とができる。つまり、古墳・遺跡出土須恵器が母集団(X)へ帰属するための必要条件として、 $D^2_{(X)} \leq 10$ が採用される。さらに、十分であるためには、2群間判別の相手群(Y)から十分、距離を離さなければならない。この十分条件が $D^2_{(Y)} > 10$ である。この結果、古墳・遺跡出土の須恵器が母集団(X)に帰属するための必要十分条件は $D^2_{(X)} \leq 10$ 、 $D^2_{(Y)} > 10$ である。地元の窯群と大阪陶邑群との間では上記の必要十分条件がそのまま使えるが、地元の母集団間、たとえば、大井群と池ノ奥群とでは、両群の化学特性が類似しているため、相互識別は不完全となり、十分条件は使用できない。必要条件だけで産地を推定することになる。そのため、 D^2 の値がもっとも小さい母集団を以って産地とした。その場合には、 $D^2 \leq 10$ を満足する他の地元母集団も産地としての可能性はあることを断つておく。

3. 調査結果

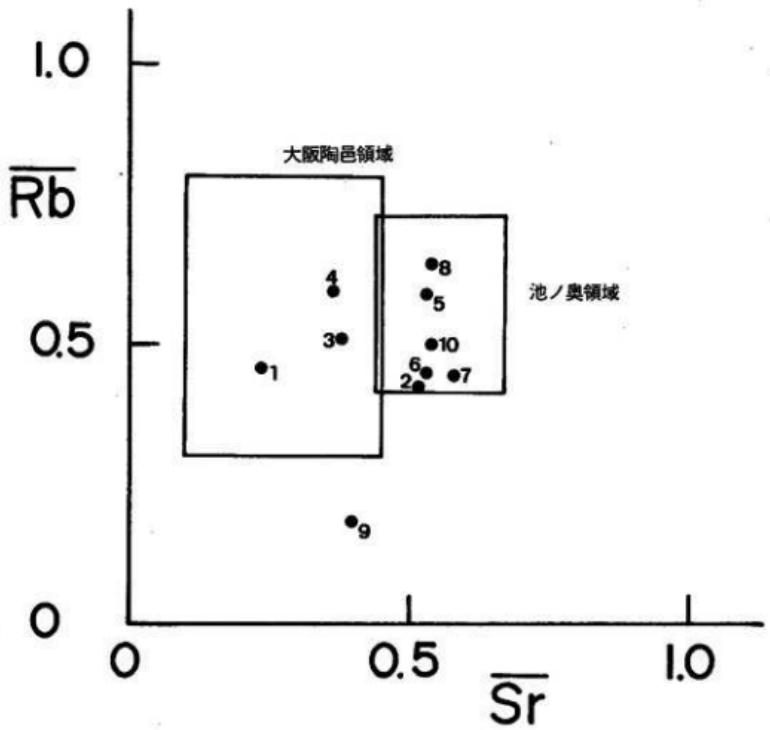
このような考え方で、表1を点検すると、大阪陶邑群に対して、 $D^2 \leq 10$ を満足するのはNo 1、3、4の3点で、これらは相手群、つまり、地元母集団に対して $D^2 > 10$ の値をもっていることがわかる。2群間判別分析において、産地推定のための必要十分条件を満足したことがわかる。したがって、これら3点は大阪陶邑群産と推定される。図1のRb-Sr分布図でも、これら3点は池ノ奥領域には分布せず、大阪陶邑領域に分布することがわかる。

No 2、5、6、7、8、10の6点はいずれも地元の3母集団の中では、池ノ奥群にもっとも近い。それで、これら6点の須恵器は池ノ奥窯群産と推定された。図1のRb-Sr分布図でも、池ノ奥領域によく対応していることがわかる。

No 9の墨書き土器の胎土は須恵器とは全く異なることは図1からも理解される。墨書き土器の化学特性は地元の土師器の化学特性と比較することによって、その産地についての情報は引き出せると思うが、今回のデータだけではこれ以上のことについて言及できない。

表1 宮内遺跡出土須恵器の蛍光X線分析値

	試 料 番 号									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
図版番号	43図-6	43図-3	43図-2	95図-2	98図-3	99図-3	99図-6	98図-2	99図-12	98図-5
器種	高 壱	壺 身	壺 身	蓋	壺	蓋	壺	壺	皿	壺の脚
K	0.330	0.363	0.405	0.412	0.475	0.391	0.399	0.539	0.259	0.432
Ca	0.079	0.188	0.122	0.100	0.182	0.154	0.188	0.175	0.258	0.160
Fe	2.75	2.08	1.75	1.59	1.39	1.81	2.03	1.78	5.11	1.89
Rb	0.456	0.434	0.508	0.595	0.591	0.438	0.444	0.643	0.182	0.497
Sr	0.243	0.521	0.379	0.365	0.528	0.528	0.580	0.543	0.403	0.544
備考	5C後半 ↓ 6C初頃	5C後半 ↓ 6C初頃	5C後半 ↓ 6C初頃	6C後半 ↓ 7C初頃	6C後半 ↓ 7C初頃	7C後半	7C後半	7C後半		7C後半
大阪陶邑	5.2	28	6.1	5.2	15	29	36	15	42	26
大井群	31	17	11	14	4.5	17	18	2.4	57	11
門生群	39	13	17	33	9.4	12	8.7	7.2	21	8.6
池ノ奥群	55	7.5	17	27	2.9	6.7	5.0	1.5	27	3.9
推定產地	大阪陶邑	池ノ奥	大阪陶邑	大阪陶邑	池ノ奥	池ノ奥	池ノ奥	池ノ奥	不明	池ノ奥



VII 小 結

1. 越峠遺跡

越峠遺跡では、弥生時代中期～古墳時代初頭の竪穴住居跡 6、7世紀前半～8世紀後半の掘立柱建物跡が検出された。

竪穴住居は、A区では丘陵上に 3 棟、B区では谷あいの緩斜面に 3 棟が存在し、小さな単位で散在しているようである。

平面形は、円形 2、隅丸方形 3、多角形（5 角形）1 である。越峠遺跡では、円形プラン（B区 S I -02）が弥生時代中期後葉には存在している。もう 1 棟の円形プランの住居（A区 S I -02）の時期は確定できないが、古墳時代前期まで残るのではないかと考えられる。A区とB区の調査結果を併せて考えると、円形プランの住居は弥生時代中期にはすでに存在し、隅丸方形の住居は弥生時代後期後半から現れ、古墳時代前期まで円形プランとともにつくられる。多角形の住居も弥生時代後期後半～古墳時代前期のある一時期に並存したのであろう。

竪穴住居の中で特に注目されるのは A区で検出された S I -02 である。直径 9.2m の円形住居で、床面積が 60m² を超える大形のものである。弥生時代中期～古墳時代前期の大形住居の例としては、鳥取県青木遺跡⁽⁷⁾、鹿足郡前立山遺跡⁽⁸⁾で床面積 50m² を超えると推定されるものが報告されているが、越峠遺跡で発見されたものはこれらよりさらに規模が大きい。この他、一つの竪穴住居跡にピットが 50 基以上検出される点も特殊であるが、出土遺物はごくわずかの土器片のみで、現時点でのこの住居跡の性格づけを行うのはきわめて困難であり、今後の資料の増加を待ちたい。

掘立柱建物跡は、A区東側斜面の 2 つの遺構面で 7 世紀前半～8 世紀後半の掘立柱建物跡 10 棟、B区で時期不明のもの 2 棟を検出した。この時期の掘立柱建物群は、松江市才ノ峠遺跡⁽⁹⁾、安来市高広遺跡⁽¹⁰⁾などで確認されており、広い平坦面をつくり、多数の建物を建てた A区東側斜面の状況は、才ノ峠遺跡⁽¹¹⁾のものに近い。西に隣接する岩屋口遺跡⁽¹²⁾でも古墳時代後期～平安時代の掘立柱建物跡群が発掘されており、さらに、帰属時期の検討を要するものではあるが、大原遺跡⁽¹³⁾で円面鏡、才の神遺跡⁽¹⁴⁾で縁釉陶器片、宮内遺跡⁽¹⁵⁾で墨書き土器といった注目すべき遺物が出土していることから、この一帯と、官衙などとの関係を示している可能性もある。

掘立柱建物跡の規模については、全て桁行 3 間以下、梁間 1 間で、柱穴間距離は 1.4～2.0m をはかり、特に大形のものは発見されなかった。

B区 S B -01・02 は、床面、ピットから遺物は出土していないが、S B -02 については、隣接する S D -01・02 と何らかの関連が考えられ、弥生時代中期頃に位置づけることが可能であろう。

以上のように、越峰遺跡では、弥生時代後半～古墳時代前期の竪穴住居跡、古墳時代終末～奈良時代の掘立柱建物跡の様相について注目すべき資料が発見された。岩屋口遺跡、才ノ神遺跡、高広遺跡など隣接する遺跡との関連の中で、評価する必要があろう。

2. 宮内遺跡

宮内遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡7、掘立柱建物跡2、横穴墓2、土壙3などで、さらに横穴墓からは馬具など注目すべき遺物も出土している。これらをテーマ別に分けて整理し、小結としたい。

(1) 竪穴住居跡・掘立柱建物跡

竪穴住居跡はI区で1棟、II区で2棟、IV区で4棟、掘立柱建物跡はI区で2棟、II区で1棟を検出した。

竪穴住居跡については、I区S I -01、II区S I -01が弥生時代中期、II区S I -02、IV区S I -01～04が弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。このうち、弥生時代中期に属する住居2棟の立地が標高4m以下の丘陵縁辺部である点が注目される。弥生時代の後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡は、II区S I -02やIV区S I -01・04のように丘陵上で発見される例が多く、中期から後期へ移行する中で、宮内遺跡においては、住居の立地も低地から丘陵上へ移動したことが推測される。

竪穴住居跡の構造では、丘陵斜面に立地する住居においては、後背側に平坦面をもつことが確認された。これは住居の築造過程でできるものか、意識的につくりだしているものなのか不明であるが、立地、住居の構造などを解明する上で、注目する点の一つであろう。

掘立柱建物跡については、I区S B -02が弥生時代中期と考えられるが、島根県は弥生時代の掘立柱建物跡の報告例は中国地方の中でも少なく、中期のものでは、西川津、布田、石台の各跡での検出例が知られているに過ぎない。⁶⁰近接するS I -01と時期的に重なっており、これとの関連を含めて、今後の課題となるものである。I区S B -01は8世紀後半と考えられるが、検出面の標高は3m以下で、かなり低地である、越峰遺跡、高広遺跡、才ノ神遺跡など、この時期の掘立柱建物跡は丘陵斜面をカットして住居をつくる例が多数見つかっているが、S B -01のような立地は余り知られていない。建物の時期の詳細な検討を進めて、丘陵斜面に設けられる建物跡との関連を考えていく必要がある。

(2) 横穴墓

横穴墓はII区とIV区で1穴ずつ確認されている。このうち、II区のものは形態、遺物など類例の少ないものである。

①IV区1号穴

広い前庭部をもち、それと比較すると玄室規模がきわめて小さい。玄室天井を平入りの屋根形に加工し、前庭部と羨道を明確に分けるなど、石棺式石室の影響を受けた形態をとる。

遺物は、前庭部床面から須恵器が出土し、玄室床面から人骨と、玄門付近の埋土中から獸骨の小片（シカないしイノシシ程度の大きさの動物のもの）¹⁹が検出されたが、この性格は不明である。岩屋口遺跡でも玄門付近の埋土中から牛骨が出土しており、類例の增加を待つて検討する必要がある。この横穴墓は、群をつくらず単独で存在する。宮内遺跡の東側200mに存在する白コクリ遺跡では15基が検出されているとの対照的であるが、出土遺物が少ないため、その理由を明らかにするのは困難である。これも今後の資料の増加に期待したい。

②II区1号穴

前庭部が比較的狭いこと、玄室規模が小さくドーム形の天井を呈すことなど古い様相を示し、後背墳丘については、後世の地形改変を受けているが、有していた可能性がある。

内蔵している石棺も各壁1枚を基本とする構成で、蓋石も厚い石材を用い、外面の平坦面も幅広く加工することから、古い様相を示しており、つくりそのものも石棺の前方に柱状の石を立てるなど入念なものである。石棺の前方に柱状の石を立てる例としては、県内では松江市御崎山古墳があり、県外では福岡県寿命王塚古墳²⁰のものに例がある。しかし、寿命王塚古墳は全長70mを超える前方後円墳で、埋葬施設の形態のみでII区1号穴と結びつけるのは性急であり、慎重な検討が必要である。

須恵器について見ると、壺身における口径の大小、壺蓋口唇部のつくりの違いなど、少なくとも2形式が存在するものと見られる。このうち、初葬時のものと考えられる最も古い型式の須恵器は、山陰須恵器編年III期のなかでも古く位置づけられ、高広遺跡における須恵器編年のI A期に相当するものと考えられる。したがって、II区1号穴は、横穴墓が出雲地方に導入された時期のものとされる中竹矢1号穴・2号穴、高広I区1～3号穴とほぼ同時期と考えられる。

馬具は、素環鏡板付轡、鞍金具（前輪、後輪）、壺鑑、銅金具、飾金具、鉄具が出土している。このうち、轡については、立聞孔が環体に接する長方形の立聞をもち、引手が軸に連結される点から長方形立聞a類III式に分類され、6世紀中頃から後半に位置づけられ、須恵器の示す年代と矛盾しない。類例は京都府湯舟坂2号墳玄室内出土の一例にあり、銅金具の形態も非常に似たものである。このほかの全ての馬具について出土例を調査することはできなかったが、例えば壺鑑の出土例は出雲市妙蓮寺山古墳²¹以外には知られず、鞍金具についても松江市岡田山1号墳、出雲市上塩治築山古墳²²など大きな墳丘をもつ首長クラスの古墳でしか出土例がない。

この他、石棺内から長さ約80cmの大刀や鉄鎌なども出土しており、豊富な鉄製品をもつ。

このような横穴墓の構造と出土遺物から、この横穴墓は、出雲地方の横穴墓導入期の一例であるとともに、横穴墓としては非常に優秀な副葬品をもつものであることがわかる。

また、この横穴墓も群を構成せず、単独で存在する。副葬品の優秀さと、人念な埋葬施設のつくりを考慮すると、この横穴墓の被葬者は、飯梨川以東における有力者の一人であり、首長クラスであった可能性もうかがわせる。

以上、住居・建物と横穴墓を中心にして宮内遺跡を概観した。住居では、弥生時代中期～古墳時代前期についての新しい資料を提供し、横穴墓では、導入期の横穴墓で優秀な副葬品をもつ例を見ることができた。しかし集落・横穴墓とも、隣接する大原、白コクリなどの遺跡でも数多く検出されており、これらとの関連を探ることによって、宮内遺跡の性格も解明されることと思われる。

註

- (1) 松本岩雄 「出雲・隨岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 1992年
- (2) 山本 清 「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』所収 1971年
- (3) 松江市教育委員会 「出雲国跡発掘調査概報」 1981年
- (4) 大谷晃二 『八雲漫遊日誌』に見る安来平野の横穴、『八雲漫遊日誌』『松江考古』第7号 1989年
- (5) 鹿島町教育委員会 「南講武草田遺跡」講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 1992年
- (6) 島根県教育委員会 「中竹矢遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』IV 1983年
- (7) 米子市教育委員会 「青木遺跡発掘調査報告書』I～III 1976～1978年
- (8) 島根県教育委員会 「前立山遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1980年
- (9) 島根県教育委員会 「才ノ峠遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』IV 1983年
- (10) 島根県教育委員会 「高広遺跡発掘調査報告書』 1984年
- (11) 島根県教育委員会 「一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査概報』 1992年
- (12) 島根県教育委員会 「大原遺跡」『島根県生産遺跡分布調査報告書』IV 1987年
- (13) 島根県埋蔵文化財調査センター大庭俊次氏の御教示による
- (14) 島根県教育委員会 「石台遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』VII 1989年
- 島根県教育委員会 「一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』VIII (布

田遺跡) 1991年

島根県教育委員会 「朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書」IV 1988年

(15) 鳥取大学医学部 井上貴央教授の御教示による

(16) (1)と同じ

(17) 勝部 昭 「御崎山古墳」「八雲立つ風上記の丘周辺の文化財」 1975年

(18) 梅原末治・小林行雄「筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳」 京都帝國大学文学部考古学研究報告第15冊 1915年

(19) (1)と同じ

(20) (6)と同じ

(21) (1)と同じ

(22) 花谷 浩 「素環鏡板書の編年とその性格」『山陰考古学の諸問題』 1986年

(23) 久美浜町教育委員会 「湯舟坂2号墳」 京都府久美浜町文化財調査報告 第7集 1983年

(24) 島根県教育委員会 「妙蓮寺山古墳発掘調査報告」 1964年

(25) 島根県教育委員会 「山雲岡田山1号墳」 1987年

(26) 山本 清 「築山古墳」『出雲市誌』 1951年

写 真 図 版

凡 例

• 54-12は本文第54図12



越峰A区 東側調査前



越峰A区 S I - 01完掘状況

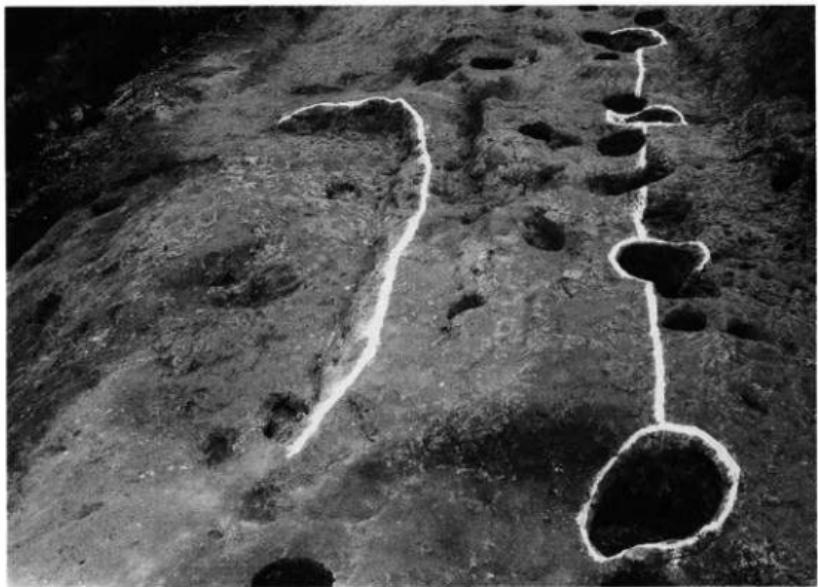
图版2



越峰 A 区 S I - 02 壑掘状况



越峰 A 区 S I - 03 壑掘状况



越峰A区 SB-01、SX-01完掘状況



越峰A区 SB-02・03・04完掘状況

图版4



越峰 A 区 SB - 06 • 07 完掘状况



越峰 A 区 SB - 08 • 09 • 10 完掘状况



越峰A区 段1 遗物出土状况



越峰A区 東側完掘状况

図版6



越峠A区 東側近景



越峠A区 調査終了後の全景



越峰 B 区 S I -01 完掘状况



越峰 B 区 S I -02 完掘状况

图版 8



越峰B区 S I -03完掘状况



越峰B区 S B -01完掘状况



越峰B区 SB-02、SD-01・02及び周辺ピット群完掘状況



越峰B区 SD-03・04及び周辺ピット群完掘状況



越峠B区 調査終了後の全景



越峠A区・B区 調査終了後の全景



9-1



9-2



12-6



12-5



12-7

越峰A区 S I -01 (9-1・2)、S I -02 (12-5~7) 出土遺物



12-1



12-2



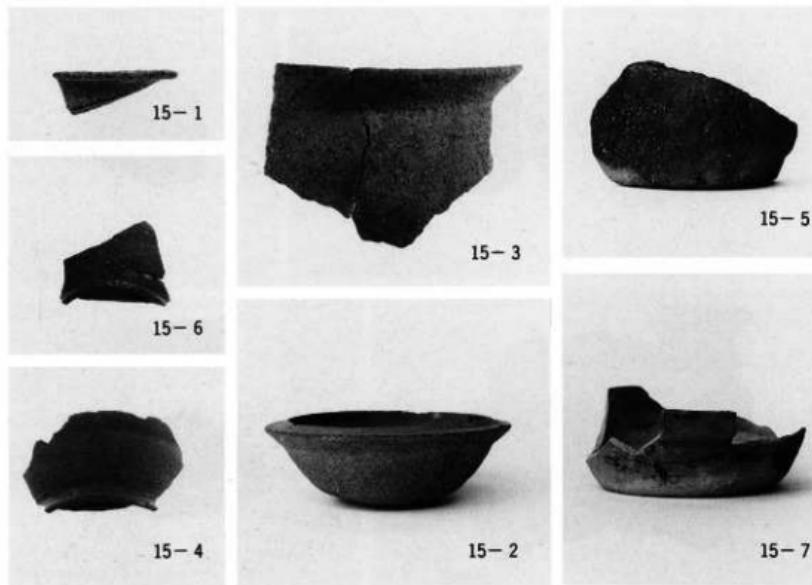
12-3



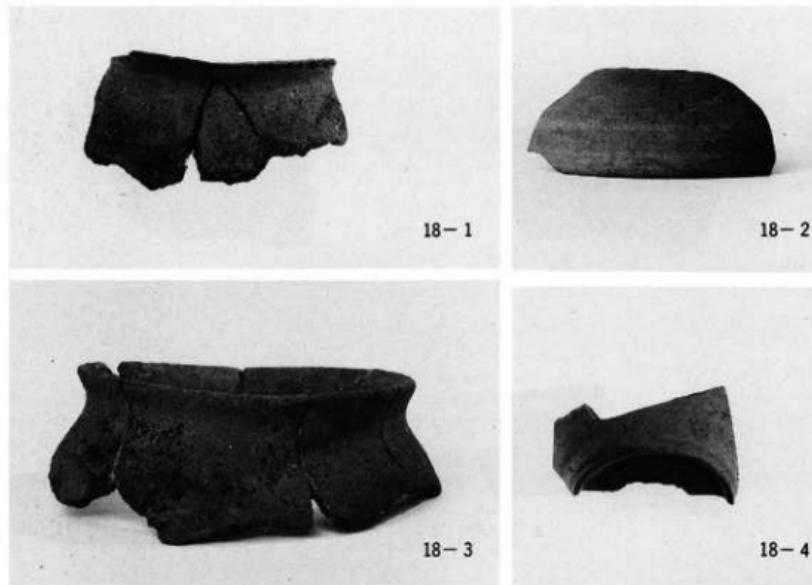
12-4

越峰A区 S I -03出土遺物

図版12



越峰A区 段4出土遺物



越峰A区 段1及び包含層中出土遺物



18-5



18-6



18-7



18-8

越峰A区 段1及び包含層中出土遺物



22-2



22-1



24-5



24-4



24-3



24-1

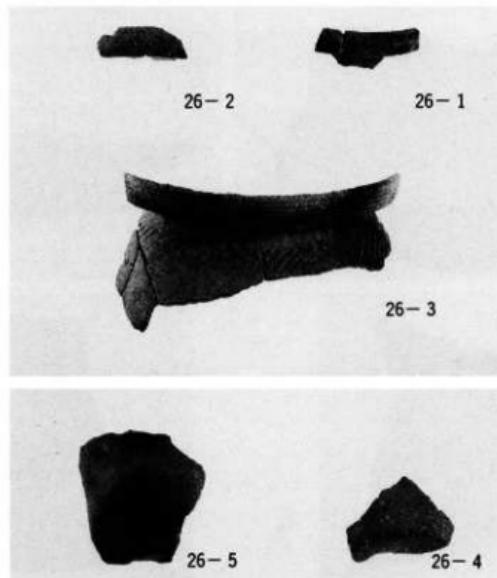


24-2

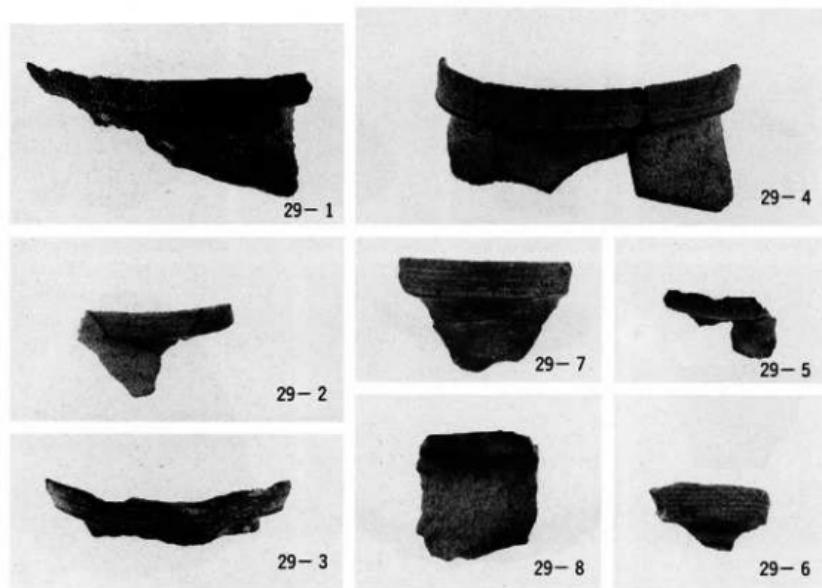


24-6

越峰B区 S I - 01 (22-1・2)、S I - 02 (24-1~6) 出土遺物



越峰B区 S I - 03出土遺物



越峰B区 S B - 02、S D - 01・02及び周辺ピット群出土遺物



29-9



29-13



29-11



29-10



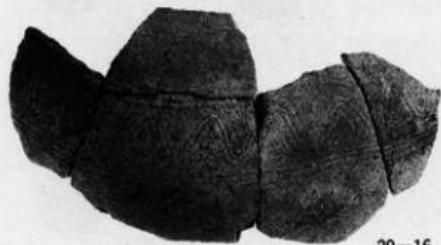
29-15



29-14



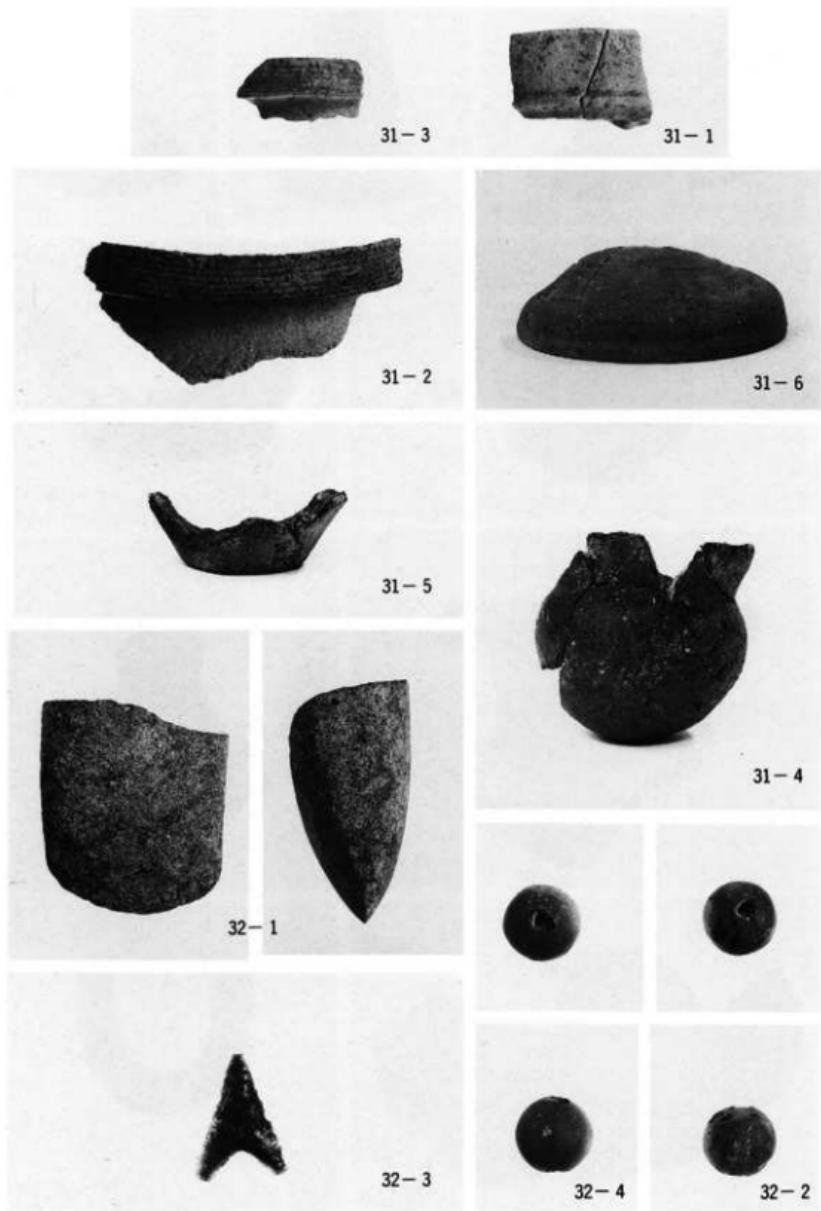
29-12



29-16



29-17



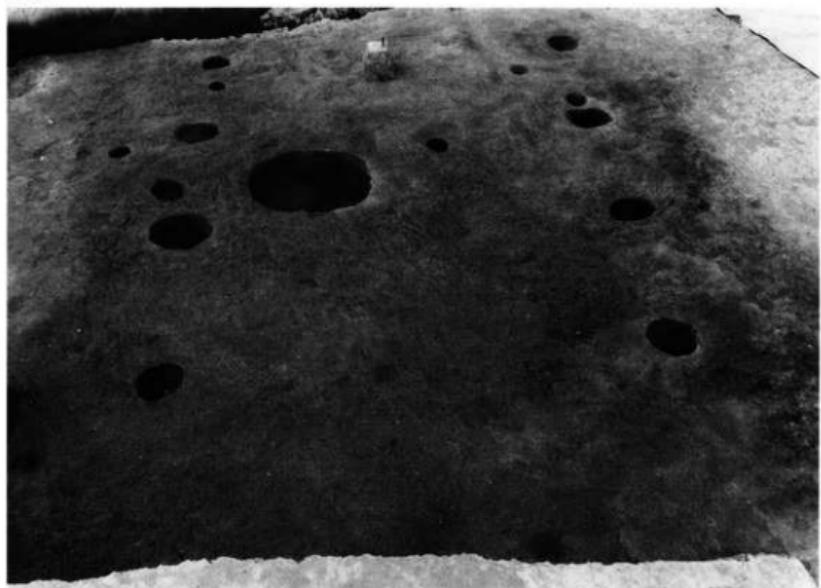
越蚌B区 包含层中出土遗物



宮内Ⅰ区 調査前



宮内Ⅰ区 S I -01完掘状況



宫内 I 区 SB-01、SK-02 完损状况



宫内 I 区 SK-01 遗物出土状况